
日陰貴族

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日陰貴族

【Nコード】

N7452W

【作者名】

黒轍

【あらすじ】

私オルカは、王城にて行儀見習いとして働く貴族の娘。事の始まりは盲目の男との遭遇。それを皮切りに引き出されたのは、絶望的な眼差しの上司に友人の無茶なお願い、そして父親の暴走。先行きなど全く見えて来ないが、今日も今日とて地味に暗中模索。これは阿保な彼女と盲目な彼が、じわじわ距離を詰めてくおはなし。

0・終章（前書き）

以前ゲーム用に考えていたものを小説にしてみました。
よろしくお願いいたします。

0・終章

「ルカ……！……オルカったら！！」

強く肩を揺さぶられて、私は意識を無理矢理引き戻された。

驚いて見上げたそこには、自分と顔・背格好が瓜二つの娘が私の顔を覗き込んでいる。

すぐに双子の妹であるカノンだと判断し、同時に少し苛立っているなあと、他人事のように思った。

「もう！さっきから呼んでるのにずっとぼーっとして……！」

隙なく化粧が施された彼女の顔は、続く言葉を発する前にしかめられた。

「また傷口のことを気にしているの？」

カノンの目線の先、また先程までの私の目線の先は、私自身の掌である。

そこには塞がっているのか塞がっていないのか、ぎりぎりのラインで、切り傷が刻まれていた。

大きさは5cm程で、その傷口は、例えば包丁を滑らせたような綺麗なものではない。まるで裂け目や亀裂のような形である。

私は今日何度目かはわからないが、改めてその傷口をしげしげと見つめた。

「思い出せないの。どうしてこんな傷がついたのかしら」

「……あなたお城から帰って来てから、口にするのはそればかりね」

カノンの声音から苛立ちは消えなかったが、同情が新たに混じった。

「何か大切なことだった気がするの」

「怪我の思い出だなんて、きつと碌なものじゃないわ。……ねえ、やっぱりあなた、お城で虐めに遭っていたんじゃないかって？」

「……………。わからない。でも、この傷を見ていると、とても大切にかけがえないものを忘れたような気になるの。苦しくて悲しいんだけど、愛しくて切ない、冷たくて熱い……そんな気分だわ」

するとカノンは黙り込んでしまった。

掌から目を離して、彼女の顔を窺うと、何やら複雑な表情を浮かべている。言いたいことを言うべきか言わぬべきか、逡巡しているようだ。

私はカノンの考察に興味がなかったため、更に言うところも予想がついたため、再び傷口に目を移す。

そして敢えて自分の感情を言葉にする作業を続けた。

「何で忘れてしまったんだろう。私の馬鹿」

「忘れてしまったものは仕方がないわよ」

カノンは複雑な表情の説明をすることはやめたようだ。

私は内心安堵する。

彼女が今私の部屋で何の用事で来たか、私はわかっている。

私の心の傷口には触れさせず、しかしその痛みを知ってもらうことが私の言動の動機である。

そうして、お互い素知らぬ振りで、全ての時間をやり過ごせれば良いと私は思った。

何も具体的なことは思い出せないにも関わらず、私にそんな行動を取らせる、この傷口はそれ程までに私に訴える力を持っていた。

「忘れるくらいなんだから、きつと大したことじゃあないわ」

カノンのその言葉はとても正しいことだと素直に思った。私以外のことに關しては。

だから同意する気も訂正する気も起きず、沈黙を保った。

「ねえところで、悪化してない？その傷」

「さあ……」

即答してからしまった、と思う。この質問を最初から見越していたかのようにないか。

しかしカノンはそんなことには気付かなかった。

「怪我也そうだし、記憶喪失もそうだし、なかなか治らないもののね」

単純明快な彼女の性格に、今程感謝したことはなかったかもしれない。

二人の間に居たたまれない空気が流れる前に、カノンは姿勢を正した。

「さあ、そろそろ時間よ。お父様が下で待ってるから、準備ができたら行くのよ。初めての縁談だから緊張するかもしれないけど、粗相のないように」

そう言い残すと、カノンはドレスを翻して部屋を出て行った。

1・ミルキア

『お姫様』。

一般女子であれば、この単語に憧れを抱いたことのある者は、少なくないのではなからうか。いやむしろ9割以上憧れたことがあるのではなからうか。

かくいう私も例外ではない。昔も今も、憧れを抱いている。

何故かというと、いち・お金に困らない、に・ちやほやされる、さん・何かきらきらしている、というものである。

本物のお姫様が聞いたら怒るだろうか。「まあ世間の認識はそんなものでしょう」と気にもしないだろうか。或いは「ええその通りですよ、おほほほほ」と嗤うのだろうか。

この国にお姫様は今現在存在しておらず、私は他国のお姫様と言葉を交わす機会もなかったので、本物のお姫様の心境は全くわからない。

しかし王城で侍女として働いてる昨今、実情がどうあれ、「ああここにいる理由が侍女でなくお姫様だから、だったらいいのに」と益々羨望を募らせるばかりだ。

何故かというと、それは最近付加された四番目の理由による。

よん・鬼上司に何度も呼び出されない。

「オルカ！オルカは何処ですか！」
「何でしょうか？ミルキアさん」

太陽の位置が随分と低くなった頃、私は本日二度目の呼び出しを食らった。

私はツエーヴラーグ城に行儀見習いとして勤めており、ミルキアさんは私の上司である。

彼女は黙っていれば相当端正な顔立ちを、そこまでしなくてもという程に歪めていた。

「あなた確か、先程まで会議室の清掃を行ってありましたわね？」

ミルキアさんの全身からは、凄まじい怒気、というか、殺気が放出されているが、近付いて来る物腰は大変優雅である。それがとても怖い。

「ええ。しておりました」

内心はがたぶるであるが、捻くれ者な私はそれを素直に表に出すことができない。こういう修羅場に限って飄々と答えてしまう癖がついていた。

「それは終わりましたの？」

「はい、終わりました。ので、今はこちらの廊下を手伝っております」

「そう、それは大変良い心がけだわ」

不覚ながら一瞬、『あら、珍しく勘違いかしら。あなたが大事な会議の時間が迫っているから、早く終わらせるようにって催促したんじゃないですかー。無駄に怖がらせないでくださいよぶっぷー』

などと思ってしまった私は、勿論馬鹿である。

「ところであなた、雑巾を一枚手に持っているようですね、他の掃除用具は如何なさいました？」

密かに嗤った内心の私が石化するのがわかった。

そういえばどうしたかしら、と考えれば、段々血の気も退いてくる。

「大変申し訳ございません。会議室に置き忘れました」

「そのようですね。早く取って来なさい」

「よろしいのですか？会議はもう始まっているかと……」

「わかつているようで何より。用具はわたくしが片付けておきました」

金糸で縁取られた碧眼を僅かに細めて、ミルキアさんは淡々平然と言う。

本気で私を行かせて恥をかかせようとしたのか、それとも私が失敗を正確に理解しているか試すつもりだったのか。ミルキアさんは厳しいが、意地悪なわけではないので、後者だとは思う。というか、思いたい。今現在もミルキアさんは、私の「できるなら関わりたくない人」ランキングの三位くらいにはいるわけだが、彼女の邪悪な性質まで認識してしまったなら、私は間違いなく行儀見習いを中退させていただく。

ミルキアさんは私からどう思われているかなど承知の上だろうが、表向きには、やはり消極的な感情を出すわけにはいかない。

私は出来る限り安堵が伝わるように微笑んだ。

「ありがとうございます。本当に良かったです」

しかしこの美人上司は、そんな私の努力を汲む気はさらさらないらしく、「何が良かったというのです」とこちらを睨んだ。

「言っておきますけれど、わたくしがあなたの失態に気付いたのは会議が既に始まった後です」

あ、やっぱりそうだったんだ、と私は不真面目に思った。
でないと、流石のミルキアさんもここまで殺気を露わにしないだろう。

「そして勿論あなたも存じているでしょうが、本日行われたのは三国首脳会談です。あなたは他国にまで恥を晒したのですよ」

「申し訳ございません……」

駄目押しがずんずん重なると、何故だか妙な余裕が出てくる。

私は各国のお偉方のお白い目線を浴びつつ、掃除用具を片付けるミルキアさんの図を、つい思い浮かべた。

これが私であれば、脳内には「な・ん・で・わ・た・し・が」という言葉が延々と流れ続け、怒りという単純な感情のみが支配したのだろう。

しかし真面目なミルキアさんの心情を察するに、きつと「部下の失態はわたくしの責任……」と考え、より一層複雑な気分になっていそうだ。

頭の良い人間になるものじゃあないわね、と現実逃避に結論付けをした。

ミルキアさんは悩ましげにこめかみを揉む。

「一体今までに何度あなたを呼び出したことか……」

今日はまだ二度目ですよ、などとは、口が裂けても言っ
てはいけ
ない。

「良いですか。あなたがお仕えしているのは、イーデル陛下その
人なのですよ。そのことを常に自覚し、緊張感を持って仕事に当た
ってください」

「はい……」

私は神妙に頷いた。

「確かにあなたは貴族の令嬢です。しかしここで働く以上は、求め
られることは平民出の侍女達と同じです。甘い気持ちでできるとは
思わぬように」

「はい」

会話が途切れると、ミルキアさんは姿勢を正し、聡明そうな眼差
しを改めて私に向けた。

彼女ははじめや切り替えがきちんとしており、気持の良い人間だ
と、他の侍女達から好かれている。

私のような他称問題児ちゃんにとってはとても「好き」とは言い
難い人種なのであるが、私もその点は尊敬している。

「では次の仕事です。東庭園に行って、庭師に花材を貰って来て頂
戴。それをアリシアのところに届けてほしいの。庭師にはアリシア
の名前を出せばわかるはずだから」

「はい。行って参ります」

わたしがへこりとお辞儀をすると、ミルキアさんは小さく頷き背
を向けた。

そしてまた音なく遠ざかっていく。

私は持っていた雑巾を同僚に預けると、そそくさと東庭園に向かった。

2・騎士

私は一階まで階段を降り切ると、渡り廊下を伝うようにして東庭園に向かった。

傾いた陽光が宮殿内を柔らかく染め上げている。

私はまたしても、自分がお姫様だったらなあ、と心の中で独りごちた。

お姫様だったら、この景色をのんびり眺めていられるのに。

東館を裏口から外に出ると、小さな広場の向こうに庭園の柵と門が見えた。

門の傍には一人の騎士が突っ立っている。

人待ちか休憩かな、と思いつつ、私は小さく会釈して通り過ぎようとした。

すると唐突に肩を掴まれた。

同時に野太い、少し掠れた声が響く。

「おーいおいおい。お嬢ちゃん、どこに行くつもりだ？」

まさか声をかけられるとは全く想定していなかったなので、私は返事をするよりも先に、まじまじと相手の顔を見てしまった。

男は大抵の騎士の例に漏れず精悍な体つきをしているが、姿勢が悪く、どうにも頼りない雰囲気醸し出している。緑を基調としたツェーヴラーグの騎士の制服は本来かなり格好良い。はずなのだが、この男が着ているものは、目立った皺がないにも関わらず、何だかくたびれて見える。寝ぐせの立った髪は焦げ茶と薄茶が混ざってお

り、目は桃色。眠たげな瞼がやや下がり気味。

今見たかんじでも十分背が高いので、きちんと背筋を伸ばせばかなりの巨漢ではなからうか。

低い声やら鍛え上げられた体やら大きさは、よくよく見れば強そうなステータスを持っている。持ってはいるが、その印象を凌駕する程に、「だるそう、めんどくさそう」という空気を遺憾なく発揮している男であった。

ついたつぷり時間をかけて観察してしまい、恥ずかしくなったが、男のほうは特に気にしている様子がない。ずっとこちらをぼんやり見つめている。この人目の焦点合っているのだろうか。

何だか素直に答えるにはとても今更なタイミングだが、私は男に向き直った。

「この奥に行くつもりです」

「何をしに？」

少し不審に思った私は、咄嗟に黙りこむ。

今まで城内の騎士達に話しかけられることなど滅多になかったこともあるからかもしれないが、それはさておきこの人自身がどうも胡散臭い。

もしかして新手の軟派なのだろうか。

「……あんた今物凄く失礼なこと考えてないか？」

私の疑わしげな視線がばれていたらしい。まあいいや。

「あのな、ここから先は関係者以外立ち入り禁止区域だぞ」

予想だにしていなかったことを告げられ、私は目を瞬かせた。
東庭園が立ち入り禁止などとは、聞いたことがない。

「俺はこの門番。……本気で知らなかったって顔だな」

「知りませんでした。ここに来るのは初めてだし、そんな話聞いたこともなかったし……」

「何かの間違いじゃないか？あんたこの先に何かがあるか知っているのか？」

「庭、ですよね」

私が答えると男は口を閉じた。

彼のだるそうな雰囲気とその心中を隠しているようで、何を思っ
て沈黙したのかがわからない。トランプに強そうな人間だ。

「本当に何をしに来た？」

眠たげな目が、心成しか鋭くなったようだ。

何やら危うい状況になった気がして、私は正直に答えることにし
た。

「庭師から花材を受け取りに来たのです。それを、生けるのが得意
なアリシアという侍女に届けると、そう言われました」

「庭師？ハイネに用があるのか？」

「ハイネさんというのですか？名前などはお聞きしておりませんで
したが」

「一体誰に頼まれたんだ？」

「ミルキア、という名の侍女です」

ミルキアさんの名前を出すと、彼はこれまでの問答が嘘のように得
心したようだった。

「ミルキアか。一応聞いておくが、家名は？」

「……ミルドボーズ、だったでしょうか」

「……ミルドローズな」

「ああ、そんな気がします」

ミルキアさんのことを思い出すと、何だか落ち着かなくなってきた。

アリシアさんが今どんな状況で花材を欲しているのかは知らないが、もしかしたらかなり急ぎのことだったかもしれない。

そうだとしたら、本日三度目の大目玉となる。

「あの、もうよろしいでしょうか？こんなところで油売つてると、ミルキアさんに怒られる可能性があるのですけれど。そうなった場合あなた様に責任転嫁してもよろしいでしょうか」
「う。それは勘弁してくれ。通っていいぞ。あんた嘘が吐けなさそうだしな」

最後の言葉は褒め言葉として受け取っておこう。

私はだるそうな騎士に再度会釈すると、門をくぐった。

3・弱虫

門をくぐると、人が一人通れるくらいの狭い道が奥へと続いていた。

道の左右には色とりどりの草花がほぼ対称に植わっている。ハーブも混じっているらしく、私は早足で道を行きつつ、庭園を視覚と嗅覚で楽しんだ。

しかし歩を進めるにつれ、段々その余裕がなくなってきた。歩く速度は徐々に遅くなり、終いには立ち止まる。

これって本当に、「庭園」？

私の歩くその場所は、王宮内の庭としては実に広いわりに、実に平易なデザインだった。

私が歩く真っ直ぐな小道、そこから時々分岐する同じ狭さの道、左右対称の草花、道から少し離れた場所には左右対称ではなくも、やはり同じような背丈の同じような草花が植えられ、庭園の両脇からは薄暗い森が続く。

「東庭園」などという名前で呼ぶよりは、普通に「道」、或いは「畑」と呼ぶほうがしっくりくる気がする。

加えて、庭師どころか人っ子一人見当たらない。

関係者以外立ち入り禁止区域だそうなので当然なのかもしれないが、いい加減誰が現れてくれないと不安になってくる。

ミルキアさんは何故、敢えてこの庭園を指定したのだろう。ツェーヴラーグ城には他にも幾つか主要な庭園が存在する。

全てを見たことがあるわけではないが、例えばこの間目にした南庭園などは、広さはここより大分劣るものの、花の種類などは倍以上の種類があったように感じる。

それとも、この立ち入り禁止区域だからこそ手に入る貴重な植物などがあるのだろうか。

もしくは、この先に本当の東庭園がある、とか？

脇の森を別にすれば、背の高い植物などは植わっていないので、他の小道に誰かがいても見つけられるはず。

そうすると、いるとしたらやはり奥だろう。

進むべきか戻るべきか決めあぐねていると、前方から砂利を踏む音が聞こえてきた。

私は心底ほつとした。

やって来る人物を見るに、少なくとも庭師ではなさそうだ。

痩身の男で、仕立ての良さそうなスーツを着ている。

遠くからぱつと見たかんじでは、学者や研究者関係かな、と目星をつけた。

どんな人種であれ、これで情報収集できそうだ。

私は進むか退こうか迷い立ち止まっているところだったので、彼がこちらに来るのをそのまま待つことにした。

男は急いではないようで、むしろ歩みの速度はかなり遅い。

まあ忙しくしていないというのは、こちらにとっては好都合である。

ずっと見つめているのも失礼だと思った私は、そつぽを向きつつ、聴覚を男のほうに集中させた。

静かに砂利を踏む音は、ゆっくりではあるものの、確実にこちら

に近付いてくる。

そろそろ止まるだろうか、いや、まだだ。
まだ？

あれ、足音の他にも、何かを小刻みに叩くような音が聞こえる。
え、まだ寄ってくるの？

この道幅では明らかに、私が体勢を変えない限り、二人がすれ違
うことなどできない。

流石にこれ以上迫られるとぶつかる、というところで、私は我慢
できず振り向いた。

同時に私の靴に、こつ、と軽い衝撃が加わる。男の歩みも漸く止
まった。

眼前の男は、私と比べれば頭ひとつ分高かったが、男性の中では
少し小柄なほうだ。そして遠目でもわかったが、近くで改めて見て
も、細い。「がりがり」の一步手前くらいではなかるうか。

肌は白い。こちらは「青白い」の一步手前といったところか。

きめ細かな銀の髪や、量や長さをとっても申し分ない銀の睫毛は、
女性として大変羨ましいと思った。顔の造りも中性的とまではいか
ないまでも、「格好良い」というよりは「綺麗」という言葉が似合
う。

軽く押せば倒れそうな、そよ風が吹けば飛んで行ってしまいそう
な、霧がかかれば塵と化して消えそうな、そんな儚い印象を持たせ
る男である。

そしてそれらを差し置いても目立つのは、その目と、私の靴に触
れた杖だった。

彼の瞳は水色だが少し濁っていて、そして虚ろである。先程の騎士とは比べ物にならないくらいにはつきりと、その目は焦点が合っていないことがわかる。これは精神的なものではなさそうだ。

手に持つ杖は、例えば老人の持つそれより二分の一程細いようだ。持ち手は金銀宝石類で装飾されており、それを包む指は、少し退いてしまう程細長かった。

生気のない目に、支えることだけを目的としているのではなさそうな杖。

この二点が示すところは明らかだ。

彼は、光のない生活を送っているのだろう。

「知らぬ者のようだが、誰だ？」

ふいに男の薄い唇から静かな声が発されたので、私は肩を上げた。彼が言葉を発する生き物だと認識できていなかったようだ。

「オルカ・ユーデイスと申しまして、侍女として働いている者です」

目が見えていないにも関わらず、初対面だということに彼は気付いている。

ある感覚を失った人間は、他の感覚がずば抜けて発達することがある、と聞いたことがあるが、この男もそうなのかもしれない。

それでも流石に、エプロンやメイドキャップは嗅覚や気配ではわからないだろうと思い、私は自分の職業も告げた。

男は小さく頷いた。

「何の用だ？」

来るだろうなと思っていた質問はやはり来たが、彼の声音に不審がつているような響きはない。

別に関心したいことは全くしていないのだが、普段責められることが多いだけに、私は少し拍子抜けした。

「ミルキア・ミルドボーズ、という侍女に頼まれました、庭師から花材を受け取りに参りました」

「……ミルドボーズではなく？」

「あ、そうでした」

またやってしまったと、心の中で舌を出す。

普段から「ハゲろ」とか念じていると、こういうときに表れてくるのかもしれない。

男は表情を変えることなく続けた。

「庭師なら自室に帰ったと思う。この時間帯、外に出ていることはまずない」

「え。そうなのですか」

「ミルキアならそれくらい把握していそうなものだが。珍しいな」

「……そうですね」

しかし困ったものだ。できれば、ここで引き下がって万が一でもまた怒られるのは、ご免こうむりたい。

「もしよろしければ、庭師の方の部屋を教えていただけませんか？」
「……………」

すると男は口を閉ざした。
駄目なのだろうか。

「では、恐れ入りますが、庭師の方を呼び出していただく……とか、
できませんでしょうか」

どうにかこうにか、恐らく本日最後であろう仕事くらいは、後腐
れなくこなしたいものだ。

「それは、ミルキアの権限では無理だろう。……だが、私の権限で
は可能ではある」

ミルキアよりも自分のほうが立場が上である、と言いたいのだろ
うか。

できるかできないか、シンプルな答えを予想していた私は、何故
今更そんな情報を持ち出してきたのか察することができない。

何にせよできるのであれば呼び出してもらい、仕事を成功させた
い。

私は単純に自分の希望を言うことにした。

「失礼なことを申し上げているとは存じておりますが、どうか、あ
なた様の権限で呼んでいただけないでしょうか。お願いいたします」

訴えるような表情は苦手なのだが、誠実そうな声なら得意である。
相手がこの人で良かった、と思ってしまうってから、私は自分の不
謹慎さに内心かなり反省した。

男は頷いたので、私はよっしゃ、と手を握る。

「しかしその前に、私もあなたに頼みたいことがある」

握った手から力が抜けた。

まさか条件を持ちかけられるとは思っていなかった。

「ええと、自分からお願い申し上げて恐縮なのですが、私今あまり時間がなくて……一先ず今頼まれた仕事を終えてから、とかなら……」

「ミルキアのことなら、心配せずとも良い。何か言われたら私の責任にしてくれて構わない」

「そ、そうですか？」

先程の権限云々の話は、そういう含みだったのか、と理解した。

「来い」

一方的に言い置くと、彼は踵を返した。

華奢な杖を細かく操って立ち位置を確認しつつ、来たときよりも早い足取りで進んで行く。

私は彼に付いて行くのを、少しの間躊躇っていた。

ミルキアさんから言い付けられた仕事を遅らせることについての躊躇い、だけではない。

門番付きの庭。

立ち入り禁止区域。

盲目の男。

そういったものに、私は得体の知れない恐怖を感じていたのだ。

この男の前ではとても言えないが、気味が悪いと、そう思ってた。
まった。

しかし男は、私が付いて来ていないことを察知していた。

「何をしている。早く来い」

彼の背からそんな有無を言わさぬ言葉が発されれば、私の竦んだ足も前進せざるを得なかった。

4・変わり者

しばらく歩くと、前方に再び、黒い柵と小さな門が現れた。

門の横には、やはりその番人であろう軽装の女が待機している。

そしてその奥には、今度こそ自信を持ってそう呼べるであろう、「庭園」が広がっていた。

「ここってやっぱり、ただの通過点みたいなものだったのですね」

会話がないことにあまり耐久力のない私は、当たり障りのないことをぼやいた。

「『通過点』？」

「私はてっきり、今歩いているここが東庭園だと思ってたのですが、でも、それにしてもあまりにもシンプルすぎると感じまして。やはりここが東庭園というわけではなかったのですね。奥が……ぐふっ」

すぐ前に行く彼がいきなり歩みを止めたため、私はその背中に遠慮なく衝突してしまった。

ふいのことだったので、悲鳴を乙女モードに変換する余裕もなかった。

意外だったのは、加減なくぶつかったにも関わらず、男がびくともしなかったこと。

とても丈夫そうな外見ではなかったのですが、恨みと共に焦りも感じていたのだが、その点は心配いらないうた。

彼は鷹揚にこちらを振り返った。

しかしその表情は驚いたような、訝しんでいるような、形容しがたいものである。

「……あなたは『東庭園』に来たのか」

「？そうです」

庭師を探しに来たくらいなのだから、当たり前ではないか、と私は思った。

男は複雑な表情を崩すことなく、しばしの間固まっていたが、やがて興味を失ったかのように再び歩き出した。

私は首を捻ってから、彼の後を追いかける。
学者や研究者は変人が多いと言うから、やはり彼もそうなのだろうなと、一人で納得した。

やがて門の近くまで来ると、番人であろう女が不思議そうに声を上げた。

「あやや？可愛い子連れてますねえ、シゼル様。誰ですか？彼女ですか？」

しかし男は、女のほうなど見向きもせずに通り過ぎる。

私は少し居心地悪く感じつつも、女に軽く会釈をして通り過ぎた。目が合うと、女はにっこり微笑んだ。

「行ってらっしゃーい。デート、楽しんで来てねー」

私も徹底的に無視するんだった、と後悔した。

「薔薇の咲いているところに、案内してほしい」

彼にそう言われて、私は心の底からほっとした。

先程から、一体何を言い付けられるのだろうと、ずっと落ち着かなかったのだ。

何せ立ち入り禁止区域にいる不可解な人間が相手なので、法に抵触することか、身を危険にすることか、取って喰われることとかを想像していた。

やけにロマンチックな依頼で、目の前の男の変人度は増したが、先に考えていたことよりは大分ましである。

「……今何か失礼なことを考えていないか？」

「何故だろうよく言われる」

「考えていたのか」

「イエイエメツソウモゴザイマセン」

私の表情がわからないにも関わらずそんなことを読み取るだなんて、「すごい」を通り越して、何だか化け物じみたところがある気がする。

「この庭園内で、薔薇があるところにお連れすればよろしいわけですね？」

「そうだ。流石に花園となると、おいの種類が多過ぎて、特定の花を探しだすのが困難だからな」

「了解いたしました。が、ざっと見たかんじ、薔薇だけでも色や種類がかなり豊富なようです。どのようなものをご希望でしょうか」

「そうだな……。一先ず、一番手近なところに」
「かしこまりま……」

そういえば、目の見えない人を案内するのだった。

そうすると、手を取って導いたほうが良いのだろうか。

しかし初対面の男とお手々繋いで歩く、というのには些か抵抗がある。

「どうした」

「ええと、どのようにご案内したら良いものかと思ひまして」

「普通に前を歩いてくれればそれで良い。後から付いて行く」

「あ、そうですか」

私の心配は杞憂だったようである。

においとか、気配とか、足音とか、そういうものでわかるのかもしれない。

「では、行きます」

洒落た言葉が何も思いつかなかったので、率直にそれだけ言つと、私は歩き出した。

5・盲人

歩き出すとすぐ、北のほうに建物が見えてきた。

外壁や屋根の様子が宮殿と同じなので、これもその一部なのだろう。

今までに随分歩いてきたから、敷地内でも端のほうに位置すると思われる。

こんなひっそりとした場所にこんな立派な館が建つことから、やはり王族と貴族は随分違うなあと思った。

私の実家は丁度今見えた館くらいの大きさである。

王宮内の一棟くらい私にくれてもいいんじゃないだろうか。

門からおよそ二十歩程だろうか。

早速今が見頃の綺麗な薔薇があったので、私は立ち止まった。

後ろを見やると、一歩後れの位置で男も立ち止まる。

本当にしつかり、問題なく付いて来ていたので、私は少なからず驚いていた。

動きも、杖のことを抜きにすれば、あまり健常者と変わりがない。

「ここです」

他に言い方が見つからないので、ついぶっきらぼうになってしま
うが仕方がない。

とりあえずは案内しろとしか言われていないし。

「どんな薔薇だ？」

考えている矢先から説明を求められた。

「ピンク？の薔薇です」

「……もつと他に言いようはないのか。疑問符の意味するところもわからない」

男は呆れたように目を閉じた。

「えー、だってプレゼンテーションの仕方とかは研修でも教えられませんでしたし。それにこの薔薇の色名がよくわからないです」

「あなたのボキャブラリー内で説明してくればそれで良い。あなたの目に映った薔薇の画像を、私にわかるように翻訳してほしいんだ」

成る程、と納得した私は、腰を屈めて、まじまじと薔薇を観察した。

「花卉は……今更ですし失礼ですが、色の感覚は理解できますか？」

「ああ、わかる。私の全盲は後天的なものだ」

「了解です。……花卉は紅色とピンクの中間で、少し濁った色と申しましょうか、渋めで落ち着いた色彩です。それが幾重にも重なってます。外側の数枚を残して、内側の沢山の花弁は中心に丸まっただぎっしり詰まっている、という様子です。額と茎と葉は灰色がかった濃い緑です。葉っぱは輪郭の部分がぎざぎざしていて、外側が中央に比べて青みがかっています。花弁や葉っぱに露玉が乗っていたりするので、少し離れて見るときらきらしています。……私の観察力ではこんなところでしょうか」

姿勢を正して男のほうを窺うと、男は小さく頷いた。

是とも非とも言ってこないの、私の翻訳が上手くいったのかどうかはわからない。

「その薔薇が咲いているのは、私から見て左、だな？」

「はい、そうです」

すると男は、私との間に合った一步分の距離を詰めて来た。

私はその分後ろに下がり、男はそれが当然と思っているようだ。

侍女なのだから確かに城での立場は底辺だが、それにしても見かけに反して紳士じゃない。

少し憚然としつつ男を見守っていると、彼は先程の私の立ち位置で正確に止まる。

そして薔薇のほうに向き直り、少し屈むと、おもむろに右手を差し伸べた。

「あ」

ひとつ説明し忘れたことがあった、とやっと思いついたが、勿論もう遅い。

茂みをがさがさとまさぐっていた彼は、眉を潜めながらも、抜き取った手にしっかり立派な薔薇を一輪持っていたのは流石と言えよう。

「申し訳ございません！」

男が口を開こうとしたのがわかったので、先手を取って謝罪した。お辞儀もあわよくば風が起きるようにと力いっぱい腰を折る。見えぬなら感じてみせよ私の謝意。

「……わかっていて言わなかったのか？」

「いえ、滅相もございません。本当に。たった今気付いたところで

す。本当の本当に」

何だか言葉を重ねれば重ねる程噓臭くなっていくのは気のせいであろつか。

私が説明し忘れたこと。

すなわち、棘の存在。

無造作に薔薇の茂みに手を突っ込み、それでやめておけばいいものを、その中から目当てのものを恐らく触角だけで選び取り、そうして手を引っ込めたのである。

彼の骸骨のような右手には、無数の引っかき傷に加え、小さな棘も幾つか刺さっているようだ。

「まあ、私もすっかり失念していたが。そうだな、薔薇とはそういうものだった」

血が滲む無数の傷口は、見ているこちらの鳥肌も立ちそうなものなのに、彼自身は異様なくらいに落ち着いていた。

その口元には感慨深げな笑みさえある。

そういえば会ってから今に至るまで、彼の笑顔を見たのはこれが初めてだ。

勿論こんな凄みのある笑顔は何度も見たい代物ではない。

「すみません……」

「いい。別にあなたは悪くない」

「あの、せめてものお詫びに、刺さった棘、私がお取りします」

それは本当に『せめてものお詫び』だった。

本気かどうかはわからないが、先程この男は私に他意があったことを疑う素振りを見せていたので、出来得る限りの誠意はを見せておかないと。

得体の知れない人間との関係は、クリーンに終わらせたい。

しかし彼は緩やかに首を横に振った。

「痛み、なんて感覚は久しぶりだし、嫌いではない。しばらくはこのままでもいい」

そう言つて、右手を閉じたり開いたりする。

そんなことをしたら、余計棘が奥に刺さってしまうだろうが、この男の妙な言動からすると、それすらわかっててやっているのだと思う。

『病んでいる』、のだろうか。

こういつたうすら寒いものを感じさせる男にお節介を焼く程、私は優しい人間ではない。

「そうですか。ではご自由に。これが原因で悪化したとしても、私は責任取れませんのでご了承ください」

すると男の体が固まった。

元よりただ突っ立っているだけだったが、ゆっくりと開閉していた彼の右手が、急に緊張したように動かなくなったところを見ると、『固まった』という言葉がふさわしいように思える。

「責任を、取るつもりでいたのか」

私はう、と言葉を詰まらせた。

先程のは責任を取りたくない故の発言であつたが、確かに裏を返せば当初は責任を取るつもりだった、ということになる。

無論私としては、そんな大事をおおごと意識していたわけではないが、言つてしまつた以上仕方がない。

私は他称問題児ちゃんではあるものの、父が貴族らしからぬ方向で厳しい人だったので、失敗や悪巧みの清算はさせられてきた。

例えば、双子の妹の寝顔が可愛くて可愛くて、つい髭を描いてしまったのが彼女の初デートの日だったときには、三回土下座して謝罪させられた。

目の前の男の立場がどういったもののかはつきりしないので気乗りはしないが、前言撤回は美しくないやり方だ。

「……私にできる範囲内ならば……」

私が言うと、彼の表情が悲しげに和らいだ気がした。

「なら、取つてもらおうか」

彼の傷だらけの右手が、私の前に差し出される。

「……はい」

私はその手をおずおずと受け取る。

異性の手であり、怪我をしている手であるから、緊張しないわけがない。

しかし彼の右手は温かくも冷たくもないので、生きた人間の生身に触れている実感がいまいち湧かなかつた。

そしてそれは慎重さや丹念さが求められる棘抜きの動作をするに当たって、好都合ではあった。

「責任を取るつもりであるとのあなたの言葉、しかと覚えておくことにする」

作業の最中に、彼がそんなことをばやいた。

「えー。私の言ったのは、その、つまり、私のできるせめてもの責任の取り方が、今棘をお取りする、ということだったのですが。正直そこまで私に非があるとも思っておりませんし」

「わかつている。これとは別のことだ」

他に何か失態を犯しただろうか。

眉を潜めて男を見ると、彼は心持ち、楽しげで、悲しげな顔をしていた。

6・嘔吐き

「終わりました」

そう言いつつも、この手をどこに返せば良いかわからず、私は彼が動くのを待つしかなかった。

彼はそつと右手を宙に浮かすと、少し硬い動きでそれをズボンのポケットに入れる。

「ありがとう」

「いえ。後でちゃんと医務室で診てもらってくださいね」
「ああ」

彼が素直に頷いたのは意外だった。

機嫌が良さそうな今の内に、と付け加えておく。

「責任問題はお手柔らかにお願いします」
「……それは難しいかもな」

私は肩を落とす。

するとおもむろに、彼は門の方向を見やった。

「……時間切れか」
「どうかなさいましたか？」
「ミルキアの声がする。あなたを探しているようだ」
「え」

探している、ということは、やはり花材を届けるのが遅いという

ことだろう。

すなわちそれはお説教を意味する。

この男のせいにして良いということだったが、果たしてそれもとこまで通用するものか。

私は彼に倣って注意深く耳を済ませたが、ミルキアさんの声など全く聞きとることができなかった。

「責任を取りたくないというのであれば……」

唐突に話が元に戻った。

こっちは気が気でないというのに、暢気なものだと思ったが、続く言葉はそうではないことを裏付ける。

「私に会ったことは何としても伏せる。ミルキアは勿論、他の誰にも。絶対に悟らせてはいけない」

彼の表情は少し寂しげで、でも断固とした何かが窺い知れた。

「……どうしてですか？」

「それは知るべきでないことだ。何も知らない振りをしろ。何も聞かず、何も言うな。どこまで白を切っても切り過ぎるということはない。そうすれば、或いは、責任を逃れられるかもしれない」

「それは、何に關しての、責任でしょうか……」

この色々危うそうな男の発言を全て本気にするのもどうかと思う。しかし、神妙に語る彼の姿からは、今まで常に付き纏っていた儚さを感じられなかった。

彼は問いに答えず、代わりに私の肩をそっと押した。

「行け。『あなたは東庭園に花材を受け取りに来たが、庭師はいなかった。盲目の男には会っていない』。それで通せ」

来たときと同じく有無を言わさぬ声音で命じられれば、頷かないわけにはいかない。

私は何が何だかわからぬまま、男に会釈した。

「では、失礼します」

そうして、わざと音を立てるように駆け出した。

ひとつめの門を出たところで、ミルキアさんの呼び声がようやく自分にも聞こえた。

「……ルカっ！いるなら出て来なさい！オルカ！」

その声には怒りというよりも焦りが含まれているようで、まるで母親が迷子を探しているときのようだ。

私は再び駆け出し、草花に囲まれた一本道をひた走る。

ミルキアさんの姿はすぐに見えてきた。

「……オルカ……！」

その表情を見極められる位置まで近付いたとき、私は少なからず戸惑った。

彼女の顔に表れていたのは、怒りでも焦りでも見つかったことへの安堵でもなく、落胆、だった。

「遅くなつてすみません。……」

言い訳を口にしようとしたとき、頭の中に彼の声が蘇る。

『私に会ったことは何としても伏せろ』

……言い訳、できないじゃん。

自分のせいにしていいと言ったのは彼のほうなのに、その道を己から閉ざすとは何てえげつない奴。

ミルキアさんの存在などすっかり忘れて、私は憤った。

「……何ですか、その百面相は」

「あ、いえ、何でも。……庭師が全然見つからないのです。ずっと探しているのですが……」

ミルキアさんが探るような目つきをしたのがわかった。

「この道を、何処まで進んだのですか？」

「東庭園まで行きましたけれど……。あ、でも庭園をちょっと歩いたところでミルキアさんの声が聞こえたので、すぐ戻って来ました」

私は考え考え、慎重に言葉を発する。

言つて良いことと悪いことを正確に識別せねばならない。

「それにしてもミルキアさん、酷いです。私東庭園が立ち入り禁止区域だったなんて全然聞いてませんでしたよ。お陰で門番の人にと

っても疑われました」

「東庭園は立ち入り禁止区域などではありません！」

ミルキアさんはエメラルドグリーンの綺麗な目で私を射抜く。私がびくりと肩を上げると、彼女ははつと顔を強張らせた。己が取り乱していることに、今気付いたようである。

よくよく思い出してみれば、こんなに余裕を失くしたミルキアさんの姿は初めて見るかもしれない。

怒り姿なら見慣れた程にお世話になっている。

しかし、冷静に窺めるときは勿論、激怒を露わにするときだって、彼女は自分を制御しているふうであった。

この場合はどのように叱れば良いか、この場合はどうかというふうに、恐らく計算していたのだろうと思う。

それが、今回ばかりはどうやら違うみたいだ。

少し観察してみれば、普段健康的だった肌はすっかり青ざめ、顔には汗が浮かんでいることがすぐわかる。

ミルキアさんは「ごめんなさい」と呟くと、自分を落ち着かせるように、ゆらゆらと首を振った。

顎辺りの長さで切り揃えた金髪が、それに合わせて揺れる。

「ここは、東庭園ではありません」

「……え？」

聞き返した声の上擦った。

それと共に、頭の奥で妙に納得している自分がある。

今の今まで全く気付かなかった自分がどうしようもなく阿保らし

い。

門番の騎士、盲目の男、ミルキア。

三者の発言が頭の中で一斉に再生され、そしてそれは、『ここは東庭園ではない』との新解釈と全く矛盾していないどころか、素晴らしく一致している。

つまり、彼女の言葉は事実なのだ。

「そうだったのですか……」

「確認ですけど、あなたは本当に、ここが東庭園だと思ってやって来たのですね？」

「はい……」

呆然と答えた私に、ミルキアさんは頷いた。

そして、頭を下げた。

「ごめんなさい。あなたには……悪いことをしたわ」

私は眼前で起きていることが信じられず、しばらく物を言うこともできなかった。

説教は想定していれど、まさか謝罪されるだなんて予想できるはずがない。

何て不吉な！

「ななな何でミルキアさんが謝るんですか、悪いのは私のほうなのに！」

「いいえ。どうか謝らせてほしいのです。あなたの馬鹿さ加減をわたくしは見誤っていました。東庭園の位置も、きちんと確認してお

くべきでしたね……」

若干いつもの調子が戻ってきたようなので、私はほんの少し胸を撫で下ろす。

ここで安心しているところが末期だなあと思わなくもないが、しおらしいミルキアさんというのは大変心臓に悪い物質である。

「ところで、あなたはこの立ち入り禁止区域に足を踏み入れてから、どなたかにお会いしましたか？」

「えっとー、この奥にいる門番とこの奥にいる門番とこの奥にいる門番だけですかしらねー。あ、あとこの奥にいる門番」

俄かに美人上司の視線は冷気を帯びる。

脳裏をよぎるは騎士の残した最後の台詞。

『あんた嘘が吐けなさそうだしな』

悲しいかな、この言葉の真実性は私が最も自覚しているのである。

「杖を持っただん……」

「あーないない、全然会ってないです！これっぽっちも！本当に！そんな存在は1ミクロンも目にしてないです！」

「まあ。考えなしのあなたにしては聡いこと。教えてくださいますか？わたくしが何を言おうとしたのか」

「え、えっと。杖を持っただんせ……杖を持ったダンディでございますよね」

あー死ぬ、間違いなく次の瞬間私死ぬ。

そう思って私は俯いて目を閉じた。

しかし次に響いた声は、存外に優しげだった。

「オルカ」

名前を呼ばれたきり、後に続く言葉がなかったので、私は不思議に思って顔を上げた。

ミルキアさんは困ったように笑っていた。

「嘘は上手に吐かなくては駄目よ」

私は何か言おうとあれこれ考えたのだが、結局返す言葉はどこを探しても見つからなかった。

7・ユーデイス家

私の名前はオルカ・ユーデイスという。

オルカが名前で、ユーデイスが性である。

実はこの名前、貴族か、あるいは社交界に通じている人であれば、かなり多くの者が知っているらしい。

曰く、「『あの』ユーデイス家の『あの』オルカ」である。

私のことを既に知っている人間に自己紹介した場合には、反応は大きく二つに分かれる。

「えっ!？」という好奇。

もしくは、「げっ!？」という後退。

私としては非常に不本意である。

有名になるなんて恥ずかしい!などという乙女らしい考えではない。

重要なのは有名になった理由である。

例えば。

『あの』エリート一族ユーデイス家の、『あの』百年に一人の逸材と言われる賢者オルカ。

『あの』美男美女揃いのユーデイス家の、その中でも格別に麗しい美貌を持って生まれた『あの』オルカ。

『あの』勇猛果敢にして人徳が厚いと謳われるユーデイス家の、領地を千匹の狼から守った『あの』英雄オルカ。

こんな曰く付きであれば、文句の出ようはずもない。結構。大いに結構。

しかし勿論現実はそうではない。

私は父に『お前にマンツーマンの家庭教師を付けるのは金の無駄だ』と言われ、高位貴族にしては珍しい学校通いの人間だったので、賢者なわけではない。

美貌云々は自分で言っけて赤面するくらいだからあり得ないし、狼が一匹でもいれば私は間違いなく逃走を図る。

では何なのか。

要約すると、『あの』小賢しいユーデイス一家の『あの』異端種オルカ、ということのようだ。

ユーデイス一族は現在侯爵家であるが、父の三代前、つまり私の曾祖父の父の時代までは、衣服を仕立てるただの商家だったそうだが、しかし曾祖父は非常に有能な人間で、貴婦人用のドレスを扱い始めたところ、これが大成功したらしい。城下町の隅で小さな店を運営していたユーデイス家は、たちまち流行のブランドとなった。

その評判は瞬く間に王家の年頃のお姫様の耳にも入り、直接お呼びがかかったそうである。第二王女の夜会用のドレスを仕立ててほしい、と。

さて、ここから「あの小賢しいユーデイス家」の歴史が始まる。

曾祖父は、この一大ビジネスチャンスに筆頭にと、自分の家の長男を立てた。私の祖父である。

彼は当時大学を出たばかりで、商人としては駆け出しの駆け出しであった。しかし、年頃であった。加えて、独身でもあった。

王女様はユーデイス家の仕事へと、恐らく祖父が大変気に入り、頻繁にユーデイス家にドレスの仕立てを頼むようになった。そして祖父は、当然の如く頻繁に王女に面会に行った。

かくして二人は恋に落ちたのである。

しかし、王家と商家での恋は許されなかった。

貴族であれば、平民との結婚も許されているが、王族だけは別だった。ツエーヴラーグでは、王族は王族同士、或いは国内の貴族としか結ばれることはできない。

可愛い娘のためとはいえ、王家自ら法律を破るわけにはいかない。国王陛下は涙ながらに娘を説得しようとしたが、我が家の祖父に心底惚れていた王女様は、最後まで折れることはなかったそうだ。

そこで再登場するのが、やり手の曾祖父である。

彼は国王陛下にこう申し出たそうだ。

「恐れ入りますが陛下、我が息子レナードと第二王女ジウニア様のことで進言させていただきたく存じます。

陛下もご存じかと思いますが、レナードはおこがましくも、ジウニア様に恋しております。全く身分知らずにも程があるというものです。しかし、わたくし自身まだ本当かと疑ってもいるのですが、ジウニア様のほうもこの愚かな息子に好意を寄せているとこのことを、複数の者から聞いたのです。

大変僭越なことを申し上げていることは承知しておりますが、もしわたくしの聞いたことが本当ならば、陛下も心苦しく感じているのではないかと思つた次第であります。

何せジウニア様はツエーヴラーグの第二王女であり、その血は全く穢れなきものでございます。対するレナードはしがない商家の息子に過ぎません。我が息子は王女殿下に到底釣り合わぬ器です。

しかし民にもご家族にも慈悲深く愛情深い陛下のこと。きっとご自分の娘には幸せになってほしいと願っていらっしゃるのではございませんか？そして、陛下の広い大海のような御心には全く見劣り

しますが、わたくしも一人の父親として、息子には幸せになってほしいと願っているのです。ごいます。

さて、国王陛下、どうか今少しこのしがない商人の戯言をお聞きくださいませ。

我がユーデイス家は、ツエーヴラーグ王家への忠誠を改めて固く誓い、王家に益と繁栄をもたらすために力を尽くすことを約束いたします。

それでどうか、もし我が息子と第二王女殿下が真に愛し合っており、陛下がこれを良いとされるのであれば、どうか次のお願いを一度考慮していただきたいのです。

どうか、我がユーデイス家を、血筋の貴い一族として迎え入れていただけませんか？」

この非常に長い進言はこのままの状態でユーデイス一族史に残っているのだが、要するにこういうことである。

俺達を貴族にしちゃえば全部丸く収まるぜ。

そして王様はそれを呑んだのだった。

そついうわけで私の祖母は元ツエーヴラーグ第二王女だ。

その後もユーデイス家は巧みに『小賢しさ』を駆使し、貴族世界を這い上がって来た。

「貴族といえはどろどろ愛憎劇」と学生時代の友人が私に何の遠慮もなく言ってきたことがあったが、近年その「どろどろ」の渦の中心にいたのは、主にユーデイス家だったかもしれない。

お陰で当初子爵家だった我が家は、今では侯爵家になり上がっている。

そんな一族の異端種がこの私、あのオルカ、である。

この異端種という語をさらにわかりやすくすると、
「あの小賢しいユーデイス家にこんな馬鹿が生まれた！」
ということになる。

これを不本意と言わずして何と言おう。

勿論この呼称が使われるようになったのにはきっかけがある。

というかそのきっかけとなる出来事さえなければ、私は何の問題もなく、優雅に華麗に貴族社会を渡っていっただろう。

そう言つと決まって家族は首を横に振るが、そんなことはどうでもよい。

事の発端は三年程前である。

8・オルカ

ツェーヴラーグの王家は一年に一度、盛大な夜会を催す。

この宴は貴族が王族であれば誰でも出席できるもので、当然ユーデイス家、そして私も出席した。

何せ美味しいものが食べ放題である。それだけでも行かぬわけがないが、加えてもうひとつ、私には出席する理由があった。

当時私は、とある伯爵家の長男に惚れていたのである。

今思うとそれは恋というよりも憧れに近いものだったようだ。

彼は兄の友人であり、私よりも大分歳が離れていた。幼いときから兄と共に私の面倒を見てくれた、誠実そうで優しい人である。がよくよく考えてみれば、彼の性格についてそれ以外には特に思いつかない。

基本的に私の周囲にはそういったまともな男がいなかったため（双子の妹曰く「まともな男はあなたには近付かない」、だそうであるが）、ある意味消去法で行き着いたとも言える。

何にせよ彼の顔は拝めるときに拝んでおかねばと思っていたこともあり、私は夜会に出席したわけである。

しかし私は恋愛に積極的なタイプではないので、特に彼に対して何をするでもなかった。

ダンスに誘うことを考えなかったわけではないが、そもそも話しかけることさえ躊躇われるため、それどころではない。

ただただ美味しいものを頬張りながら、彼の姿を目で追うだけである。私としては、まあそれでもいいかと諦めている節があった。

一通り挨拶回りを終えたので、私は家族から離れて豪勢な食事に舌鼓を打っていた。

やがて音楽が始まり、大勢の紳士淑女がホールの中央に進み出て、優雅に踊り出す。

勿論私はその中に入って行くことなどせず、食事を続ける。ぼんやり眺めていると、私のよく知った顔もダンスの輪の中に紛れていた。父は母と、妹は婚約者と、兄はどこぞやの令嬢と。そして絶賛片想い中のあの人も、どこぞやの令嬢と踊っていた。

ぎくりと全身が強張ったが、社交辞令で共に踊るなどよくあることだ。

そう言い聞かせつつも、楽しげな二人を見つめることは止められなかった。

ふいに、私の肩に何かが触れた。

吃驚して振り返ると、水色の瞳と視線がかち合う。

小柄な私より頭ひとつ分程度背の高い男が、ぎこちない笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

短く刈り込んだ銀髪に、小麦色に焼けた肌、程良く鍛え上げられた体系は、どこかで見たような気もする。

しかし少なくとも今日の挨拶回りの内には入っていなかったし、知り合いではないと思う。

では何故今この男は、私の肩に手を載せ、緊張気味に微笑んでいるのか。

うーん全く身に覚えがない。

次の瞬間、

「食べ過ぎですよ」

とか言われるのだろうか。

「ユーデイス家のオルカ嬢、ですよね」

幼さの残る、或いは幼げに見える爽やかな顔は、なかなか好印象だ。

こんな爽やか野郎は私の周りにいた記憶がないのに、どうして彼は私の名を知っているのであろ、と思った。

無論このときは私の不本意な評判が知れ渡る前である。

「ええ」

男が何者かわからない以上、余計なことは口走らないほうが良いだろうと、私は必要最低限の答えを口にした。

彼は私の無愛想な反応に少し戸惑いを見せたが、その顔を引き締め、こう言った。

「私と踊ってくださいませんか？」

手から力が抜けて、持っていた皿が落ちた。

丁度私は自分の取り皿に新たな食糧を調達していたところだったので、皿は床ではなくテーブルの上に落ちた。

しかし載っていた食べ物は勿論散乱。テーブルの上の大皿のほうにも異物を混ぜてしまったので、明らかにこれらの食べ物は廃棄となるであろ。

「わ、わ、申し訳ございません……」

素早く侍女達が片付けに入る。

失態を犯してしまったものの、今は誰に謝れば良いのかわからない。とりあえず彼女らに頭を下げようとしたところで、腕を掴まれ

た。

銀髪の彼は、やや困ったように笑う。

「ここは大丈夫です。侍女達にお任せください。突然驚かせてしまい、失礼をいたしました」

私は右の困った状態と、左の困った君を見比べた。

しかし真摯な眼でストレートに見詰められれば、困った君から視線を逸らすわけにもいかない。

彼は覚悟を決めたようにすう、と息を吸うと、再度この言葉を口にした。

「オルカ嬢。どうか、私と踊っていただけませんか？」

その時私の脳裏に浮かんだのはただ一言。

面倒臭い。

正直に言うと、私はこういった公の場で殿方にダンスを申し込まれたことはほとんどない。

あると言えば、兄か、父である。

それというのも、挨拶回りを程々に終えた後はそそくさと食事の並ぶテーブルに赴き、後はひたすら食事を貪る、ということを繰り返していたからである。

お腹空いた。ダンスなんて興味ないし。

この二つの感情はがっしりと協定を結び、連携して私を食事のテーブルに駆り立てた。

そうすれば、美味しいものが食べられて私は幸せであるし、好きでもない人間とのらりくらりと踊らなくて済むのである。

そしてその感情を隠しもしない、あのユーディス家の令嬢に、
敢えてダンスを申し込む野暮は今まで存在しなかった。
そう。今までは。

私は水色の瞳をじいっと見つめ返した。

彼の目は期待と不安で揺れているようにも見える。

幾分良心は痛むが、私はこの申し出を受けるわけにはいかなかった。
た。

ここで受け入れてしまったら、今までやってきた「頼むからダンスになんか誘ってくれるなよ。私は食べるのに忙しいんだから」という意思表示が嘘になってしまう。

現に目の前に物好きが現れた今、これから先は現れないなんて確証はどこにもない。

そして私は、やはり目の前の男を知らない。

先程私の名前をわざわざ確認してきたということは、大した接点もないと考えて良いだろう。

それなのに自己紹介もせずに私をダンスに誘ってきたのだ。

これは些か非常識と言える。

よし。断つても問題はなさそうだ。

私は努めて眉尻を下げて微笑んだ。

「ごめんなさいまし。今は踊る気分になれないのです」

大きな声を上げたつもりはなかったが、私の言葉はホールに響いた。
た。

こんな断り文句、大勢の人に聞かれて気持ちの良いものではないだろう。私はともかくとして、彼にとっては。

そう思っ慌てて周囲を見回した私は、啞然とした。

少なくともここから見える位置にいる皆の顔が全て、私と男のほうに向き、私と同じく啞然としていたのだ。

先程までダンスに興じていた者も、動きを止めてこちらに見入っている。

静寂の中、音楽だけはやや気まずそうに流れていた。

「お姉様！」

沈黙を破ったのは、私でも、銀髪の男でもなかった。

声のしたほうを見やると、双子の妹カノンがダンスの輪を外れて、こちらに歩み寄って来た。共に踊っていた婚約者は止めることもせず、呆けたように成り行きを見守っている。

カノンがつかつかと靴を鳴らして歩けば、自然と彼女の前から人垣は割れた。

彼女は私の目と鼻の先まで詰め寄り、腰を曲げて私の顔を覗き見た。

青紫の瞳に映るは、呆れと使命感のような何か。

「皇太子様の誘いを断るだなんて、あなた、本気？」

瞬時に私は固まった。

……ああ。道理で見覚えがあると思った。

恐れと恥ずかしさの余り、皇太子様を見ることができない。

仕方なく硬直したままカノンの顔を眺めていると、彼女の表情に呆れの色が濃く表れた。

「あなたやつぱり気付いてなかったのね」という声が聞こえてきそうである。

カノンは姿勢を正した。

そしてそれに乗じて、私の耳元で囁く。

「私に話を合わせなさい」

そう言つて、数歩私から距離を置いた。

「ねえお姉様。よっぽどの理由があつてのことでしょう？ そうなんでしょう？」

私はおずおずと頷く。

勿論ここで「面倒だったから」とか「ご飯食べたかったし」などの発言がアウトであることは私如きにもわかる。

しかしこれから先、カノンがどのように話を収めるのか、全く見当がつかない。

無難にしおらしくしておくが吉と見た。

「どうしてなの？ 体調が悪いの？ ねえ、ちゃんとした理由も告げずに誘いを断るだなんて、皇太子様に失礼でなくって？」

私は俯いた。

カノンちゃん、私どうすればいいのか全然わかんないよー。
演技でなく泣きそうだ。

すると予想外にも、助け舟の助け船が現れた。
例の皇太子様が、私とカノンの間に割って入ったのだ。

「私なら気にしていないので大丈夫ですよ。突然のことだったので
オルカ嬢が驚くのも無理のないことと存じます。それよりも、私の
気遣いが足りなかったせいで楽しい宴を台無しにしてしまったよう
で、誠に申し訳ございません」

そう言って、少し弱々しいながらも、周囲に微笑みを振り撒く。
今の時代、こんな好青年がまだ生き残っていたとは、と私は他人
事のように感嘆していた。

しかもその好青年は王子様である。
何て優良物件。

その優良物件は、ちらりと私を振り返ると、またもや困ったよう
な微笑みを浮かべた。まるで私を安心させるかのように。

何故こんな優良物件が空気も読めずに私をダンスに誘ったのか。
考えれば考える程に謎であるので、考えることはやめた。面倒。

しかし、我が双子の妹にしてみれば、皇太子の登場など計画に入
っておらず、全く邪魔な存在であつたようだ。

「皇太子様はお優し過ぎます！ここでお姉様を許すのは、ある意味
でユーティス家にとって恥を意味します。お姉様ったら、自分の取
った行動の説明もできませんの？」

カノンは割って入った皇太子様の横をさつさと通り過ぎると、再
び私に至近距離で詰め寄る。

彼女はどうしても自分のシナリオで事を進めたいらしい。

私としてはどういう成り行きであれ丸く収まればそれで良かったんだけど。

ついでに言うと、カノン自身も十分皇太子様に失礼なことをしている気がする。

私の心配など露知らず。カノンは手厳しい妹を演じて叫んだ。

「何とか言ってくださいまし！」

「いい加減次の手を打ちなさいよ、馬鹿。話が進まないじゃない」と言わんばかりに睨んでくるカノンに、不安げにこちらを見つめてくる皇太子様、そしてそんな私達を見世物のように取り囲むその他大勢。

こんな緊張する場面で上手い考えが思い浮かぶわけがない。私はプレッシャーに弱いのである。

そんな私が打てる手といったら、確実に限られていた。

私は「あの……」とおどおどしながら言うと、そつとカノンの耳に自分の口を寄せた。その口を手で囲い、囁く。

「思いつかないので後は任せました」

睨まれるかと思ったら、カノンはむしろニッと一瞬口角を上げてみせた。

これは大変悪い兆候だな、と思うが、あのユードイス家のカノンに全投げしたのは他でもない自分である。

私は開き直った。

私がカノンから顔を離すと、彼女は驚愕の表情を浮かべた。

「ええ！？お、お姉様、想い人がいらつしゃったの！？」

周囲の人間がざわめいた。

彼等には段々、この見世物を楽しむ余裕が出てきたようだ。

……勘弁してくれ。

皇太子様を見やると、あからさまにショックを受けた顔をしている。

今の私の気持ちは、仔猫を道端に捨てたときの気持ちと似てるんじゃないだろうか、と想像した。

「誰ですよ！？お姉様！はつきり仰いなさい！皇太子様に誠実さを見せる気があるのであれば、そのくらいすべきだわ！さあ！」

意気込むカノンの目は、若干楽しげで、そして、炎がちろちろと揺れている気がした。

そこで私はぴんと来た。

生まれたときからずっと一緒に育ってきた双子の妹である。

彼女の考えそうなことなど、大体わかる。

これは、復讐の炎である。

何の復讐かという疑問は、身に覚えがあり過ぎるので一先ず置いておく。

カノンが使い物にならなくなった今、誰か他の助っ人を探し出さねば。

最初に私が目を付けたのは、心優しき皇太子様である。

ずばつと振った上に好意も湧かない彼に頼るのは、利用するようで気が引けなくもないが、この時くらい空気を読んでみせよ！と視線を送ってみた。

しかし彼は遠い目をしていて、私の視線になど全く気付きもしない。

優良物件の癖して肝心なところで使えないなあ、と私は独りごちた。

次に、素早く周囲に目を走らせ、家族の姿を捜した。

先に発見したのは両親である。

彼等は姉に迫る妹と、妹に迫られ周囲に助けを求める姉の図を、微笑ましそうに眺めていた。

何故こういうときに限って暢気な顔をしていられるのか、後で問い詰めてやる。

残るは兄だ。

と、思ったのだが、結局最後まで兄は見つからなかった。

後で聞いたことだが、兄と某ご令嬢は、この見世物に早々に飽き、寧ろ混乱に乗じて、と庭に出て逢引していたらしい。

我が兄ながら薄情なものである。

家族も頼りにならないことを再確認した私は、改めてカノンと目を合わせた。

彼女の瞳から炎が消えることはなく、寧ろ時間が経つにつれ強さを増している気がする。

その炎を見つめていると、ここ数日間の可愛い妹の記憶が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。

姉に婚約者からのラブレターを勝手に読まれ、爆笑された可愛い

妹。

姉にズイーガル亭の高級菓子をいつの間にか全部食べられていた可愛い妹。

光り物が好きな姉に婚約指輪を見せてほしいとねだられ、うっかり破壊され激怒する可愛い妹。

そういつた諸々の可愛い妹を思い出した私は、こう結論を出した。こりゃあ観念して復讐を受け入れたほうが良い、と。

でなければ、そろそろカノンの瞳に殺意が宿りそうである。命あつての物種。私は評判よりも命を選ぶ。

決意した私は、もう一度改めて、今度はゆっくりと周囲を見回す。さあさあ言うぞー今言うぞー、という雰囲気をも分に含ませて。

そうしている内に、私の想い人である某伯爵家長男が目に入った。彼の隣りには、先程まで共に踊っていたどこぞやのご令嬢。

勝ち目はないだろうなあ、ということは何となくわかっていた。

しかしあまり深く考えてはいけな。でないと勢いが失われ、結局言えなくなってしまう。

私は彼を見据えると、掠れた声で彼の名前を宣言した。そして叫ぶ。

「ずっと好きでした！」

叫んだ後は、もう彼の顔を見るところではなかった。

再度言うが、私は恋愛に積極的なタイプではない。告白だって、今まで一度だったことがない。

そんな私が公衆の面前で、およそ勝ち目のない告白を叫んだのである。

そこまでして妹の殺人罪を止める私って、素晴らしい姉だわ。

観客は一瞬どよめいたが、すぐに大人しくなった。
次なる見世物は私に想いをぶつけられた彼である。

とてもこの状態で顔を見せることは躊躇われたので、私はずっと俯いていた。

しばらく沈黙が続いていたので、彼も呆然としていたのだろう。
やがて少し締まりのない、しかし落ち着いた声がホールに響いた。

「ご、ごめんなさい……。僕にも好きな人がいて……」

その後歓声が上がったのは、彼が見つめた先が隣のご令嬢で、ご令嬢はぽつと顔を赤らめ、二人の間にうつとりとした雰囲気の流れたかららしい。

ある程度予想はしていつつもショックに打ちのめされた私にとっては、全く関知していなかった出来事である。

かくして私の評判は社交界全体に広まることとなる。

王子を振って、伯爵家長男に振られたオルカ。

小賢しいユーデイス家の、馬鹿な異端種オルカ。

あのユーデイス家の、あのオルカ。

9 父

そんな評判があつたからか、もしくはなくても同じだったかもしれないが、私に近寄ろうとする男はあの一件以後絶えた。

驚くことなかれ、こんな私にも昔は寄つて来た男がいたのである。しかし、こういう話題のときに思い出されるのは双子の妹の言葉である。

「まともな男はあなたには近付かない」

ではどんな男が近付くのか。答えは明白である。

まともでない男が近付くのである。

資産目当てだったり、侯爵家と繋がりを持ちたい人間だったり、まあそんな碌でもない男が寄つて来ることは少なくなかった。

それが絶えたのだから、積極的に考えればあの夜会での告白も無駄ではなかった。

しかし消極的に考えれば、あの一件は、まともな男をさらに寄せ付けなくする、いわば駄目押しのようなものであった。

男の気配を全く感じさせなくなつた娘を最も心配していたのは、父であつた。

新たな恋を探す気力すら見受けられない私に、父は繰り返し皇太子様を薦めてきた。

しかし私は断固として拒否した。

あのようなやたらと爽やかできらきらとした殿方には、純粹無垢でうふふあははな淑女が似合うものである。

私のような脳内に枯れた花畑を持つ人間は、近付いてはいけ
ない人種な気がする。

彼と一緒にいたとして、噛み合った会話を想像できない。

皇太子様のほうも、あの一件以来私に干渉してくることはな
かった。

夜会などで会ったとしても、彼は私に困ったような笑みを向ける
だけである。

きっと人が良過ぎるのだろう。無視ができないようだ。

好意なのか、遊びなのか、挨拶なのか、策略なのか、気まぐれな
のか。はたまた発狂か。

あの日彼が何故私をダンスに誘ったのかは、未だにわからない。

私的には、それは永遠にわからないこととして、もう水に流した
かった。

それが皇太子様の誘いを断ったことへの、せめてもの謝意だと思
ったのである。

だからもう皇太子云々の話は持ち出さないでほしい、と私は父に
断言した。

すると父は群青色の目を細めて、そうか、と承諾してくれた。

そしてそんな会話がなされた二日後のことである。

「オルカ。おまえは王宮に行儀見習いに行くべきだよ」

まず私のしたことといえば、指の関節を丹念に鳴らすことであつた。

「はいはい怒らない。それやると手が男らしくなっちゃうぞ」

「皇太子様の話は持ち出さないでほしいと、この前あれ程言つたではないですか」

「俺は皇太子様の『こ』の字も出してないじゃないか」

「同じことです」

「人聞きが悪いな。一体おまえは何を想像しているんだ？」

「お父様が想像していることです。つまり、あわよくば皇太子様と私が懇ろになつてほしい、と思つているのでは？」

「違う違う」

父は大仰な身振りで否定してみせたが、私の疑いの眼差しは全く衰えない。

「では何故急にそんなことを言うのですか」

問い詰めると、父はににこと表面的な笑みを貼り付けた。

「アリシアって、覚えてるか？」

「ベアティード男爵家の？」

「そうそう」

アリシア・ベアティード。

その名前を聞いて思い出すのは、桜色の長い髪を持つ、砂糖菓子のような少女だ。

ベアティード家とユーデイス家は古くから交流があるらしく、私も父や母に連れられて何度か赴いたことがある。

アリシアはその第三子である。

年が私と同じだったので、私はベアティード家に行くたびに彼女と遊んだりお喋りしたりしていた。

花が大好きな正に女の子らしい女の子であり、色々な花の名前を教えてくれたっけ。そういったものに清々しく興味のない私は、右から左だったけれども。

「アリシアが何か？」

「彼女はツエーヴラーグ城の侍女になったそうだ」
「へえ！？」

このときばかりは、私は素直に驚かずにはいられなかった。
生粋のお嬢様であり生粋の淑女であり、ゆくゆくは生粋の貴婦人になるであろうと確信できるアリシアである。

その彼女と、「侍女」という職業はあまりにもかけ離れている。

「彼女は、行儀見習いでも何でもなく、侍女として正式に働いているそうだよ」

「ベアティード家ってそんなに困窮していたのですか？」

確かに男爵家は貴族の中で一番低い爵位だけれども、彼等の屋敷や生活を見るに、娘を働きに出すことなど想像し難い。

或いは、ごくごく最近、運営が難しくなってきたのだろうか。

しかし父はかぶりを振った。

「そうじゃない。アリシア嬢は自発的に侍女になったんだよ。勿論家族は大反対だったそうだけどな」

「自発的に？何でまた？」

父は待つてました、と言わんばかりに嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「お城の文官さんと恋仲になったんだとよ。ずっと傍にいたいがために、城勤めを希望したそうだ。泣かせるねえ」

父の言動に、俄かに暗雲が垂れ込めてきた。

「その話を昨日ベアティード男爵に聞いて、俺は閃いた」

「お父様はもつと生産的なことを考えるべきだと思います」

「まだ何も言つてないだろ。それにこれは大分生産的な話だ。いいか？某一件があつてから、おまえの社交界での評判は地に落ちた。これで貴族同士の結婚はほぼ絶望的になったわけだ。このことについて異論はないな？ん？」

私は不承不承頷いた。

某一件から三年近く経とうとしているのに、男が誰も寄つて来ない、という事実がこれを裏付けているし、私にも積極的に動く気力はないのだ。

「しかし父親としてはおまえをきちんと幸せにしてくれる人間が現れてほしい。しかし貴族は受け入れてくれない。じゃあどうすれば良いのかというと、つまり選り好みしなければいいわけだ。幸いこの国では貴族と平民の結婚が許されている。おまえは平民との結婚は嫌か？」

「そんなことはありません。しかし誰でもいいというわけでもありません」

「それはそうだろう。おまえ程理想が高い娘も珍しいしな」

私は自分の耳を疑った。

「『理想が高い』？私が？」

父は鷹揚に頷く。

「おまえが今まで好きになった奴なんて、精々ポルテッフェル伯爵家の長男坊くらいだろ。拳句の果てに『こ』のつく優良物件を断つたんだぞ？これを理想が高いと言わずして何と言う」

「だってポルさんくらいしか私の周りにまともな男がいなかったんですもの」

「そうしてやっと現れたまともな男が皇太子様だったんじゃないか」

「あのときはポルさんが好きでしたし」

「じゃあ今はどうなんだ。流石にまだ長男坊に未練たらたらってわけでもないだろ」

「それはそうですけど。でも皇太子様と私って明らか合わないと思うのです」

「ほら。それが理想が高いってことだろ」

父は満足そうに言い放ち、私はむうと唸った。

そう言われると反論もできない。

「オルカの理想は、立場とか収入とか人望が関係してないんだと思うよ。であれば平民からお相手探しても全然オッケーなはず。そうしておまえが家庭持つて幸せになれば、俺も安心で幸せ。丸く収まる」

どうして結婚しただけで娘の幸せが確信できるのかがわからないが、それよりも話の前後関係がよくわからない。

「お父様は結局何が言いたいのですか？」

私が疲れた目を父に向けると、父はうん、と頷いた。

「だから、手始めに王宮で出会い探しをすればいいんじゃないかな
って思つて。あそこで働いてる平民なら、まだ貴族に近い人種だろ。
公務員なわけだから収入も安定してるし」

「出会い探しのために行儀見習いに行けと」

「そうそう。目指セアリシア二号」

「お父様は行儀見習いと王家を舐めてますよね」

「はっはっは」

否定しなかったところを見ると、事実舐めているようだ。

それはともかくとして、目ざとく出会いを探しつつ王宮で働く、
なんていう器用な技は私にはできそうもない。

加えて私には、無理に探し出した恋愛や早まった恋愛というもの
は得てして上手くいかない、という先入観を抱いている。

そっちの方向で頑張っていた友人を観察するに、その考えはあな
がち間違つてもいないと思う。

出会いを探すものではなく、出会いのほうからやって来るもので
ある！と、乙女思考な私は信じたい。

よって却下であるそんなもの。即却下。

「お父様の意見は却下します」

「というおまえの意見は却下します」

しばし睨み合う父と娘。

流石私の父親である。一筋縄ではいかない。

なんて思っていたら、父はにまっと口角を上げた。
カノンのときと同じく、これは大変悪い兆候である。

「まあまあ安心してくれ。面倒くさがり屋なおまえのために、全ての手続きはこの俺が本日やっておきましたから」

「なあっ!？」

「一応イーディル陛下にも直接頼んでおいた。『娘をお願いします』って」

私は唇を噛み締めた。

本当に娘の幸せを願うのであれば、娘の意見に耳を貸してほしい。

「ここですっぱかしたりしたらどうなるか、それくらいはおまえでもわかるよなあ？」

ぐうの音も出ない。

所詮父は生粋のユーディス家の人間であり、私は異端者だったというところか。

こうして私は王宮にに向かうことになったのである。

10・アリシア

私が立ち入り禁止区域侵入という失態を犯してから二日が過ぎた。

三日目の二十時半頃、本日の仕事を終え、食事をとりシャワーも浴びた私は、小さな自室で骨を休めていた。

じゃじゃ馬ではあるものの、私も貴族のお嬢様として育っている。侍女の仕事は予想以上に体に応えるものだ。

ひと月程前、私が行儀見習いに来た一日目などは、自室に着いた途端シャワーも浴びず、気絶するように眠りに落ちたことを覚えている。

侍女つて大変だなあと思いつつ、存外にもこの生活は私になかなか合っているようであった。

退屈している余裕がないし、消極的なことを考える余裕がないのだ。

本質的に怠け者な私は、考える暇もないくらいに何かに打ち込む、ということを含までしてこなかった。

一日を終えた達成感と共にくる疲労というものがとても爽やかなものであることを、この城に来て初めて知ったのである。

真面目に出会い探しをしているわけではないが、平民として暮らすというのは想像以上に良さそうだ。

私は二度寝返りを打つたら転げ落ちるであろう大きさ（身をもつて検証済み）のベッドに寝転がり、ぼんやりと天井の模様を眺めていた。

季節は秋の初めである。少し暑さが残っているので、寝間着用の

薄いワンピース一枚で丁度良い。

外で鳴く虫達の声が室内に響く分、心の中はしんと静かであった。

あの失態に関しては、結局何のお叱りも受けないままでいる。

確かに今まで私が城内でやらかしてきたことと比べれば、大したことではなかったとも思える。

しかしあのときのミルクアさんの狼狽ぶりは尋常ではなかった。

加えて、あのときのミルクアさんのしおらしい態度も尋常ではなかった。

ユーデイス家の一族に囲まれて育った私は、危機的状況を予測する能力値がかなり高いと自負している。だからといってそれを避けられるのかというと、それはまた別の話になってくるが。

その危機的状況予測レーダーが、最近「これはやばいこれはやばいこれはやばい」と、やたらと警報を発令している気がする。

追い討ちとなるのは、あの一件があった後、ミルクアさんの出沒率が格段に減ったことである。

彼女は私の教育係のようなもので、今まで一日の内に顔を全く合わせないということは皆無だった。むしろこちらは会いたくないのにやたらと会わざるを得ない状況であった。

それがあの一件のあった翌日、彼女の顔を一度も見なかったのである。

その日、午後になっても姿を見せぬミルクアさんに不安を覚えた私は、閃いた。

そういえば今日は一度も目立った失敗をしていなかった、と。

教育係がミルクアさんな以上、説教係もミルクアさんである。

私が何かやらかしたときには、彼女は必ずといって良い程現れた。

そこで私は敢えて問題を起こすことにした。

最早そのときの私にとっては、ミルキアさんの出現よりもミルキアさんの消失のほうが恐ろしいことだったのである。

手っ取り早く失敗を犯す方法は何かしらと考えた結果、昨日と同じく掃除用具を置き忘れることにした。

これなら偶然を装うための特殊な技術をあまり必要としないし、同じ失敗を翌日に繰り返すのである。あのミルキアさんなら、「何て学習能力のない！」と憤ること必至であろう。

早速実行に移すため、まずはそれとなく同僚に今日の会議の有無を聞いてみた。

すると今日は十五時から、王様と高位貴族で話し合うための会議があるらしい。

時間帯も会議の重要度も申し分ないものである。これぞ渡りに舟。

そうして私は計画を実行に移した。

実は私が会議室を掃除しようとしたとき、同僚に「そこは午前中に終わった」と言われたのであるが、「大切な会議だし念には念を入れなさい！」と何とかごり押し、無事任務を遂行させた。

しかしその日、ついに彼女が現れることはなかった。

せめてもの救いだっただのは、夕食のとき、別館の侍女長が、ミルキアさんからの伝言を預かってきてくれたことである。

彼女が言うには、ミルキアさんは本日他の仕事で忙しく、本館侍女長の仕事も彼女が兼任していたとのことだった。

渡されたメモには、走り書きながら美しい字で、

『首を洗って待っていなさい』

と書いてあった。

私は心底安心した。

最悪、私の責任を取ってミルクアさん処刑もしくは投獄という事態になっていたのでは、とまで考えていたのである。

我ながら考え過ぎであるが、無事が確認できて何よりだ。

二日目には一度だけ城内を歩いているときにミルクアさんとすれ違ったし、今日は仕事終わりのほうにミルクアさんが顔を出し、一昨日のことについてこっぴどく絞られた。

しかし私の知らないところで変事が起きているのは確かなようだ。

二日続けて見たミルクアさんの顔色は、どちらも浮いたものではない。
ない。

説教中の顔なんてそりゃ浮いたものではなかつと思うかもしれないが、いつものミルクアさんであれば、説教中程生き生きしているものである。本当に。

私は彼女の生きがいに貢献しているのだなあと、常々思っていたわけだ。

しかし今日の説教は、言葉だけすらすらしていて、心はここにあらずという様子であった。

何事かに巻き込まれる前に、行儀見習いを中退すべきだろうか。

そんなことを悶々と考えている最中、さなかノックの音が響いた。
その後に続いたのは、鈴のように華やかで澄み切った声。

「オルカ、いる？私。アリシアよ」

扉の向こうで呼びかけるは、私をこの城に導いたとも言える女だった。

疲れたしこれ以上面倒事は嫌だなと思ったが、友達を無碍に扱うわけにもいかない。

反動を勢いにして起き上った私は、のろのろと扉に向かう。

鍵を開けただけで、アリシアは勝手に入って来た。

こんなに気の強い娘ではなかったと思うのだが。

彼女は未だ侍女の制服のままである。

後ろ手に扉を閉めると、切羽詰まったような顔をして私に言った。

「こんな時間にごめんなさい。あなたにどうしても頼みたいことがあるの」

「はあ。頼み事の内容にもよるけれど」

アリシアは本来おっとりなんびりとした性格である故に、この雰囲気的に、何か只ならぬことが起きているであろうことは窺える。

勿論可能ならば回避したい。

「あのね……オルカは友達だつて信じてるから、言えるお願いなの……。今から話すことには、誰にも言っではいけないことも含まれているのだけれど、お願い、できる？」

「えーと。だから引き受けるかどうかは頼み事の内容によるわ。でも言っではいけないこととやらは内緒にするわ」

アリシアは私のはつきりしない受け答えに不安げになったが、どうしても慎重になってしまふのは仕方がない。

私の危機的状況予測レーダーがうるさいのだから。

「東館の近くに、立ち入り禁止区域があるのは知っていらして？」
「ごめんなさいアリシア私明日早番なのだから今すぐにも寝ないと」

「ちょ、押さないでよ、話を聞いてよ、っていつかあなた早番じゃないでしょう！わたし、流石に早番の方に頼むのは酷だと思って、当番表きちゃんと確かめてきたのだから！」

く、あのアリシアが逃げ道を塞ぐだなどという頭の良い戦法でくるとは。

「とりあえず、話だけでも聞いてくださいな」

私は渋々頷いた。

「それでね。王家の方々は、毎月一晚だけ、その奥にある離れの館で食事会をするの」

「へー」

「わたくしはそのときの付き人兼給仕人としてお供する役目を申し付けられているのだけれど、それが今日なのね」

「ほー」

「実はわたくしそのことすっかり忘れてて……今夜絶対外せない予定を入れてしまったのよ」

「はー」

「オルカ、お願い！今夜の仕事変わってくれない！？」

「ふーん」

「ほんと！？ありがとうオルカ！あなたは真実の友達だわ！」

「え！？」

しまった。兎に角感情移入とか同情とかしないよう、適当に聞き流していたら、引き受けたような誤解を与えてしまった。

「いやいやいや、えーと、そうじゃないの。今ちよつとぼーっとして。あの、ごめんなさいね。やっぱり私じゃなくて他の人に頼んだほうが良いと思うわ」

「だって……他の友達は何日早番なのよ」

「早番じゃない人なんて腐る程いるでしょうに……」

私がそんなことをばやくと、何故かアリシアは茶色の瞳に涙を一杯溜めた。

え？私何か地雷踏んだ？

「いないわ……そんな人」

「いやいやいるでしょう。何なら使用人の館を端から回って……」

「こんなこと頼める人はあなたを入れて三人しかいないのよ……」

その内一人は明日の早番。もう一人は私と同じく付き人と給仕の仕事を頼まれているし……。残るはあなただけ。……私、友達がいなの」

私は絶句する。

どうやら非常に繊細な領域に足を踏み入れてしまったらしい。

早く抜け出したい。

いやしかし優しくして気だての良いアリシアに友達がいらないなんて考え難いことだが。

「わたくしの恋人のこと、お父様から聞いたんでしょう？」

「ええ、まあ。お城の文官だったことしか知らないけれど」

「彼、とっても魅力的な方だね？女の人から、凄く、人気があるの。それが、男爵家のわたくしと付き合うことになったから、わたくし

今、お城の女性の方々からとても疎まれているのよ。金と立場で彼を唆したって」

「そ、そうなんだ……。でも、何も全員から嫉妬されてる、ってわけじゃないでしょう？」

「それはそうだけれど……。でも、やっぱり駄目だと思う。私のことを良く思っていない人達の中には、あからさまに嫌がらせをしてくる方もいるの。そういうことがあってから、以前親しかった友達も随分離れていったもの。多分、自分達も同じように扱われるのではないかと恐れているんじゃないかしら」

これは典型的な虐めである。

学生時代は頻繁に目にしていたものだし、私も経験したことはあったが、王宮でも同レベルとは呆れたものだ。

「お願いオルカ。今夜の仕事、変わってくださいな」

ここで折れない程の鬼の心が欲しい、と心の中で涙ぐみながら、私は結局引き受けてしまったのだった。

因みに彼女の外せない予定が何なのか引き受けた後で聞くと、彼の逢引だと言われた。
くたばれと思った。

11・代理人

集合時間が二十一時と言われ、私は大変慌ただしく立ち入り禁止区域のほうに向かった。

シャワーも浴びて化粧も落として制服も着替えた後だったのである。

しかもアリシアとの主な会話が終わったのが二十一時ぴったりだった。

先にタイムリミットを言ってほしかったと訴えたら、「あらあらごめんなさいまし」と、こういうときだけおっとりをかまされた。素でそういう性格なのか、もしくはユー・デイス家のような才能を秘めているのか、つい疑ってしまふ。

再び髪を整え、気休めながらも適当に化粧をし、制服に着替えた後だったので、多分十五分くらい遅刻しているだろう。

そうして息せき切って東館を裏口から出かけたぎりぎりのところで、私はユーターンした。

集合場所である立ち入り禁止区域の門のところに、とても不吉な物体を発見した気がする。

今度は恐る恐る裏口から顔だけ覗かせ、暗がりの中に目を凝らしてみた。

門に灯りがぶら下がっているので、それははっきりと見えた。いる。確かにいる。

乱れや癖の全くないショートカットの金髪に、同じく乱れのない姿勢。その場には彼女の他にあのだるそうな騎士しかないように

あるが、それでも背筋を伸ばし、両手を前に組み、突っ立っているだけなのに気品が溢れ出てくるような姿。私なんかより彼女のほうが貴族という言葉が似合いそうである。

身につけているのは白のメイドキャップに、黒地に白の膝丈エプロンドレス、そして黒のタイツに茶色の革靴。

つまりまあ、標準装備のミルクアさんである。何てこった。

例の騎士と並んで佇んではいるものの、二人の間に会話はなさそうだ。

状況からいって、アリシアの言っていたもう一人の付き人兼給仕係が彼女なのだろうか。

そうであってほしくないと思うが、そうでなかったとしても叱られそうである。

これ以上ぐずぐずしていても時間超過を長くするばかりなので、私は観念して外に出た。

やはり秋の夜ということで、中にいるより幾分涼しい。

ミルクアさんと隣の騎士は、二人して不審そうな目で私を見るとお互いに視線を合わせた。

私は内心びくびくしながら、とりあえず二人に挨拶する。

「御機嫌よう騎士様、御機嫌ようミルクアさん」

「ども」

「こんばんは、オルカ。わたくしに何か御用があつて？」

「いえいえ。先程友人に頼まれまして、この奥に用があるので」

騎士は目を鋭く細め、ミルキアさんは眉を顰めた。

そういえばこの仕事は極秘らしいが、多分この二人は知っているだろう。

そう思い、私は正直にぶっちゃけた。

「本日この立ち入り禁止区域の中の館にて、食事会がなされるのでしよう？その付き人兼給仕を仰せつかっているアリシアが、急用で来れないということで、私が代理をさせていただきますことになりました」

ミルキアさんは無表情に私を見つめているが、恐らくこれは驚いているのだと思う。

隣の騎士が、固まったミルキアさんとどーにでもなれな態度の私を見比べて、「あーあ」と呻いた。

彼は額を手で押さえると悩ましげに仰った。

「おまえ、空気読め」

「なあっ！！」

異端種とか馬鹿とか阿保とか色々言われ続けてきた私なので、悪口にはある程度耐性があったが、この言葉はかなり心外だった。

私ほど空気が食糧じゃないかと思うくらいに空気を読みまくってる人間は少ないと思う。

空気を読んだ上でやむなくそれをぶっ壊すとか、空気を読んだ上で敢えてそれをぶっ壊すとかは間々あるが。

「私のどこが空気を読んでないというのです。大切な親友の逢引のため、危機的状況予測レーダーを無視して駆けつけてきたというの

に」

「……アリシアはそんな理由のために代理を頼んだのですか」

私は、今回ばかりは「あ、しまったやっちゃった」とは思わない。つまりばらしたのはわざとである。道連れにしてやる。

本来役目を果たすべきがアリシアであることを知っているとなると、やはり今回の仕事仲間はミルキアさんで間違いなさそうだ。あーあ。

「つーか危機的状況予測レーダーって何だそれ……」

「言ったでしょう、シュルツ。オル力は少し螺子が足りない娘なのです」

どうやら私のいないところで不愉快な会話が展開されていた模様である。

とそのとき、東館の脇から角灯を持った騎士が現れた。それに続いて数人がこちらに歩いて来る。

「王家の方がいらしたようですね。給仕については後で教えます。説教も後にしましょう」

嫌な台詞まで残されたが、私はそれどころではなかった。咄嗟にミルキアさんの陰に身を潜める。

「……何ですか急に。あなたは曲りなりにも侯爵家の娘なのだから、今更王族の方々に恐れを成した、なんてことではないでしょう?」「いや、まあ、お恥ずかしながらその通りです」

よくよく考えてみれば王家、である。

つまり、皇太子がいる。

今まで出沒フラグが立つようなところには努めて行かなかったことにより、何とか接触を回避してきたというのに、これで全てが水の泡になった。このときに限ってすっかり失念していたのである。

しかし今から短時間でミルキアさんに私の黒歴史をぶちまけるわけにもいかない。

「今更何を言っているのですか、みつともない。ほら、正々堂々としなさい。あなたは貴族の令嬢でしょう？」

こんなときだけ身分を持ち出してきて、理不尽である。

しかしばれるのが時間の問題であることはわかったので、仕方なく私は彼女の隣りに並んだ。

王家の方々が近付いて来たところで、私達は頭を垂れる。

顔を上げたところで目が合ったのが、お約束にも皇太子様であった。

彼は水色の目を丸くして言った。

「お久しぶりですね、オル力嬢。お元気そうで何より」

その場にいた全員の視線が一気に私に集中する。

これがあるから、皇太子様に絡まれるのはあまり気持ちの良いものではない。

「ええ、お陰様で」

「あなたが行儀見習いでこちらに来ているという話は伺っておりましたが、まさかこんなところでお会いするとは思ってもみませんでした」

「ええ、全くです」

ついでに言うと全くお会いしとついでにありませんでした。

私達の会話を聞いて、周りから「ほう」、「あら」と呟きが漏れた。

王様と王妃様である。

王妃様はにっこりと微笑んだようだ。

しかし暗闇の中なので、その笑みがどういった意味のものなのか量りかねる。

「あなたがオルカ嬢なのですね。お噂はかねがね聞いていましたよ」
「それは大変恐縮です」

なるべく平然と受け答えしようと努力はしているが、本心では土下座して平謝りである。

息子さんを振ってすいませんでした。歴史に泥を塗ってすいませんでした。

王様に至っては、

「これは楽しい宴になりそうだな
などとのたまっている。

何だか私の謝罪大会となりそうな予感がするぞ、と私は身震いした。

12・主人

我々は列を作って立ち入り禁止区域に足を踏み入れた。

先頭をきるのは角灯を持った騎士で、その後には王様、王妃様、皇太子様、私、ミルキアさんと続く。最後尾はやはり角灯を手に持ったもう一人の騎士である。

私の並び順は、ミルキアさんが気を利かせて自分より前にしてくれたのであるが、こちらとしては全く余計なお世話である。

お陰で道中、皇太子様の当たり障りのない会話に付き合わなくてはいけなくなった。

その会話で手に入れた情報であるが、この次の門まで続く細い小道の領域は「ハイネの畑」と呼ばれているらしい。

ハイネというのは確か庭師の名前だったから、この畑もハイネさんとやらが管理しているのだろう。

畑には一切灯りがないので、前後の角灯持参騎士が頼りとなる。

勿論列後部の私は前方の灯りの恩恵をいただけないので、皇太子様の背中を見つめて歩くこととなった。

しかし皇太子様は全体的に藍色の衣服を身に付けていらっしやるため、夜間見えにくい。白とか黄色とかの服にすれば良いと思う。私のために。

二番目の黒いアーチのところに立っていたのは、今夜はあの妙な口調の女ではなく、普通の男騎士であった。

彼は門の脇に立ち、ただ無言で真っ直ぐ前を見つめている。

本来門番とはこういうものである。

そなたにスタンダードオブナイトの称号を与えようぞ、などと考えながら、私は門をくぐった。

油断していると危機感やら不安感やらが押し寄せてくるため、くだらないことでも考えていないと落ち着かないのだ。

流石に庭園内にはぽつぽつと外灯が置いてあり、それが花々を照らし出している。

本来は幻想的とも言える光景なのだろう。しかし時たま吹き抜ける涼しい秋風のせいか、はたまた状況が状況だからか私には不気味に見えた。

一向はそのまま現在の道を真っ直ぐ行くのではなく、北に折れた。どうやらアリシアの言っていた離れの館とは、三日前私がここに来たときにも目にした、あの建物であるらしい。館の外郭は暗くてここからではわかりづらいが、半分程の窓に灯りが点いているのははっきりと見えた。

静かで涼しい夜の外で、館内の橙色の光を見るとというのは、何だかとてもほっとさせるものがある。

「あそこが今夜の我々のメインホールです」

木々の向こうの建物を指さして、皇太子様が言った。
私は頷く。

「とても立派ですね。私の実家くらいありそうですもの」

「北東の館と呼ばれています。あちらで夕食をとる、というのは聞いておられますね」

「ええ。王家の方の食事会で給仕ができるだなんて、光栄です」

「よろしければあなたも食事を一緒にされませんか？」

私は慌てて首を横に振った。

そんなことになったら、私に会話の矛先の向く確率が高くなってしまう。

「お誘いは大変嬉しいのですが、わたくし先程夕食をとったばかりですの」

「それは残念です。ですが、そうですね。私達の食事は時間的にかなり遅いので、無理ありません」

「王族の方々は、いつもこのような時間にお召し上がりになるのですか？」

「いえ、そんなことはありません。この月一の食事はなるべく目立たずに行いたいので、この時間帯にしております。気休めのようなのですが」

そうですか、と相槌を打って、私はそれ以上は何も聞かなかった。知ると自分の立場が不利になる予感がしたので、このことに関しては無関心を貫くつもりでいた。

「ここから緩やかな階段になりますので、足元にお気をつけください」

「お気遣い感謝いたします」

石段を数段上り、黒い木々の間を抜けると薔薇の蔭を這わせたアーチが見えてきて、そこにも一人騎士がいる。

アーチをくぐって、ようやく北東の館に着いたようだった。

玄関前には小さな広場があり、中心には今は動いていないが噴水もある。城と同じ、クリーム色の壁にオレンジ色の屋根を持つ横長の建築物であった。

二階建てのその館は、奥行きまでは見えないので定かではないが、少なくとも15〜20程は部屋数がありそうだ。

大きな建物で灯りもかなり点いているというのに、驚く程にひっそりしている。

並んだ格子窓から確認できた人影は、今のところ侍女と思わしき女性一人のみである。

私がぼーっと北東の館を見上げていると、後ろからミルキアさんに軽く小突かれた。

「前を見なさい」

言われた通りにすると、王家ご一行は既に館の中に入って行っている。

私は歩調を早めてその後を追いかけた。

エントランスホールは四角く吹き抜けになっており、天井には大きなシャンデリアがつり下がっていた。左右には通路、正面には階段がある。その階段も途中で左右に別れ、二階のそれぞれの通路に繋がっていくようであった。磨きこまれた大理石の床の上に、臙脂色の絨毯が広がっている。

盲目の男の出で立ちや立ち入り禁止区域内の建物ということでは、私は北東の館は研究施設か何かでは、と踏んでいたのだが、見たかんじではただの邸宅である。

私達は仕事で来ているので館内では王家の方々と別行動かと思っ

たら、そういうわけでもないらしい。

特に何も言われないので私は相変わらず皇太子様の背中を追いか
け、ミルキアさんも無言で私の後ろを付いて来ている。

ここまで来ても誰にも会わない。

ただ、どこから仄かに食べ物の良い香りが漂ってきた。ついで、
何かを切ったり炒めたりする、料理をしているであろう音も小さく
聞こえる。

「お待ちしてりました」

ふいに静かな男声がホール内に響いた。

左脇の廊下の入り口に、いつの間にか痩身の男が佇んでいた。彼
は左手で杖を握り、右手を王族の手前にも関わらずズボンのポケッ
トに入れている。

それは私が三日前目にした、盲目の男であった。

彼は恭しく頭を垂れたが、前にも後にも無表情である。

反して王様は顔を綻ばせた。

「久しぶりだな、シゼル。元気であつたか？」

「お陰様で何不自由なく生かされております。食事の準備が整つて
おります故、どうぞ奥へ」

男の表情は読めないため何を思っているのかわからないが、その
口調は皮肉げで無愛想だ。

王様相手にこんな態度を取るだなんて一体何者だろう。どんなに
地位が高かったとしてもこれはない。よっぽど親しい間柄なのかも
しれないが、少なくとも男のほうからは好意を感じられない。

しかし当の国王陛下は特に気にした様子もなく、言われた通りに奥へ進んだ。

王妃様も男に挨拶してから、王様の後続く。

皇太子様の番になると、彼は何を思ったのか私の手を引いて隣に立たせた。

「シゼル、彼女は侯爵家のオルカ・ユーデイス嬢。最近行儀見習いで侍女として働いてくれている。オルカ嬢、彼はシゼル。この館の主人だ」

「は、初めまして」

「これはこれは。よくいらつしゃいました。この王宮の掃き溜めであなたのようなご令嬢を働かせるのは心苦しいことですが、大変光栄な機会でもあります。どうぞ今宵はよろしくお願いいたします」

すらすらと世辞を並べる口とは相反して、シゼル様とやらの表情は無関心で冷たい。

私のことを覚えていないのか覚えていないふりかはわからないが、酷く奇妙であった。

「ええ。こちらこそよろしくお願いいたします」

そう答えると皇太子様は満足したようで、先に進んだ。

私も「では」と挨拶し、追いかけてようと思ったところで、後ろから服を引っ張られた。

「わたくし達は一先ず待機です」

「あ、はい……」

私はすくすく引き下がる。

同時に、時間がないため仕方がなかったとはいえ、これからの業務をそつなく果たしていけるのか心配になった。

改めて考えてみれば、まだまだ見習いの私は、王族の方の身回りのお世話なんぞしたことがないのである。

その初仕事がこんな飛び入り代理人で、上手くいくはずがない。

もしここで失敗したら確実に父に情報がいくな、と思い、私は顔を青くした。

ふと気付くと、いつの間にかシゼル様が私の前に立っていた。

もうとつくにいなくなったものと考えていたので、少なからず驚く。

彼はポケットから右手を抜き取ると、私に差し出してきた。

その掌と、細長い指には、絆創膏が幾つも貼られている。

一瞬エスコートしようとしているのかと思ったら、彼はその手をすぐに取り上げた。

「約束は果たした」

静かに呟いた彼の顔が、薄く笑った気がした。

それだけの動作を残して、彼も廊下に入って食堂と思われる部屋に姿を消す。

どうやら私のことは完全にばれているらしかった。

13・給仕係

シゼル様が消えてから少しも経たない内に、上階から小刻みに足音が聞こえてきた。

つられるように見上げれば、一人の侍女が階段を降りてくるところであった。

彼女は一度立ち止まってこちらを見ると、「うひゃあっ」と奇天烈な声を上げた。

「シゼル様の彼女じゃーん！」

ミルキアさんの顔がぎつと私に向いたのがわかる。
私は冷や汗をかきつつ、首を傾げた。

身に覚えのないことをほざいたその侍女は、メイドキャップを付けておらず、薄茶の髪を頂点でお団子に結っている。

グラマーな程度にふくよかで、灰色の瞳を中心に据えた大きな三白眼が特徴的だった。

片耳に三連にして付けられた銀の輪型ピアスはともかくとして、格子柄のタイツは明らかにご法度だろう。

学生時代、不良ぶった人種やその仲間が、規定の学生服と私服を混ぜて着ていたのを思い出した。

彼女は階段を小走りで駆け降りると、私の目と鼻の先で止まった。

「こんばんは！あたしが誰だかわかるかなっ？」

城内でこんなくだけた話し方をする人物は、三日前見た彼女が初めてである。

であるからには。

「……門番さんですか？」

「せいかーい！覚えてくれて、嬉しいなあつ。シゼル様の彼女だから、たつくさん気に入られとかないとね！」

ミルキアさんが聞き捨てならない言葉と判断したのだろう、隣でひとつ咳払いをした。

「失礼ですが、その『彼女』というのは恋人という意味にとってもよろしいのでしょうか？」

「ちっ、違いますよ！きつと妙な誤解です！」

私は慌てて訂正を入れる。

「えー、恋人でしょー？シゼル様が知らない女の子連れて歩くなんて初めてだしー。あつ、あとあたし、二人が手を握り合ってるの見たちゃったんだっ！きゃっ！」

「握り合っただなんて人聞きの悪い！あれは手に刺さった棘を取って差し上げただけで……！」

「一先ず静かにして頂戴」

ややドスの混じった声で言われ、私は口を噤んだが、目の前の侍女は全く気にしていないようだった。

「ねえねえ、そんなことより、あたしニイってゆーの！君は？」

「あ、私は……」

「彼女はオルカ・ユードイス。本日共に給仕を行うことになっています。ですが急に代理で入ることになったので、わたくしはこれから彼女に仕事を教えなければなりません。王家の方達はもうとっく

に席に着いています。あなたは先に行って給仕をなさい。わたくし達も後で手伝いに行きます」

「はい、了解です」

諫めて黙らせるのは無理だと判断したのだろう。ミルクアさんは口を挟む余裕もなく言葉を並べ、さつさとニイを追いついてしまった。

ニイという女は小さいことは気にしない性質で、ミルクアさんはそれをよく見抜いて上手くやり込めている模様である。

どんな問題児もミルクアさんの手の上で踊らされる運命なのね、と私は心中で涙を流した。

ミルクアさんは疲れたように溜め息を吐き、私に向き直った。

「それでつまり、あなたは三日前シゼル様にお会いしたのですね」
「えっと……」

先程のシゼル様とのやり取りは勿論見られていただろうし、ニイの誤解につられて、つい決定的な証言を自ら話してしまった。今回こそは逃げられなさそうだ。今までも逃げているとは言い難い状況であったが。

「はい……お会いしてました……」

私は呟くように告白した。

ミルクアさんの眉間の皺が濃くなる。

「わたくしは今意地悪なことを聞きました」
「え？」

怒っているのかと思ったら、そういうわけでもなさそうだった。それよりも彼女のやや俯いた顔は、真剣に思いつめているふうである。

「ごめんなさい、オルカ」

「え、え？それはどういう……」

どういう意味の謝罪ですか？

そう聞こうとしたら、ミルキアさんはきつと顔を上げ、真っ直ぐに私を見つめた。

「給仕の作法は覚えていました？」

「え、と、多分……はい」

急に話が変わったので一瞬頭がこんがらがったが、恐らく待機の仕方や食事の出し方のことだろう。

教わったのはかなり前だったかもしれないが、私の実家もいわば給仕系の職場であったので、大体はわかる。

「では、簡単に仕事の流れと、この屋敷での注意点を今から教えますね」

そう前置いて、ミルキアさんは話し始めた。

私は相槌を打ちながら聞いていたが、先程の謝罪が気になって、実質半分も頭に入ってこなかった。

ツェーヴラーグの上流階級の食事は、他国と比べると品数が少ないらしい。

夕食で言うと、まず酒と同時に前菜が出される。その後スープが出され、次いでメインディッシュとパンが出る。最後にデザートだ。この伝統は、建国後何世紀もずっと経済状況の良くない時代が続いたかららしい。勿論種類が少ないだけで、その分ひとつのメニューの量はしっかりしている。

私が参戦したのは皆が前菜を食べ終えようとしているところだったので、お次はスープである。

見た目通り、この館は人がいない。

給仕はニイと私とミルキアさんの三人である。

盛り付けから始まり、厨房から料理を運ぶのもその内の誰かがやらねばならなかったらしい。私達が駆け付けたとき、ニイは文字通り汗水垂らして働いていた。勿論食事の前でそんな見苦しい姿を見せるわけにはいけないので、彼女は一生懸命汗をハンカチで拭っていた。

見た目や態度に反して、一応仕事は真面目にやっているらしい。

私達の姿を見ると、ニイは天からの助けとばかりに顔を煌めかせた。

本来初めから一緒に働いているべきところなので、私はやや居心地が悪い。

「良かったー！何かね、今日フェイが時間配分間違えたっぽくて、厨房のほうもかなり忙しいんだよねっ。あたし主に料理の手伝いしてくるから、後よろしくねえ」

言い残すと、彼女は汗を撒き散らさんばかりに走り去って行った。

ミルキアさんは料理を運び、盛り付けを手伝い、私は給仕そのものに専念する、という役割分担になった。

早速空になった前菜の皿を回収すべく、私は食堂に足を踏み入れる。

先程の角灯持参騎士は、食堂扉の表側と内側にそれぞれ一人ずつ待機していた。

食堂は横に長い空間で、真ん中に木製のつやつやしたテーブルと猫足の椅子が並んでいる。席は合わせて十六あるようだ。

入口から見て右奥の席に王様が腰を下ろし、その左に王妃様と皇太子様、右側にシゼル様が座っている。

天井からは小さめのシャンデリアが二つ吊り下がる。燭台も四方の壁にひとつずつついているので明るい。

ざっと見渡したかんじで、絵や陶器の装飾品は一切なかったが、代わりに王様の席の後ろに、小さなピアノがちょこんと置かれていた。

正面の壁には縦長の格子窓が二つついている。外が暗くて中が明るいので、窓には食卓の情景が鮮明に映されていた。

私は「失礼します」と言い置き、食器を片づけ始めた。その際飲み物と水差しの残量チェックも忘れない。今夜グラスに入っているのは、皆一様に赤ワインのようだった。

王様は早々にワインを飲み干し、グラスの中には代わりに水を入れている。もう酒はいらないという合図である。

シゼル様と皇太子様はほとんど赤ワインには手をつけていないようだ。

意外にも王妃様のグラスが空のままだった。これは注ぎ足さねば。水差しのほうは大丈夫そうね、と確認し、私は盆に皿を重ね終えた。

そして運び去ろうとしたところで、王妃様が急に私の名前を口に

した。

「ねえ、シゼル。彼女がオルカ・ユーデイス嬢よ」

「ええ、先程皇太子様が紹介してくださいました」

「覚えてない？わたくし話したでしょう？夜会でディードを振ったのは彼女なのよ」

私とシゼル様の動きが同時に止まった。

シゼル様の硬直は一瞬のことであつたが、私の硬直はしばらく続いた。

動こうにも、今の会話を無視して動いて良いのかがわからない。

「それはそれは。奇異な方ですね」

シゼル様の口調に若干笑みが混ざつた。

ここは謝るべきところなのか？

しかし今更謝つたところで嫌味にしかない気もする。

私は聞こえないふりをして立ち去ろうとしたのだが、王妃様が私を呼び止めた。

「ねえオルカ嬢。どうしてディードじゃ駄目だったのかしら。わたくしずっと気になっていたんですのよ」

「え、ええと」

何と言おうか逡巡していると、皇太子様が少し咎めるような口調で言つた。

「母上、そのようなことを尋ねては彼女も困ってしまいます」

「あら、ごめん遊ばせ。困らせるつもりはなかったのよ。そのことについてはわたくしもディーダ自身も怒ってなどおりませんから。ただ純粹に気になっただけ」

王妃様は切れ長の目を更に細めて、狐のように笑った。

「ねえオルカ嬢。折角なのですから、そこにお座りなさいな。ちょっとぐらい給仕が遅れても良いでしょう？あなた」

「ああ、構わない。ゆっくり食事がとれるのは、それはそれで良いことだ」

私は、

「タ、タイヘンコウエイデス」

と引き攣った声を絞り出すのが精一杯であった。

14・王家

ミルキアさんに給仕の全てを任せ、私はシゼル様の隣に腰を下ろすこととなった。

緊張で、相槌を打つだけでも体がぎしぎし言う気がする。

「あの、その、聞き及んでいることとは思いますが、当時私には気になる殿方がおりまして……」

事情を説明し出すと、早速王妃様が口を挟んだ。

「ええ、存じておりましてよ。わたくしがお聞きしたいのは、あのときダンスを断った理由ではなく、あなたがデューダを選ばなかった理由ですの。あなたが想い人に振られた後だって、ずっとデューダを避けていたでしょう？」

それを当の皇太子様本人を目の前にして母親が聞くのか。

正面に座る皇太子様も、私と同じことを思ったようである。

「母上、あなたが私のいる前でそれを問うのは、彼女にとっては酷ではないでしょうか」

「そう？だってあなただって、オルカ嬢のことがまだ好きだというわけではないでしょう？」

「それは……」

王妃様はちつとも悪いとは思っていないようで、小首を傾げてみせた。

私的に驚きだったのは、『まだ好きだというわけではない』とい

言葉。『まだ』ということは、当時は好きだったのか。
勿論本人の論証があるわけではないから、確定ではないけれど。
全く接点がなかったし、よっぽど私の容姿が好みだったのかもしれない。物好きなものだ。

次に穏やかに口を開いたのは、王様だった。

「ヒルダ、聞き方を変えれば良いのでは？例えば、オルカ嬢の好きな異性のタイプはどのようなものだ？」

「ああ。そうですね。それがいいわ。どうなのです？オルカ嬢」

三人の視線が私に集中する。一人はのんびり答えを待つように、一人は興味津津に、もう一人は苦笑を浮かべつつ控えめに。

シゼル様だけはそんなことをしても意味がないのだろう、視線は相変わらず前を向いていた。しかしこの沈黙の中だ、どうせ意識せずとも聴覚は私の返答に集中しているに違いない。

何故王族の方々にお泊り会のガールズトーク並の暴露話をせねばならないのだろう。

何にせよ私はこんな性格だから、面白い返答は出したくても出せない。

「それは私にもよくわかりませんの。私にいわゆる想い人がいたのは、今までの人生で一度だけなのですから」

「あらまあ。まだポルテツフェル伯爵家のご長男を想ってらっしゃるの？」

「と、とんでもございません」

彼はあの一件の一年後に結婚しており、最近子どもも生まれている。

そこまで執着があったわけでもないし、振られた瞬間に未練とおさらばしていた。

「私は異性に特別な感情を抱いたことがありませんの。伯爵家のご長男のことに關しても、今本当に好きだったのかと聞かれれば疑問を覚えます。年も離れていましたし、きっとただの憧れだったんだと思いますわ」

このような公式の場で「私の周りにまともな男がおりませんでした」などとは言ってはいけません。

そんなことをしたら、私が誰をまともではないと思っているのか、すぐにばれてしまうからだ。

「昨日会議でユーデイス侯爵とお会いしてきたのだが……彼の話は本当のようだな」

王様が感慨深げに言った。

嫌な予感しかない。

「失礼ですが、父が何か……？」

「そなたのことを、『理想の高い娘』だと言っておったよ」

あのユーデイス家の狸頭領の癖にぶつちやけ過ぎである。

それくらい私の風評などどうでもいいのか。確かに今更妙な噂が一つや二つ増えたところで変わらないだろうが。

私は何とか心を落ち着かせて、ゆつくりとかぶりを振った。

「それは誤解ですわ」

「何にせよ、あなたは恋人などいらっしやいませんかのね？」

「ええ。おりません」

「想い人も」

「おりません」

王妃様は少し考えるような素振りを見せてから、再び私を見つめた。

今度は少し真剣な表情である。

「ねえオルカ嬢。あなたもしかして、王族や貴族の家庭には嫁ぎたくないと思っでいらっしゃる？」

「いいえ？そんなことはありませんが……。もしかしてそのことに關しても父が変なことを言われましたか？」

私を行儀見習いに送り出した本当の理由まで正直に言っでしまっただのだろうか。

「平民出の城勤め男性で、娘に良さそうな人間がいたら紹介してくれ、でしたっけ？あなた」

「ああ。そんなことも言っでおっただな」

私は心の中で頭を抱えた。

父よ、もう少し自重してくれ。

「その申し出についてはどうかお氣になさらず。父の失礼な態度、代わっで謝罪いたします」

「氣にするでない。そなたの父上はなかなか氣持ちの良い人間で、私も仲良くさせてもらっでいる」

氣持ちの良い人間だなんて、父には全く似つかわしくない称号である。王様、騙されてるんじゃないだろうか。

私はこの国の行く末が心配になった。

「オルカ嬢のことについては、よくわかりましたわ。あなたも、これで良いかしら？」

「うむ。仕事で来ているのに話に付き合わせて悪かったな。下がって良いぞ」

結局王家の方々の真意がわからないまま、私は再び仕事に戻った。ツエーヴラーグの王族は他人の色恋沙汰が好きなのだろうか。だとしたら私の話など何の面白みもなかったと思う。

再び仕事に戻ると、ミルキアさんが何だか複雑そうな顔をしていた。彼女は私が会話をしている間時々給仕で姿を現していたので、所々聞いていたのかもしれない。

その後は話の矛先が私に向くことはなかったので、私は一先ず安心した。

また、飛び入り参加の仕事であったが、多くの時間を会話に費やしたので、目立った失敗をせずに済んだことも良かったといえ良かった。

やがて帰る時間となった。あと三十分程経てば、そろそろ日付も変わる時刻だ。

シゼル様はハイネの畑に入る門のところまで見送りに来た。

「それじゃあ、また。一ヶ月後に会えることを楽しみにしている」
「ええ、お元気で」

王様は名残惜しさを隠しもしないようだったが、シゼル様は相変わらず無愛想で機械的な応対をしている。

王妃様と皇太子様も別れの挨拶を口にし、いざ帰らんという雰囲気のところ、シゼル様の声が響いた。

「最後にひとつだけ、お願い申し上げてもよろしいでしょうか」

そのとき、空気の質が変わるのがわかった。
今まで別れを惜しみながらも和やかだったその場が、俄かに緊張を帯びてくる。

「聞こう」

王様が硬い声で言った。

「オルカ嬢を、少しの間お借りしてもよろしいでしょうか」

シゼル様以外の皆が、騎士達さえも、息を詰めたようであった。
硬質な空気は一気に失せたが、代わりに戸惑いがその場を支配する。

私、彼に何か不快なことをしただろうか。

王妃様だけは何故か暢気そうで、「あらまあ」と少し楽しげに呟いた。

「一体どんなご用件で彼女を借りる予定ですか？」

「少し、夜の庭園を案内していただこうと思ひまして」

もしかして、また私に花の通訳を頼むつもりなのだろうか。だとしたら、あのときの拙い説明は彼なりには成功だったのかもしれない。

「オルカ嬢が良ければ、別によろしくってよね？あなた」

「あ、ああ」

王様は頷いたが、その目は驚愕に見開かれている。彼の視線の先を辿れば勿論シゼル様なのであるが、一体何がそんなに……と、思つてシゼル様を見ると、彼はうつすらと笑みを浮かべていた。

月明かりを背にして、暗闇の中虚ろな目で笑みを浮かべるシゼル様。

これって私の死亡フラグなんじゃなからうか。

「よろしいですか？オルカ嬢」

そう言う彼の声音は、言葉遣いは丁寧であれど、やはり有無を言わさぬ何かを含んでいる。

「はい……」

結局私の選択肢なんてひとつしかないのだ。

15・悪役

ハイネの畑の小道は舗装されていなかったが、庭園の道は石畳になっている。

革靴を挟んで伝わってくるごつごつとした感触を楽しみながら、私はシゼル様の後ろをのんびりと歩いた。

私に案内を頼む的なことを言っていたが、今のところ案内しているのはシゼル様である。

というか、彼が勝手気ままに散歩をしているというのが正しい。私が歩みを止めれば、きっとまたシゼル様は急かすのだろうけれど。

相変わらず外灯が咲き乱れる花々を煌々と照らしていたが、もうそれは不気味には見えなかった。

王家の人々やミルクアさんがいないというのは、視界を変えてしまう程に解放感を与えてくれるものなのかもしれない。

加えてもうひとつの理由があることを、私は自覚している。

目の前に行くシゼル様は得体の知れなさで言ったら誰よりもずば抜けている。しかし自分でも意外なことであるが、私はどうやらこの男に気を許し始めているらしい。

絆創膏の貼られた手を見せたのは、間違いなくちゃんと医務室に行ったことを示したかったのだろう。

彼が悪い人間ではないことを知った今、彼という存在の不可思議さは、逆に私に安心感を与えているようであった。

お城では常に侍女らしく、時には淑女らしく振る舞わねばならない。

しかしシゼル様は依然正体不明である。侍女として接すれば良いのか、淑女として接すれば良いのかわからない。

じゃあ今のところはどうでもいいではないか。彼が正体を明かさないので悪いのだから。

どうやら私には、そんな開き直りがあるらしかった。

加えて、彼と出会ってしまった事実はもう到底塗り変えられそうにないので、これが開き直らずにいられるかつての。

虫の声と杖が石畳を叩く音、それから二人の密やかな足音だけが庭園にこだまする。

今のところ会話はない。

でも、今の私にとってはそれは居心地の悪いものではなかった。むしろ行儀見習いで勤め出してから、初めて息抜きができた心持ちだ。

「あなたは人が苦手か？」

唐突に、しかし歩みを止めることはなく、シゼル様の声が響いた。

「苦手、に思えましたかね。今日の食事会で」

「ああ」

呟くように、彼は肯定する。

私はうーん、と少し考えた。

普段なら、はいでもいいえでもわからないでも、このような問いには適当に答えていた。

しかし、理由がどうあれ折角少々心を許せる人間に出会えたのだ

からと、私は少し真面目になって考察してあげた。

「苦手といえば苦手ですけども、もし私が色々な街を旅して回るサーカス団の家庭に生まれたなら、苦手にはなっていないかったです。よう。無職の父親がいる家庭、とかでもそうかしら」

シゼル様はそこで立ち止まって空を見上げた。
私もつられて見上げる。

半月の月が冷たい夜空に静かに浮かんでいた。
青い雲とその切れ間から覗く星が世界を包んでいる。

少しの沈黙の後、再びシゼル様の声が響く。

「駄目だ。わからない。その言葉の意味は？」

どうやら真剣に私の台詞を吟味していたらしい。

謎かけのつもりで言ったわけではなかったが、自分の発言をまともに受け取ってくれたことが妙に嬉しかった。

「私は家族曰く『じゃじゃ馬』です。でも、そんな私を育ててくれたユーディス家に泥を塗りたいだなんて思ったことは一度もありません。じゃじゃ馬はじゃじゃ馬なりに周りに気を遣っているのです。無駄な努力かもしれませんが」

「成る程。確かに旅人か、既に汚名を被っている家庭なら、さして評判を気にすることもないな」

シゼル様は一瞬こちらに顔を向けた。

「あなたは窮屈だったのか」

そう言って再び前を向く。

「貴族に、それもユーディス家に生まれたことが」

私はぽかんとシゼル様の背中を見つめていた。

先程の彼の言葉を、何度も何度も反芻する。

そっか。私、窮屈だったんだ。

彼の言葉で初めてその事実を自覚したわけではない。この感情はずっと昔から持っていたはずだ。

しかしそれを表に出すことは元より、心に上ってしまうことすら親不幸に思えて、ずっと考えないようにしていたのだ。

だから赤の他人であるシゼル様が私の気持ちを代弁してくれて、酷くすっきりした気分になっていた。

そう納得して初めて、己が恋愛沙汰に興味のない理由もわかった気がした。

ふいに無口になった私を不審がってか、彼がこちらを振り返った。光のない目で私を捉える。

「間違っていたか？」

「いえ。違うのです。余りに正しかったので、吃驚しました」

私はそこで口を閉ざしたが、彼は尚も姿勢を変えようとはしない。

珍しく私は、自分の話を積極的にしようという気持ちになってい

た。

本人は気付いていないだろうが、彼は私の代わりに悪役になってくれた。

今彼に返せるものを、私は言葉以外に思いつかない。

「でも私、同時に家族には随分甘えていたんだあつて、気付きました」

「『あのユーデイス家』に、か」

「ええ。シゼル様は知っているのですね。『あのユーデイス家』のこと」

「ああ。以前食事で、皇太子とあなたの一件が会話に上ったときに聞いた」

「じゃあ私の妹カノンのことも知ってます？」

「それも聞いた。双子……なんだとな」

「そうです。彼女にも随分甘えてました。お菓子を独り占めしたり、顔に落書きしたり、婚約指輪を壊したり」

「それがあなたの甘えなのか」

シゼル様の表情に少なからず呆れが混じった。

私は大きく頷く。

「そうです。結局本当の意味で私が甘えられる存在なんて、家族だけなのかもしれません」

シゼル様はそうか、と相槌を打って、再びゆっくりと歩き出した。

どうやら庭園内を一周する、というコースらしい。

遙か彼方ではあるが、ハイネの畑へ続く門が見えてきて、私は少し残念に思った。

久々の息抜きの時間も、そろそろ終わりそうである。

「面白い話をしてやろう」

ふいにシゼル様がそう言った。

私の心の中には少しの不安が過ぎる。

自分のことを喋るのは良いとしても、彼の情報を知るのは未だ躊躇いがある。

「それ、私に不利なことになりませんか？」

ふっと息を吐く音がした。どうやら鼻で笑ったらしい。

「再度私の前に姿を現して言うことか。何もかも手遅れだ」

「えー……」

「忠告を無視するのが悪い」

忠告を無視したわけではない。変に嘘を吐けない性質だとか、変にお人好しになってしまう性質がここまで私を流してきたのだ。そう思って不平を言おうとしたが、シゼル様が口を開くのが早かった。

「だが、不利か有利かといったら、有利な情報を与えるつもりだ」

「そうですか。なら聞きます」

私は即答した。

シゼル様は頷くと、言葉を噛み締めるように、丁寧な声を響かせた。

「皇太子はあなたのことが好きだった。今もその気持ちが変わって

いないかどうかはわからないが、少なくとも気にはかけている」

私は暫く絶句していた。

まさかここで皇太子様の話が出るだなんて、思いもしなかった。

「……何でそんなことがわかるのですか」

「態度でわかる。あと、以前の食事会のとき、本人が『振られた』という表現を使っていたからな。あなたをダンスに誘ったのは、奴にしては告白のようなものだったのだろう」

ということは、やはり私の容姿がよっぽど彼の好みだったのか。そう思ったが、シゼル様の次の台詞はそうではないことを示していた。

「『夜会などという華やかな場面でも、自分を売り込もうなどという浅ましが全く感じられない。いつもホールの隅にて一人で食事を取っている慎ましげな女性』だそうだ。奴曰く。それがまさかあなただったとは、夢にも思わなかった」

最後の一言が余計だが、今はそれ以前の言葉が衝撃的過ぎた。つい本音をぼろりと転がしてしまった。

「皇太子様は阿保ですか」

しかしそれを聞いたシゼル様も、「ああ」と言って微かに笑ったので、私は安堵する。

「さしずめ人付き合いが面倒で、食に集中していたのだろう?」

大体図星である。

「まあ、そんなところです」

私は少しむくれた。

「それが、私にとってどう有利なのですか」

「最後の切り札を与えてやった、ということだ。いつかわかるときが来るかもしれない」

彼はそれ以上何も言う気はないらしいので、そのときはまだ先のようにだ。

そんなやり取りをしていると、いつの間にか門の前まで来ていた。シゼル様が私のほうに体ごと向いた。

「付き合わせて悪かったな」

「いえ、そんな。シゼル様の言うところの『有利な情報』を与えるためだったのでしょうか？」

「ああ」

「では、お礼を言うのは私のほうです。ありがとうございます」

私はへこりと頭を下げた。

見えていなくても、やはり敬意は体でも表したい。

「私はてつきり、また花の通訳をさせられるのかと思いましたよ」
「そうか。それはまた今度頼もう」

え、と私は声を詰まらせた。
今度があるとは思っていなかった。

「どうした？」

「あ、いえ。何でもありません」

そうして、私達は酷くあっさりと別れた。

帰り道、私は考えた。

今度つて、いつだろう。

普段人との接触を回避したがる自分に見れば、この期待感は一画期的な変化である。

涼しい秋の夜風が吹いて、私はお腹の底の温かさを身に沁みて味わった。

16・親不幸

上級学校に通っていたとき、進路希望を記入する紙が配られることがあった。

周りの友達のほとんどは、提出するのがとても早かった。

親の事業を継ぐ、とか。

大学に進学する、とか。

どこかに嫁ぐ、とか。

大体そんなものである。

私も辿るであろう進路は見当がついていた。恐らく上記で言えば三番目だ。

しかしそれは私の進路予想であって、希望ではなかった。

結婚なんてしなかった。

憧れていたポルさんとさえ、結婚したいだなんて微塵も思ったことはなかった。

今考えると、それでも彼に告白した私は随分と軽薄な奴である。

どうして結婚しなかったのかが、最近ようやくわかった。

私はユーデイス家を出たくなかったのである。

ユーデイス家の評判を気にすることなく、自由に行動できる場所だなんて、当のユーデイス家以外どこにもないのだ。

どこかの貴族の家に嫁いだが最後、私の安らげる場所なんてどこにもなくなってしまう。

父は平民の家に嫁いでも良いと言ってはいたが、それはそれでユ

ーデイス家の評判に悪い影響が及ぶ可能性がある。

家族にしか甘えられないから、離れるのは嫌だった。

でも、そんな家族だからこそ恩がある。迷惑はかけたくない。

そういつた中途半端な思いが私を苦しめていたことが、今ならわかる。

「まだ悩んでるの？オルカ」

結局提出日の放課後まで頭を悩ませていた私に、補講を終えた友人が見かねて声をかけた。

それは上級学校二年目の冬で、空は真っ白に曇っていた。

本来私の席は廊下側だったのだけれど、皆が帰った後だったので窓際の席を勝手に借りて、一人で唸っていた。その席は隣にストーブが置かれていたからで、ストーブも私と一緒に唸っていた。

声をかけて来たのは財閥のお嬢様で、彼女は卒業後すぐに結婚することが決まっていた。

彼女は長くウェーブのかかったチョコレート色の髪を揺らして、私の席に近付いてきた。そして私の座る前の席の椅子を引き、スリートを押さえて腰を下ろす。

「行けばいいじゃない、大学」

さもそれが当然のように彼女は言った。

でも私は机に置かれた進路希望の紙に頬を押しつける。

「駄目よ。それは逃げだわ」

「逃げればいいじゃない。嫌なんでしょ？さつさと結婚させられるのが」

「嫌だけど、親はそれを望んでるし」

真面目ねえ、と彼女は言って、その言葉は変に私の胸をざわつかせた。

「メルは嫌ではないの？親の決めた結婚でしょう？」

「あなた程じゃあないわ。つまらないなって思うこともあるけれど、私はよっぽどの人間じゃない限り順応できてると思うてるし。後から愛情が付いて来る結婚だなんて腐る程あるわ」

ふうん、と私は彼女を羨望の眼差しで見つめた。そこまで割り切れる大人な彼女が、心の底から不思議だった。

「でもあなたは一筋縄じゃないかな性格なわけだから、それでは納得できなさそうね」

「できてないから未だにこの用紙提出してないのよ」

「そういうところも変に真面目だわ。適当に書いて誤魔化せばいいじゃない。後から変えたって、誰も責めやしないわよ」

「でも、これを基に来年の学級分けがあるのでしよう？」

「だから大学って書けばいいのよ、とりあえず」

「そうしたら確実に三者面談が待っているじゃない」

「あーもう、るっさいわねえ。何ぐじぐじ言ってるんのよ、気持ち悪い。それはその時考えればいい。親が駄目って言ったら、大学は諦

めて、良いって言ったら行けばいい。それだけ。ほら単純」

「そんなことしたら、絶対行かせてくれるに決まってる」

「なら良かったじゃない」

「そうしたらまた迷惑かけるわ」

彼女は片手で額を押さえた。

「何が迷惑で、何が迷惑じゃないかの判断くらい、親に任せてあげなさい」

諭すように言う彼女の横顔が、窓向ここの薄明かりに照らされて綺麗だったことを覚えている。

結局私は、自分に都合の良い言葉に甘えて、用紙に「進学」と書いて提出してしまった。

彼女のせいにするわけではないけれど、私は今でもそれを後悔している。

17・独りぼっち

食事会の翌日、私はすっかり寝坊し、すっかりミルキアさんに怒られた。

昨夜の事情を知っているにも関わらず、何の手加減もない。

とはいえ、徐々にはあるがミルキアさんが通常営業になってきたのは喜ぶべきことである。

説教を耐え抜いた後、私は使用人食堂へ向かう。

今朝は健気にも朝食をとらずに出勤して来たので、その分昼食で栄養補給せねば。

ミルキアさんのせいで昼休みは既に十分程削られている。加えて今日はアリシアと話がしたかったので、自然と足取りは速くなっていた。

使用人食堂は、「使用人の館」とも呼ばれる西館の一階にある。

中は侍女、騎士、近衛兵、文官などの制服オンパレードであった。400名程いる城勤めの人間の大半がここで一斉に食事を取るため、何の見当もつかないままアリシアを探すのは困難だっただろう。しかし幸いにもアリシアはいつもほぼ同じところで食事をとっている。

私の予想通り、アリシアは奥まった窓際の長テーブルの端にぽつんと腰かけていた。

さらに幸いなことに、いつも一緒にいる友人の侍女も、今日は見当たらない。

私は早速彼女に声をかけた。

「アリシア」

そう呼びかけると、彼女は一瞬びくりと肩を震わせたが、手を振る私を見ると安心したように眉尻を下げた。

そつえば虐めの話、ミルキアさんに報告したほうが良いだろうか。本館侍女長なのだから知っていそうなものではあるが。

「そこ、座っていいかしら？」

私がアリシアの向かいの席を指さすと、彼女は微笑んで頷いた。

「ええ、よろしくつてよ」

「じゃあ私ご飯取ってくるから、その席空けといってくださいさる？」

「わかったわ」

アリシアが向かいの席に自分のカップを置くのを見届けてから、私は背を向けた。

使用人食堂はバイキング形式なので、食べたいものを食べ放題である。食事の時間はこの城での数少ない私の娯楽だった。

さて今日は何があるのかしら、と考えていると、右奥から良からぬ視線を感じた。

見やると数人の侍女が固まって食事をとっているのだが、皆がこちらを面白くなさそうに眺めている。

私と目が合うと顔を見合わせてくすくす笑い出す始末だ。

非常に面倒そうな雰囲気であるが、害をなされたわけではないので一先ず放っておくことにする。

恐らくあれがアリシアを虐めている輩だろう、との予測はついた。

私の貴重な昼飯を不味くすることは何としても避けたいので、私は努めて彼等の存在を視界から追い出した。

本日私が自分用に取り分けたのは、ビーフシチューに枝豆のパン、海藻のサラダ、ヨルダと呼ばれる渦巻き状のケーキ、そして牛乳である。

朝食をとっていないことによる栄養不足を補充するため、いつもより分量は多めにする。ヨルダも二個食べちゃえ。

食欲減退は今後の仕事に支障が出る。可能な限り目的地のみを意識して席に戻った。

良からぬ視線を送ってくる彼女らは、このときに限り汚物と同じ扱いであるが同情はしない。

私が席に着くと、向かいのアリシアは早速頭を下げてきた。

「オルカ、昨夜は本当にありがとう。この礼はいつか必ずするわ」
「はいはい、どういたしまして。お礼は食べられるものがいいわ」

口をもぐもぐさせながら適当に答えると、アリシアはうふふと笑った。

「オルカったら昔から食べるものにしか興味がなかったものねえ」
「心外な」

「わたくしがどんなにワーディロッドの梅という花が素晴らしいか話しても、全然聞いていなかったじゃない」

「花に興味がなかっただけよ」

「あら、じゃあ何か他に趣味でもあるの？食べ物関係以外で」
「まあ、ね」

何だか明らかに言葉を濁すような言い方になってしまったので、私はさっさと話題を変えることにした。

「そんなことよりアリシア、聞きたいことがあるのだけれど」
「何かしら」

私は音量を少し下げて言った。

「立ち入り禁止区域って、何で立ち入り禁止なの？」

アリシアはきょとんとした。

「え？何故今更それを尋ねるの？まさかあそこまで足を踏み入れておきながら何も聞いてないの？」

「特に説明されなかったし……。私も敢えて聞かなかったのよ。知ってはいけないような気がして。私に害が及ぶのは嫌だわ」

「でも今は知る気なのね」

「あー、ええ、まあ。何か手遅れらしいし」

ふうん？と呟いてアリシアは一度紅茶を口に含んだ。

「あそこは研究施設らしいわよ」
「へ？」

私は拍子抜けした。
あまりに当初の予想通りではないか。

「それはつまり、国家機密の研究とかしちやってる怪しいところってこと？」

「みたいね。わたくしも何を研究しているのかまでは知らないけれど」

「じゃあシゼル様も研究者なのかしら」

「ええ。侍女長がそう言っていたわ」

私は腕を組んで考える。

予想通りなのは結構だが、本当に研究施設だとすると、かなり不穏な将来を想像してしまう。

私は本気で謝るミルキアさんと、責任取れとか言ってたシゼル様の発言を想像に繋げて考察してみた。

例えば、見てしまったからには生かしておけぬ、あなたに実験台になってもらおう。とか。

やばい。あのシゼル様の不気味さから言えば、このシチュエーションかなりしつくりくる。

「オルカ？大丈夫？あなた顔色悪いわよ」

アリシアが心配げにこちらを窺ってきた。

知らぬ間に脂汗まで浮いてきていたようで、私はハンカチを取り出して額を拭いた。

実はシゼル様は、「ちょっと危うい雰囲気な人」どころか「超絶危険人物」だったのかもしれない。

「それで、他には何がわかってるの？あの場所について」

「わたくしが知っているのはそれだけよ」

「それだけ？」

私は我が耳を疑った。

「ええ、それだけ」

これでは私の持っている情報と大差ないではないか。
つまり大して私と状況が変わらない。なのに何故私と彼女とでは
こんなに危機感が違うのだろう。

「気にならないの？」

「だって国家機密よ。これ以上知っても良いことないでしょうに」

「それはそうだけれど。何かこう、不穏な雰囲気を感じない？あと、
ミルキアさんとかから意味ありげなこと言われたりしてない？」

「侍女長から？……ああそういえば、今朝物凄く叱られたわ。『た
かが個人的な逢引のために重要な仕事を他人に引き渡すとは何事で
すか！』って。どうして彼とのデートのことまで言ってしまうのよ。
体調不良とか他に言い方はあるでしょう」

「ああそう」

口を尖らせるアリシアに、私は気の抜けた返事を返した。
どうやらアリシアと私の立場は、何か決定的に違うらしい。

「あなたが侍女として働き出したのは、かなり最近よね？」

「ええ、そうよ。二カ月とちょっと前くらい」

「あの食事会の仕事を割り当てられたのはいつ？」

「仕事を始めてから一週間程経った頃かしら。だからわたくしも食
事会の仕事はまだ一度しかやってないのよね」

それって変じゃないかしら。

と、言おうとして、私は口を噤んだ。もし彼女がその異常性に気
付いていないのなら、或いは気付いていない振りをしているのなら、

これは言わないほうが良いのでは？との考えが過ぎったからだ。
しかし、これは明らかに妙である。

普通は間接的にはあれ、国家機密に関わる仕事に雇ったばかりの侍女を使うことなどしない。

私がむうと唸っていると、アリシアが「あら大変」と席を立った。

「もうこんな時間だわ。仕事に戻らないと」

振り返って壁の時計を見ると、確かにあと少しで昼休みの時間が
尽きようとしている。

気がつけばいつの間にか人の数もまばらになっていた。

「本当。ごめんなさいね、つまらない話に時間を割かせてしまって」
「ううん、いいの。わたくしも丁度一人だったし」

心なしか、そう言って微笑んだ彼女の顔が泣いているように見え
た。

仕事に戻る廊下の途中で、私はふと思った。

アリシアがいつも一緒にいる友人は、どこに行ったのだろうか。

18・虐められっ子

アリシアと昼食をとった日から数えて四日目の午後。

私は結構本格的に悩んでいた。

アリシアの虐めの件であるが、どうやらかなり悪質であるらしいことがわかったのだ。

私がアリシアと昼食をとったときからずっと気にかけていたのだが、やはり彼女の近辺にあのいつも仲の良かった友人がいない。

放っておくのも後味が悪いので、それからは私がいつもアリシアとご飯を食べていた。

すると複数の同僚から忠告を与えられた。「彼女と一緒にいると虐めの標的にされる」と。聞くところによると、あの仲の良かった友人もついには嫌がらせに耐えきれず、アリシアと距離を置くようになってしまったのだとか。

忠告には感謝しつつも、やはりアリシアを放置して食べるご飯は不味いだろう。折角数少ない娯楽なのであるから、栄養補給くらい気持ち良く行いたいものである。

そんなわけで相も変わらずアリシアの向かいに席を取っていたら、同僚達はついには私にまで距離を置くようになった。

うーん学生時代を思い出す。それでもってやっぱり少しは傷ついたりもする。

私があまり口を出す問題ではないが、アリシア自身はどう思っているのだろう。そう考えて、躊躇いを振り切って昨日の夕食のとき聞いてみた。

「アリシア、前あなたに嫉妬している人から嫌がらせされてるって言ってたじゃない？具体的に何をされてるわけ？」

彼女の体はたちまち強張り、顔がどんどん白くなる。

「ご、ごめんなさい。もしかしてあなたも何かされたの？」

渴いた声でそう言われると、こんな私でも同情せずにはいられなくなつた。

「いえ、そういうわけではないの。謝る必要もないわ。ただ、周りの様子を見ていると結構深刻なのかなって思つて」

努めて何でもないように聞いてみた。

アリシアは「そう」と言つて俯く。

やがて声を潜めて話し出した。

「実はね、本当に結構深刻なの。最初は何かと理由をつけて仕事を押し付けられたのね。でもあんまりにも頻繁なものだから、おかしいと思つて断るようになったの。そうしたら今度は、わたくしが掃除したばかりのところでわざとバケツをひっくり返すようになったわ。あと、気が付くとわたくしが使つていた掃除用具が消えていたり。探しても見つからなくて怒られて。後からとんでもないところから出てきたりするのよね。最近一番酷かったのは、わたくしの部屋が勝手に荒らされていたこと。お金を取られたとかではなかったのだけれど、彼にもらつたネックレスが壊されていたわ。鍵は壊れてなかったから、多分西館のハウスキーパーが協力しているのだと思う」

意外にもアリシアは、口を開けばすらすらと虐めの実態を吐き出した。

そしてその瞳は決して弱々しいものではなかった。
アリシアはまだ自尊心を捨ててはいない。
それがわかったただけでも一安心だ。

しかしこれはかなり大胆な嫌がらせだ。
ここまでしたら犯人なんて容易にわかりそうなものである。
何故未だに問題が解決していないのか、私は不思議に思った。

「ミルキアさんに言った？」

「ええ……。でも、『そういうのは本人達の間で話し合うべき問題であつて、自分が関与することではない』って言われてしまったの」「へえ？」

ミルキアさんにしてはらしくない発言だと思った。

本人にも、また仕事にも実害が及んでいるのだ。合理的に考える彼女であれば、一刻も早く解決のために動きそうなものだが。

「あなたの恋人は知っているの？このこと」

アリシアは首を横に振った。

「少なくともわたくしは知らせてないわ。噂になつていないのもおかしいから、もしかしたら知っているかもしれないけれど。でも言うつもりはないの。彼、本当に忙しい生活を送ってるから、煩わせたくないのよ」

「好きな人のことだつたら、どんなに面倒なことだつたとしても守つてあげたいと思うんじゃないの？」

そもそも恋をするという行為自体面倒なことなのだから。

「いいの。わたくしは彼を支えてあげたいって思っているのよ。だから、自分のことくらい自分で何とかできるようにならなくちゃ。こんな嫌がらせしても何の意味もないってわかれば、彼女達も諦めと思うの。だから、わたくしはそれまで耐えるのみよ」

そう言った彼女の顔は決意に満ちていた。

彼女の意見に納得したわけではなかったけれど、私もそれ以上は何も言わなかった。

結局のところアリシアが決めるべきことなのだから、それはそれでいいとして。さて私はどうしようということになってくる。

物事が解決しない以上、アリシアと一緒にいても良いことはない。事実、現在私にとっての友達もアリシア一人になってしまったのだから。そして過去起きたことを考えれば当然、虐めの手はいずれ私にも伸びてくるであろう。

しかし美味しい食事と平安な良心のため、アリシアから離れるという選択肢は選べない。

まあ今のところ私自身に実害があるわけではないから、このまま様子を見るしかないか。

考えても仕方のないことはこれ以上考えるべきではない。どんどん深みにはまってしまふ。

代わりに楽しいことを考えよう。

私は、今朝アリシアに食事会のお礼としてもらった菓子の味を想像しつつ、本館の裏口を箒で掃いた。

すぐ傍に植えられた銀杏の葉は、段々明るい色へと変わり始めている。

外は虫の音、中は箒が擦れる乾いた音がそれぞれの静寂を埋めて

いた。

いやもうひとつ。足音が近付いて来た。

振り返ると、回廊をミルキアさんがこちらに向かって歩いてくる。

「オルカ。シゼル様から伝言なのですけれど」

「は？」

ここ最近すっかり忘れていた名前が拳がったので、一瞬シゼルとやらが誰なのかがわからなかった。

「シゼル様から伝言です。『は』とは何ですか、『は』とは」

「あ、いや、申し訳ございません。この頃普段の日常が続いていたもので、ちよつと誰のことだか思い出せませんでした」

ミルキアさんが呆れたように瞼を下げた。

「あなたって結構薄情ですよね」

「ええまあそれは自覚してます」

「……それで伝言なのですが。『十七時頃北東庭園に来い』とのこととです」

何だか推理小説で取引現場に誘うときのような台詞だ。

「北東庭園っていうと、あの立ち入り禁止区域内の、ですか」

「そうです」

「一体何の用なのでしょう」

「それは聞いておりません。兎に角伝言は伝えましたからね」

「行ってよろしいのですか？『立ち入り禁止』なのでしょう？」

ミルキアさんは溜め息を吐いた。

「あなたは立派な関係者になってしまいましたから。わたくしももう面倒見きれませんわ」

どうやら私はついにミルキアさんにも見放されてしまったらしい。その意味はわからないが、不思議と心細い。

「かしこまりました」と言って再び掃除を再開したが、ミルキアさんはその場を去ろうとしなかった。

「……どうかなさいました？」

「いえ。浮かない顔をしていると思って。道理で今日は失敗がなかったわけですね」

おかしいだろ、そのバロメーター。と、突っ込むのは心の中だけにしておく。

しかし折角ミルキアさんがこうして気を遣ってくれたわけだし、私は心に引っかかっていたものを聞いてみることにした。

「ミルキアさんはどうして、アリシアを助けてあげないのですか？」

そんな話が出ることを予想していなかったのか、ミルキアさんの表情が固まった。これは驚いているときの彼女の反応である。

「あなたも他人のことを心配したりするのですね」

「……私、多分ミルキアさんが思ってる程考えなしではありませんよ」

「それは意外な発見でした」

ミルキアさんはそう言っただけの少し肩を竦めた。

「アリシアのことでしたね。わたくしは、ああいった虐め関連のことについては、本人達より前に部外者が手を出すべきではないと考えております」

「まあそれも正論といえば正論ですけど。でも、あの様子だと彼女、意地でも自分から動く気なさそうですね」

「それは彼女が選んだことです。彼女が責任を取るべきことです」

私はんー、と天井からぶら下がる灯りを見つめつつ、どう言ったものか考えた。

「あの、失礼を承知で申し上げますけれども。その態度で上司としてどうなのでしょう。現にこの嫌がらせはアリシアだけでなく彼女の仕事にも実害を与えております。このままいくと、ミルキアさんも侍女長として、監督不行き届きの責任を取られるのではないのでしょうか」

するとミルキアさんは一瞬閉口した。

そうして目を伏せるものだから、私が逆にたじろいでしまう。

「……それがわかっているのなら、もうわたくしからは何も言う言葉がありません」

私はすぐさま饒舌な反論が返ってくることを予測していたので、大層驚いてしまった。

こんなことを言ったのも、ミルキアさんを責めるためではなく、彼女の真意が知りたかっただけなのに。それが理解できたのなら、

これからの私の対応の仕方のヒントになるかと思っていたのだ。

「わたくし多分あなたが思っている程で来た人間ではありませんの。女の確執は醜いものですわ。関わりたくない、というのが本音です」

そのときのミルクアさんの目を見つめて、私は初めて、ああこの人も女性だったんだな、と思った。

にも関わらず、私は次のミルクアさんの話に度肝を抜かれた。

「わたくしも昔同じような経験をしたことがありますの」

「同じような経験？」

「ある異性、まあ今の夫ですけど、彼との関係を妬まれて嫌がらせを受けたことがあるのですわ」

え？

「え？」

頭の中で浮かんだ疑問符が、意識せずとも口からそのまま出ていた。

「ミルクアさん、結婚してたのですか？」

「あらオルカ。わたくしが既婚者だというのがそんなに妙ですか？」

「い、いえ、別に妙というわけではないのですが」

「いえいえ、妙だったんでしょうね。あらあらまあそんなに馬鹿みたいに呆けた顔をしていらして」

「いえいえいえ！」

私は関節が軋む程に首を激しく横に振った。

しかし確かに、ミルキアさんは西館に自室を持っていないのだから、家庭を持っていたという事実はそれ程おかしいことではない。一体どんな男と結婚したのか、ひっじょおに気になるが、今はそういう話の流れではないので自粛しておく。

「そ、それで、ミルキアさんもアリシアと同じような経験をしたとの話でしたか？」

「ええ、そうです。まあわたくしの夫はアリシアの恋人みたいなモテ男ではありませんでしたから、私に嫉妬してきた相手もたったの一人でしたけれどもね。だから規模は狭かったけれど、執念が凄まじいものでしたよ。五階から水をかけられたり四階から卵を落とされたり三階からバナナを投げつけられたり」

何階から何が落ちてきたのか正確に記憶しているあたり、ミルキアさんの執念も相当のものだと思う。

「誰がやったかなんてすぐに見当がつかしました。それでわたくしは当時の上司に相談したのです。侍女長は事態を正すためにすぐに動いてくれましたわ。彼女を注意し矯正するために。でも、一見とても稚拙な嫌がらせだけれども、その実証拠を残さないことに関しては、彼女は本当に徹底的だったのです。どんなに結果が正しかったとしても、証拠がなければわたくしの主張なんて机上の空論です」

「それで、どうしたのですか？」

「彼に訴えて話し合ってもらいました。結局何故わたくしが憎まれるのかと言いますと、彼女はわたくしが彼を奪ったと思っているからなのです。であれば、わたくしが彼を奪ったのではなく、彼がわたくしを選んだのであると相手に納得させれば良いわけです。そうすれば諦めがつくと思ったわけですわ。そのためには、彼女自身が当たって碎ける必要あります。それで、彼女から想いを告白させるためのシチュエーション作り、相手を必要以上に傷つけず尚且つ

わたくし自身の株を上げるような断り方を含む、黒幕の存在を微塵も感じさせない徹底的なシナリオを彼の頭に叩き込み、実行させました」

私は呆氣に取られて何も言えなかった。

ミルキアさん……何て恐ろしい人。

そしてミルキアさんの旦那さん……頑張ったな。

「計画は上手くいきましたわ。あとあと考えてみれば彼女がそんな展開で、わたくしと彼との間柄を認められるまともな人間だという保証はどこにもなかったわけですが、幸いにも彼女はまずまずまともな人間だったということです」

「成る程」

「別にアリシアにわたくしの方法を押し付けたいわけではありませんがね。一番良いのは相手の憎しみを根本からなくすことだと思いますの。そうなることやはり、部外者は口を慎むべきだと思いますのね。勿論これはわたくしの主観ですけども」

私は素直に感心した。

「やっぱりミルキアさんって合理的ですね」

「いえ、そんなことはありませんわ。色々と言いつつがましく喋りましたけれども、わたくしが口を挟まない一番の理由は、やっぱり女の確執が怖いからですもの」

しかしそうになると、結局今の私ができる最善策は黙って事態の成り行きを見ることのようなようだ。

あのアリシアの決意では、彼に打ち明けることを説得するのは無理そうだし。

ふいに、回廊の奥からミルキアさんの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「行きますわね。十七時に北東庭園。くれぐれもお忘れにならないよう」

私の返事を待って、ミルキアさんは身を翻した。

19・被害者

十七時十五分前、私はミルキアさんの了承のもと仕事を抜け、北東庭園に向かった。

立ち入り禁止区域を守る騎士は、今日はあのだるそうな男ではなかった。しかし私のことを聞いているのか、侵入を咎められるようなこともなかった。

二番目の門を通過すると、色とりどりの秋桜の向こうにシゼル様が見えた。

彼のほうは既に私に気付いているらしく、顔をこちらに向けて佇んでいる。

私はそちらに向かいながら声をかけた。

「オルカ・ユーデイスです。参上いたしました」
「ああ」

シゼル様は小さく頷いた。

しばらくして私は彼の隣に立ったが、彼はそれ以上何も言おうとしない。

ただ、息を潜めるようにして私に注意を集中しているようだった。

「どのようなご用件ですか？」

沈黙に耐えきれず、私から先に切り出すこととなった。

この雰囲気は、じいっと見つめられるのと同じくらい何だか照れ臭いものがある。

「浮かない声をしている」

その言葉を聞いて、やはりこの人、化け物じみたところがあるな
あと思った。

「まあ、ちょっと浮かない出来事が私の周りで起きているのは事実
ですね」

「どういったことだ？」

「呼び出しておいて世間話ですか」

「ああ」

その話題を回避するために言った言葉だったが、あっさり肯定さ
れてしまった。

「……暇人ですね、シゼル様」

「ああ」

「でなくて、本当に何の御用だったのですか？」

「翻訳を頼もうと思つてな。だが愉快そうな話を持ってきたのであ
ればそちらに興味がある」

この男、私の落ち込んだ出来事を『愉快』と片付けやがった。

「全然愉快的話じゃないので」

「そうか？あなたが隠そうとする辺り、聞くだけの価値がありそう
に思える」

「悪趣味です」

「それで？どんな話だ？」

どうにもこうにも逃がしてくれる気はないらしい。

私は仕方なく話し始めた。

「アリシア・ベアティードってご存知でしょう？」
「いや」

「ご存知のほずです。恐らく先月の王家との食事会で給仕をしていたほずですから」

「ああ」と言つてシゼル様は僅かに目を細めた。

「貴族の娘だとかいう」

「そうです。彼女には実は恋人がいます」

「それなら知つている。イヴァンだろう？」

「え？……あ、すみません、名前までは知りませんでした。シゼル様はその方とお知り合いなのですか？」

「ああ。仕事上連絡はよく取つている」

その言葉に、私は少なからず驚いた。

「シゼル様、真面目に仕事してらしたのですね」

「していないと思つたか」

「真面目に仕事をしている人は、この時間悠々とほつつき歩いたりほしないと思つていたので」

「まあ、あなたの認識は間違つてはほない」

彼は自嘲気味に笑つた。

そういえばこの人危ない研究者な可能性があるんだつて。そうは言つても、一度解いてしまつた警戒心をもう一度立て直すというのは、なかなか難しいものがある。

「その恋人がとんでもないモテ男なのだそうですよ」

「ふうん」

「あれ、知り合ってるんじゃないかなかったですか？」

もしかしてさっきの発言妄想ですか。

「連絡を取っている、というのは書類でのことだ。実物を見たことはない」

「成る程」と私は納得した。

「それで、そのモテ男がアリシアとくつついてしまったわけなので、嫉妬に狂った女達がアリシアを虐め出したわけなのですね。ハブにしたり、自分達の仕事を押し付けたり、部屋を荒らしたり」

「ふむ」と言っ、シゼル様は手近なところにあつた秋桜の群生に手を伸ばす。それを手探りで一本選び取り、手折った。

「昔のミルキアのような話だ」

私は目を見張った。

「知っているのですか」

「ああ。随分と痛快な話だったからよく覚えている。五階から水、四階から卵、三階からバナナ、二階から下着、だったか」

「下着！？何それ、初めて聞きましたよ」

ミルキアさんめ、そこだけわざと伏せやがったな。

「ねえねえ、それ誰の下着ですか？ミルキアさんの？落とした本人

の？」

「知らん。阿保か」

心底軽蔑した顔をされた。

こっというシゼル様の顔は結構怖い。

「それで？あなたはその友人を想って沈んでいるのか」

「あーいや、私そこまで善人でもないの。ただ、ハブられてる彼女を放置して食べるご飯は不味いので、ここ最近よく一緒にいたんですね。そしたら見事私もハブられてしまいました」

自分で言っていてちよつと悲しくなってしまった。

人が苦手だろうと、どんなに強がりと言おうと、こっというのって普通に寂しくなる。

「ほお。愉快ではないが、興味深い話はあるな」

「……どちらにせよ面白がってることに変わりはありませんよね」

「まあそうとも言う。私が興味深いと思ったのは、あなたが人並みの感情を持っていることがわかったからだ」

「はあ？」

「あなたが沈んだ声を出す理由が、そんなありふれた原因だった。これはとても興味深い」

「それってつまり、私人間と思われていなかったってことですか」

「そこまでは言わないが、異常性は高いと踏んでいる」

「果てしなくこっこの台詞なんですけど！」

皆まで言ってしまったから、はっと口を噤んだ。

しまった、勢いに任せてついぶっちゃけてしまった。

恐る恐るシゼル様を窺い見ると、彼ははっきりそれとわかる程に、清々しい笑みを湛えていた。

そうして手に持った真白い秋桜の茎を撫でる。

「私は異常だと思うか？」

「あ、いや、えっと……。すみません、大変失礼なことを申し上げました」

「別に謝る必要も取り繕う必要もない。私は異常だと思うか？」

「えー、まあ、はい。異常だと思います」

「私もそう思う。……」

彼の口の動きを見る限り、その後も何か言おうとしたらしいのだが、最終的にはそれで終わってしまった。

一先ずこの話題が終了したようなので、私はひっじょおに気になっていたことを聞いてみることにした。

ミルキアさんの虐め歴を知っているということは、シゼル様とミルキアさんの間に交流がある可能性が高い。であればこの情報も聞き出すことができるかもしれない。

「シゼル様、ミルキアさんの旦那さん知ってます？」

「ああ」

「どんな人ですか？」

「どんな？」

「ミルキアさんってどんな人選んだのかなって思っで。彼女が既婚者だっでこと、ついさっき知ったのですよ。イケメンですか？」

「イケメン……」

シゼル様は難しそうな顔をした。

「あ、ごめんなさい。外見だとわからないですよ、じゃあ性格で」「いや。見たことはある。随分昔の記憶ではあるが、器量はそこそこ良いのではなからうか」

「性格のほうは？」

「悪くはないが良くもない」

何だか微妙だな、それ。

「気になるなら紹介して差し上げよう」

「え？もしかして城勤めですか？」

「そうだ。左遷に左遷を重ねて随分奥まったところにいるがな。だが今日はもう遅いので帰れ」

「わかりました。約束ですよ」

シゼル様は鷹揚に頷いた。

私は「では失礼します」と告げて、歩き出す。

門のところでもう一度振り返ると、彼の透明な視線が私のそれと
かち合った気がした。

「絶対絶対約束ですからねー」

帰路につく私の足取りは、行きるときよりほんの少しだけ弾んでいた。

やられた。

扉に鍵を差し込んで回したとき、私はそう確信した。

夕食をとった後だったのだ、一先ず自室で少し休んでからシャワーに行こう。

そう思って部屋に戻って来た。

しかし鍵を開けたと思ったのに、ドアが開かなかったのだ。つまり、当初鍵はかかっていなかったということである。

私はすぐさまアリシア虐め隊の犯行を予想した。

アリシアのときと同じく、西館ハウスキーパーの協力の元私の部屋を荒らし、鍵をかけ忘れて帰ったのではないかと。

再び鍵を回し、今度こそ扉をそろそろと開ける。

頼む、勘弁してくれ、と念じつつ。

その願いが通じたのか、ざっと見たかんじ私の部屋に異常はなかった。

しかし安堵したのも束の間。

私の視界の中に、とても不吉なものを捉えた気がする。

恐る恐る照準をベッド脇の小さな丸机に合わせる。その上にあるのは、今朝アリシアからお礼としていただいたズイーガル亭の菓子折りである。

それはいいとして、ねえ、開いてない？あの箱開いてない？嘘でしょ？私一個も食べてないんですけど。

半ば体を引きずるようにして机に近付き、そつと箱の中身を確認してみる。

空でした。

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

その夜西館303号室から上がった断末魔の如き叫びは、ツェー
ヴラーグ城全体を震撼させた。

私の叫びを聞きつけて数人が部屋を窺いに來たが、叫びの主が私であることを確認すると、すぐに引ッ込んだようである。

背後では「くすくす」と嗤う声が遠ざかつていったりしたので、彼等の中に犯人と思しき人物がいたものと思われる。

今すぐにも襟元を掴み上げて問い詰めたい欲求を何とか押し込め、私は開け放したままの部屋にへたり込んでいた。

人の一番大切にしているものを的確に狙い、相手の感情を打ちのめす。何て悪質。酷い。鬼。悪魔。

しかしここで怒りを爆発させても無駄であろうし、私にかかる不利益のほうが圧倒的に多いだろうことは想像がつく。ミルキアさんのときと同じく敵は用意周到な可能性がある。仮に向こうに犯行を認めさせることができたとしても、そこで嫌がらせが止まる保証はどこにもない。

何より決着がどちらにつくかに関わらず、ここで不用意に動けばユーデイス家の名にさらに泥を塗りたくる結果になりかねない。

落ち着け私。落ち着くのだ。深く息を吸ってー。はい吐いてー。吸ってー。吐いてー。

何とか気を沈めた私は、どうすべきかを考えた。

アリシアに問題解決のために動く意思はない。私はアリシアを放棄する気はない。部外者は首を突ッ込むべきではない。実害がなかったので静観することにした。

というのが今までの考えである。

しかし早速私にも実害が出てきた。つまり、私は部外者ではなく、被害者に昇格したのである。もしくは降格であるならば、多少なりとも首を突っ込む余地はある。

私はむんと天井を睨んで立ち上がると、自室を後にした。

油断すれば易々と浮き出る憤りの感情を何度も何度も押し込めつつ、私は立ち入り禁止区域に向かう。

門が見える位置まで来ると、丁度ミルキアさんがハイネの畑から出てくるところであった。

そういえば、最初私を探しに来たときも彼女は堂々と侵入していたが、ミルキアさんは立派な関係者なのであるうか。シゼル様とも交流があるようだし。

彼女曰く『手遅れ』な私であるので、特に拳動不審になる必要もないだろうと思い、私も堂々と歩を進めた。

ミルキアさんは門を出たところで私に気付き、「あ」と言って小走りで寄って来た。

「丁度あなたのところに行こうと思っていたのです」
「私に？」

こんな時間に何の用だろう。
そもそもミルキアさんがまだ自宅に帰っていないというのも不思議

議である。

「あなたの安否確認をしに」

「ええ？この通り元気ですけど、私」

「そのようですね。安心しましたわ。シゼル様があなたの悲鳴が聞こえただなんて言うものだから、心配になって」

「そ、そんなところまで響いてましたか、私の叫びは」

「わたくしや他の使用人達は誰も気付きませんでしたわ。シゼル様の聴覚がずば抜けて優れているのです。今日のアリシアの虐めに関する話も気になって、様子を見に行こうかと」

私はふつと自嘲の笑みを浮かべた。

「流石ミルクアさん。私が悲鳴を上げた原因は、まさしくあなたの仰る通りでしたよ」

ミルクアさんの顔が僅かに強張る。

「何をされたのですか」

私は遠くを見やって言った。

「ズイーガル亭のお菓子を全部食べられました」

「は？」

「ご存知ありませんか？ズイーガル亭。高級菓子折の殿堂ですよ、あそこは」

「いえ、それは存じておりますけれど」

「楽しみにしてたのに……。私の大好きな桜のマカロンも入ってたのに……。全部……。全部食いやがりましたよあの野郎……。！」

はっ、いかんいかんと私は深呼吸を何度か繰り返す。少し気を抜くとめらめらと怒りが湧き出てくるから、制御するのに大変だ。この感情をエネルギーに変換できたら、結構な有効利用ができそうなものである。

ふと気付くとミルクアさんの頬に汗が流れていた。暑いのだろうか。

彼女は場の空気を変えるようにこほん、と咳払いをひとつしてから言う。

「それ以外の被害は今のところ特にはないですね？」

「ないですけど、私にとってはこの被害で全て喪失したような気分ですよ。ああ……私のお菓子……。子を失った親の気持ちが手に取るようにわかります」

「ところであなたは何故こんなところに？」

人が我が子を失う気持ちを経験しているというのに、ミルクアさんは全スルーである。

冷たいものだ。

「シゼル様にお会いしに行こうと思ひまして。頼みたいことがあるのです」

「シゼル様に？」

「はい。駄目だったでしょうか」

今までは仕事だったり向こうに呼ばれたりとそれなりの理由があったが、今回彼に会いに行くのは完全に自主的で独断的な行動である。

阻まれることは一応想定していたが、そうならまた別の手を考えなくては。

しかしミルキアさんは首を横に振った。

「いいえ。そんなことはありません。あなたはもう立派に関係者ですから」

「ならば良かったです」

「つかぬことをお聞きしますが、何がどうなっていていつの間にそんなに仲良くなりましたの？」

「え。仲良くないですよ。まだ数えるくらいしか会ったことないですし」

「でも、シゼル様があなたを呼んだり、あなたがシゼル様に会いに行こうとしたりされているわけでしょう」

「シゼル様が私を呼んだのは暇潰しです、私が会いに行くのもそれなりの用があつてのことですから」

「シゼル様が暇潰しのために誰かをわざわざ呼び出したりすることなんて、私の知る限りありませんでしたわ。王家の方以外の城の間が、シゼル様に用があつて自主的に会いに行くことも」

ミルキアさんは平然とした顔でシゼル様寂しい人間説を唱えた。何て切ない。

「まあそれが事実ならば、私達はそれなりに親しい間柄なのかもしれませんね。でもあくまで比較的に、ですけど。特別なことなんて何もありませんでしたよ」

「そうですね。それならば、この話はあなたにしても無駄でしょうね」

何だか含みのある言い方だったが、ミルキアさんの嫌味やら皮肉やらは日常茶飯事である。いちいち気にしていても仕方がない。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。お気遣いありがとうございます」

話に一区切りついたので、私は頭を下げ、門をくぐった。

あまり遅くに押し掛けるのも迷惑だろうから、用事は早急に済ませねば。

月と星の明かりだけを頼りにハイネの畑を突き進んでいくと、後ろからもうひとつ足音が聞こえてきた。

私はぎよつとして振り返る。

二、三步離れた後ろにミルキアさんが付いて来ていた。

暗くてわかりづらいが、薄明かりに反射する金髪を見る限り間違いないだろう。

「ミルキアさん？まだ何か用ですか？」

私がそう言うと、彼女は少し憮然としたようだった。

「わたくしが先程どこから姿を現したかお覚えでないのですか？ただ北東の館に戻るだけです」

「まだ仕事があるのですか」

「いいえ。ありませんわ。住居が北東の館にあるだけです」

私は瞠目した。

そして同時に閃く。

「ミルキアさんの旦那さんで、もしかしてシゼル様ですか？」

「違います」

凄まじい速度で即答された。

違うのか。

肩透かしを食いながら、少しだけ安心している自分に気付いた。あれ、私ってそんなにシゼル様のこと気に入ってたんだ。

「違うのですか。まあ確かにシゼル様は性格良いか悪いかでいったら悪いですね」

「何の話ですか」

「今日シゼル様に、ミルキアさんの旦那さんがどんな人が聞いたのです。器量はそこそこで、性格は良くも悪くもないそうです」

「……まあその意見については反論しませんが、わたくしのいないところで何ていう会話をしているのです」

「気になったもので」

しかし北東の館に居があるというのは驚きだ。

日に日にミルキアさんの得体の知れなさも、パーセンテージを増していく。

ミルキアさんは溜め息をひとつ吐いて歩き出したので、私もそれに倣う。

晴れた夜空の下、彼女の声がぼつりと響いた。

「後で紹介しますわ」

「本当ですか？……あ。でも、やっぱりいいです」

「何故ですか？」

「シゼル様が今度紹介してくれるって仰ってましたので」

そう言つと、ミルキアさんは少し笑ったようだった。

「誰が紹介しようと私の夫に変更はありませんがね。精々期待しな

いじとです」

そう言ったミルキアさんの声音は、少し気恥ずかしそうだった。

21・怖がり

今夜北東の館の門には、あのだるそうな騎士が立っていた。
日によって配置が違うのかもしれない。

ミルキアさんが先頭に立ち、館の重厚な水色の扉を押す。

中は薄暗かった。大きなシャンデリアには火が灯っておらず、壁に取り付けられたいくつかの燭台がエントランスホールをぼんやり色づけている。

僅かな生活音が奥からひそやかに聞こえてくるだけで、誰の姿も見当たらなかった。

「シゼル様は二階の右側の廊下の、突き当たりの部屋です。それではわたくしはこれで」

そう言つて、一人私を置いてミルキアさんは左の廊下に消えようとする。

私は鳥肌を立てて彼女の制服を掴んだ。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待ってください！」

「何でしょうか」

ミルキアさんは無関心な目で私を見つめる。

「ひ、一人で行つてはまずいでしょ」

「そんなことはありませんよ？」

「こ、ここ、国家機密の研究施設なのでしょう？」

「あら。ご存知でしたの。まあここまできて知らないほうがおかしいでしょうけど。でもその点のご心配ありません。国家機密の研究

ですから、あなたなどに易々見つけれるところではやってませんわ」

「いえいえ、その、やっぱり念には念を入れて」

「随分国家想いですのね。それはよろしいことですが、わたくし明日も早いんですの。お休みなさい」

それだけ言い置き、ミルキアさんは今度こそ廊下に消えた。

奥でぱたん、と音がしたので、恐らく自室に帰ったのだろう。

私は改めて辺りを見回しす。

ただっ広く、薄暗く、静かな場所で独りぼっち。

……正直に、一人で館を歩くのが怖いって言えば良かった……。私はがつくりと頂垂れた。

「そんなに怖いのなら、私が案内して差し上げようか」

「ひいつ」

ふいに頭上から静かな低音が落ちてきて、私はすっかり悲鳴を漏らした。

全身の毛という毛が全て逆立ったような気がする。

自分が乙女チックなキャラではないことは私自身がよく理解しているが、この性質ばかりは仕方がない。

怖いものは怖いのである。

私は冷静に今の事態を分析することにした。

まずとても怖いシチュエーションである。そしてとても怖い何かがいるらしい。それは怖い。本当怖い。こうして怖い怖い連発するというのは、怖いという感情がどのようなものを忘れるための私が編み出した技術である。ほつら怖くなくなってきたぞ。さっきか

ら歯が噛み合わないのも気のせいだぞ。

「オルカ？」

あれは聞いてはいけない声である。そしてあの存在は見えてはいけないものである。耳を貸して見てしまったが最後、食べられてしまうに違いない。

私にできるのは、この館から早急に逃げ出すことだ。

私は声の主を見ないよう俯きつつ、じりじりと扉に向かって後退した。

「おい」

じりじり。

「何を逃げようとしている。音でわかるぞ」

じりじりじり。

「ニイ、捕獲しろ」

じりじりじりじ……ばふっ。

あと少しで扉に手が届く、というところで、後ろから何かに抱きつかれた。

「はいはい、落ち着きましょーうねー、オルカちゃん！ニイお姉ちゃん、ちゅー、怖くありません……」

「ぎあああああああああ……！！！！！！」

本日二度目となる、断末魔の叫びだった。

私が落ち着きを取り戻したのは、シゼル様の采配で誰かが巨大シヤンデリアに火を灯してくれてからだった。

このそこそこ広い天井にぶら下がる大きなシヤンデリアに灯りを点けるのは、非常に面倒なことである。

まずレバーを操作して本体を手の届くところまで下ろし、幾十もの蠟燭を一本一本セットし、その蠟燭に火を灯し、再び本体を上上げる。

そこまでの動作を全て見届けて、私はようやく自分の状態を確認する余裕を持てた。

現在私はエントランスホールの真ん中にへたり込んでいる。

傍らにはニイがいて、二階の手摺で頼杖をついているのはシゼル様である。

そして、数人の男女が騒ぎを聞きつけて集まって来ており、皆が皆私を観察している。恐らく自室で休んでいたのだろっ、随分ラフな格好をしている人や、寝間着姿の人もある。その中には呆れ顔のミルキアさんの顔もあった。

私は自分のしでかした失態を思い出し、全身の血を沸騰させた。

「えー。その。……お騒がせして申し訳ありません……」

私の言葉が頼りなさにホールにこだまする。
しかしそれについては誰も何も言わなかった。ただただ物珍しそうな視線で、私とシゼル様をしきりに見比べている。
あの喧しいニイさえも、笑みを浮かべつつ事態を静観していた。
こういつときは普通、ざわめきが生じるものである。誰も何も言わないというのは非常に気まずく、そして奇妙であった。

やがてシゼル様が、

「全員部屋にもどれ。ニイは応接間に茶を用意しろ」
というと、それぞれ私を気にしつつ、無言で去って行った。
私は心の中で彼等に再度謝罪する。

ホールには私とシゼル様の二人きりになった。
シャンデリアの蝋燭は白い光の出るワーディロッド産のものを使用しているらしく、廊下の先までかなり見渡せるくらいに明るい。

「何故逃げようとした？私に用があつたのだろう？」

シゼル様が頭上から問いかけてくる。

「いえ……シゼル様だと気付いていなくて……。見たら食べられる
と思い込んでいました……」

「あなたは言動に反して随分と臆病だな。阿保なのは言動通りだが」
「うう。すみません……」

全くその通りなので、私は顔を赤くして謝るしかない。
シゼル様の表情は遠目に見ても愉快そうであった。怒っていない
だけましではある。

「来い。応接間に案内する」

「はい……すみません……」

私は力なく階段を上り始めた。

こんな醜態を複数の人間に晒してしまったというダメージは大きい。

少なくともミルキアさんとシゼル様には益々逆らえなくなりそう
だ。

22・透明人間

ニイが用意しておいてくれたのだろう、応接間の小さなシャンデリアには既に白い灯りが点いていた。

勧められるままに私は二人がけのソファに腰掛け、シゼル様は机を挟んだ向かいに腰を下ろす。

薄紅と白の縦縞模様の壁紙には、王家の紋章がうつすらと刻印されている。広さも含めて、何だか可愛らしい部屋だな、と私は思った。

「ここに来る前にも、一度雄叫びを上げていたろう」

優雅に足を組んで座るシゼル様は、私のことを珍獣として楽しんでいるようである。

「雄叫びって……。まあ、今日はそのことでお邪魔したのですが」

私がそう切り出すと、シゼル様の顔つきが複雑なものに変わった。驚きと苛立ちを足して二で割ったような表情だ。

「何かされたか。ミルキアも、虐めの件であなたを心配していたが」
「ああ、はい。ミルキアさんには大層お氣遣いいただいて、私のところまでわざわざ見に来ようとしてくれました。途中でばったり会ったのでその必要もなくなりましたが」
「そうか。それで……」

シゼル様が言いかけたところで、応接間の黒檀の扉からノックの音と、続けて場違いに浮かれた女声が響く。

「みんなのアイドル・ニイですよー。お茶をお持ちしましたーっ」
「入れ」

シゼル様は諦めているのか気にしないのか、彼女の妙な口ぶりは全て無視である。

ニイは魔法瓶とカップとソーサーの載った盆を持って入ってきた。相変わらず制服に派手なオプションを追加した格好で、今日は黄色と黒のボーダータイツを着用している。もしかして館の主人が気付けないからって好き勝手してるんじゃないかと私は訝しんだ。

彼女は手際良く紅茶を注ぎ、ひとつのカップを私の前に置き、もうひとつのカップはシゼル様に直接渡す。

「ありがとうございます。あの、先程はすみませんでした」

私は去ろうとしたニイに頭を下げた。

抱きつかれたとき、あまりの恐怖に暴れまくり、勢いで彼女に暴行を加えてしまったのだ。そのせいでニイのお団子の髪型も、現在少し乱れている。

ニイはにっこり笑った。

「気にしないでいいよ。面白いものが見れたから」

そう言い残して出て行く彼女の背中を見送り、私は肩を落とす。珍獣にまで珍獣扱いされた……。

「それで、何かされたのか」

シゼル様の静かな声で現実に取り戻される。
私は勢い込んで話し始めた。

「はい！聞いてください、酷いんですよ。私の部屋に大事に取っておいたズイーガル亭のお菓子が消えたのです！」
「ほお」

シゼル様は呟いたきり、沈黙してしまった。
やがて驚いたように口を開く。

「何だ？それだけか？」

どうやら続く言葉を待っていたらしい。
私は憤慨した。

「それだけってことはないでしょう！あの菓子折りには大好きな桜のマカロンも入っていたのですよ！私はこの経験を通して我が子を失う母の気持ちがありました！！」

「菓子と子はあなたにとって同意義なのだな。将来あなたの子になる人間が可哀そうなものだ」

そこまで言っただけで、シゼル様は何やら変な顔をした。非常に曖昧な説明であるが、私はこの表情を『変』と表現する以外の術を持たない。

何にせよミルキアさんというシゼル様といい、私の悲痛な気持ちに同情してくれる気はさらさらないらしい。

まあシゼル様は、アリシアとミルキアさんの虐めに関しても「痛快」とか「興味深い」とか言っていたから、期待はしていなかったが。

「それを報告するために来たのか」

「いやいや、違いますよ。ちょっとシゼル様をお願いしたいことがあります」

「お願い？」

シゼル様はふいを突かれたように小さく口を開けた。

「はい。あのですね、今まではアリシアの虐めも、私には実害がなかったので放っておいたのですね。でも今回我が子を失うということんでもない実害が生じました。よって、行動を起こそうと思うのです」

「ふむ。復讐か？」

「そうしたいのはやまやまですが、リスクを考えますとどうしても平和的な解決が望ましいですね。それで、今まで当事者でありながら部外者面してきた人間に動いていただきたいと思っています」

「イヴァンか」

「流石シゼル様。頭の回転が速いですね」

イヴァンとはアリシアの恋人の名前だそうだ。

「それで、彼のお知り合いであるあなたの力をお借りしたいのです」

「具体的に言っと？」

「それとなくちくつてやってください」

シゼル様は紅茶を飲み干し、机に茶器を置いた。

そして腕を組んで考えるように瞼を伏せる。

しばらく経ってから、彼は虚ろな目を私のいる方向に向けた。

「私に頼み事をしてくる人間はそういない」

「奇遇ですね。私も頼み事できる人間そついなですよ」

「寂しい奴だな」

「いえいえ。お互い様ですから」

私は真顔で言ったのだが、シゼル様は鼻で笑ったようだった。

「まあ、だからこそ聞いてやろうとは思う。聞いてやろうとは思うが、私はこの方法はあまり頭の良いものとは思えない」

「それについては賛同します。でも私、部外者から被害者に昇格したはいいのですが、それでも当事者ではないわけで。こういう迂遠な方法以上にできることがないのですよ」

可能ならばミルキアさんのように徹底的なシナリオを作ってやりたい。そのほうが面白そうだし。しかし被害者Aである私には、そんなおこがましい行動はできっこないのである。

「あなたがそう言うのならば、協力はしてやろう」

「わーい、ありがとうございます。シゼル様優しいですねー」

私が素直に喜ぶと、シゼル様は鮮やかに笑うのだった。

「世辞だとしても否定しておこう。オルカ、それは誤解だ」

「紹介しよう。ミルキアの夫だ」

「どーもー」

そう言われたときの、舌を噛んで内臓の一部が鼻から飛び出てもおかしくないような私の驚きを想像していただきたい。

話も終わり、部屋まで戻る帰りの出来事である。

シゼル様の「途中まで送る」という言葉に遠慮なく甘え、私達は二人で館を出た。そしてすぐに、つまり館の門の前で上記のように言われたのである。

「ミルキアがいつもお世話してまーっす、夫のシュルツ・ミルドローズでーっす」

だるそうとウザいが混ざった口調というのは、聞いているものの神経を実に逆撫でするものだ。と、私はしみじみ思った。

「嘘です」

「何で嘘になるんだよ」

「ミルキアさんの旦那さんがこんなだるそうで眠そうで猫背な騎士なわけがありません」

「じゃあどんな奴なら納得できるんだ」

「だるそうでも眠そうでも猫背でもない人間だったら納得して差し上げます」

「おまえは俺に人格と姿勢を矯正しろと言っのか……」

「っていうか『ミルドローズ』っていう家名、果てしなくあなたに似合わないですね、くすっ」

自称ミルキアさんの夫兼だるそうな騎士兼門番ことシュルツさんは、溜め息を吐いてシゼル様を見やった。

「……旦那、このチビすげーむかつくんすけど」

シゼル様は感心したように頷く。

「息苦しそうにしているのはわかっていたが、出そうと思えばどこまでも本性が出てきそうだな。シュルツ、おまえなかなか見所があるぞ」

「え。それってこのチビの性格を引き出すのに長けてるってことっすか」

「むう。私はこんな猫背男に負けませんよ」

「あのさー、うちそういう厄介系女子間に合ってるから。まじで」

「シゼル様、ミルキアさんの旦那さんってほんとにこの人で合ってますか？」

「聞けよ」

シゼル様は真面目な顔で頷いた。

「嘘だと思っなら今度ミルキア本人に確認を取るがいい」

「うーん。そうします」

私は仕方なくこの件を保留することにする。

「おまえどうしても信じたくないのな……」

シュルツさんが呆れた声で言ってきたが、無視した。

そりゃあ信じたくないに決まってるわ、と心の中だけで突っ込んでおく。

「さあさあシゼル様行きましょう。私明日も寝坊しちゃったらミルキアさんに殺されます」

「ああ」

「いい加減殺されればいいと思っぜ」

お疲れ気味の騎士を置いて、私達は石階段を降り出した。

階段となるとシゼル様の歩みも健常者並とまではいなくなるので、私は後ろをのんびり付いて行くことにする。

時々脇に咲いている竜胆りんどうはすっかり闇と同化して、その形だけを静かに浮き上がらせていた。

「ちょっと残念でした」

ふと思いついた私は、ひんやりした大気に自分の声を放った。

「何がだ」

シゼル様が問い返す。

当たり前前の反応が、この人だと何故だか嬉しい。

「ミルキアさんの旦那さんイベントです」

「何だ。結局疑っているわけではないのか」

「シゼル様は嘘を吐かなそうです。本当のことを隠すのが上手だから、嘘を吐く必要がないのでしょね」

シゼル様は肯定も否定もせず、ただ吐息を漏らすように小さく笑った。

「それはそうと、私が残念がっているのは、別にミルキアさんの旦那

那さんがあれだったからじゃないのですよ」

「そうか。では何故だ？」

「イベントの無駄遣いをしてしまいました。次は、ミルキアさんの旦那さんを紹介してもらうっていう名目で、来ようと思ってたのに」

そう言って私は、シゼル様の背中を見つめながら耳を澄ます。

すると彼は立ち止まってこちらを振り返った。

彼の表情はただただ透明で、澄んだ無機質だった。

「いずれあなたは今の言葉を悔いることになるだろう」

そんな意味不明な言葉だけ置き去りにして、シゼル様は再び歩き始める。

私は少し残念に思った。

「いつでも来ていい」とか、「理由なんていらない」とか、そんな優しい言葉が返ってくればいいなあ、なんて、勝手なことを頭の隅で考えていたから。

でもすぐに、「それもまたよし」と思い直していた。

私はシゼル様のことが何となく好きであるが、それはシゼル様がどこまでもシゼル様だから好きなのわけである。

その考えに自分で非常に納得してしまって、気付けば自然と口に出ていた。

「それもまたよし」

ちらりと私を見やったシゼル様の顔は、何だか優しく、でも、それは私の勝手な解釈だったかもしれない。

23・双子

ツェーヴラーグの上流階級の家庭において、双子は不吉の象徴とされている。

一卵性であろうと二卵生であろうとそれは変わらない。

理由は大きく分けて二つ。

長子の権利についての争いが起きやすいこと。そして、「双子は能力を二つに分けて生まれてきた子どもであるため、未完成な形態である」、という昔からの言い伝えによる。

勿論後者の理由を本気にしている人間は、実際には多くないと思う。

しかし双子の人間は、何か劣っている点があったり失敗したりすると、「これだから双子は」とすぐ槍玉に上げられる人種であることは間違いなかった。

特に私の場合、妹のカノンのほうが全体的に要領が良く成績も上だったので、「オルカはカノンに良いところを全部吸い取られた」などと言われて育ってきた。

それで、母はよく私とカノンにこのようなことを言い聞かせた。

「いいですか。世の中には詮無い人が実に多いものです。こと上流階級の者には詮無い人種の比率が非常に高い。人間権力を持つとほとんど阿保になっていくものです。」

この点についてはあなた達のお父様もどうしようもない阿保ですが、お父様は質の良い阿保です。わたくしが今言おうとしているのは、質の悪い阿保についてですわ。

質の悪い阿保は、あなた達のことをきつと疎むでしょう。あなた達に欠点を見出す度に、或いは何か間違いを犯す度に、『これだから双子は』と蔑むことでしょう。逆に言うと、双子なのを理由にあなた達を蔑む輩は、質の悪い阿保です。

質の悪い阿保に会ったときは、良いですか。よく見るのですよ。

……この顔です。この目つきで相手を見なさい。難しいですか？もう一度やりますよ。……コツは『ああこの人は質の悪い阿保なんだな。気の毒だな』という思いやりを込めて相手を見つめることです。世の中で生き抜くには思いやりの心が非常に大事ですわ」

よって私とカノンは、質の悪い阿保に出会う度に、この方法を実地に試みた。

しかし不思議なもので、この方法、私がやるのとカノンがやるのでは、効果が全く違った。

カノンがこの表情をすると、質の悪い阿保はたちどころに眉尻を下げ、しきりに彼女に謝るのである。

これに勇気を得た私は、カノンに倣って思いやりの表情を試してみた。しかし私の場合、どんなに思いやりを込めたとしても、相手は何故か憤慨してしまうのである。

人間というのは理不尽なものだなあ、と感慨深く思ったものだ。

訓練の効果はともあれ、私が今までさして双子であるということに気にしないで生きて来れたのは、主に母の諭しのお陰である。

私がシゼル様をお願いをしてから三日目。

彼が頼み通りに動いてくれたからだとは私は踏んでいるのだが、あれ以来私への嫌がらせはない。

皆が私を避けるのは変わらないが、実害がないのであればもうそれで良いでしょう。

そもそもそんな些細なことで離れていく友達など友達ではないのである。

寂しくなんかないやい。ぐすん。

ひとつ気になることがあるとすれば、今日一日全くアリシアの姿を見ていないことが。

彼女も私と同じく本館配属であるから、一度も会わないなんてことは滅多にない。

加えてここ最近、早番、遅番のときをを除き、食事は一緒にとっていたのに、彼女はそこにも姿を見せない。いつもの窓際の席にいないし、一応探してみても見当たらなかった。一度ならまだしも、これが朝、昼、晩と三回続くと流石に心配になってくる。

私は夕食の後、アリシアの自室に赴いた。

しかしノックをしても返事はない。人の気配がなかったから、恐らく留守なのだろう。

諦めて自室に帰ることにした。

使用人の館は、真ん中の突き抜けた四角形をしている。

アリシアの部屋は同じ三階だが、私の部屋のある廊下から反対側の辺に位置する。

この時間帯はまだ全ての燭台に火が灯っているから明るい。ツェーヴラーク城は基本的に二十二時を過ぎると灯りが三つおきに減らされる。さらに二十四時を過ぎると全て消灯となるので、出歩く際

には角灯なり燭台なりを自身で持ち歩かねばならない。

食事会や三日前の夜の帰りなどは幸い二十四時前に戻れたので良かったが、それでも薄暗く静かな回廊を一人で歩くのは勘弁したいものである。

私は木の床をこつこつ踏み鳴らしながら、白いドアが整列する廊下を進んだ。

二番目の角を曲がったとき、私は足を止める。
さーっと血の気が退いていくのがわかった。

私の部屋のドアが、開け放たれている。

慌てて、しかし音を立てぬよう、小走りで自室に駆け寄った。

まさかまた嫌がらせだろうか。

今回は特に食べ物物を自室に置いておくことなどはしなかったが、もし嫌がらせを目的とした侵入ならばただで済むとは思えない。

開けっ放しということは、もしかして犯人がまだ中にいるのかも。

不安半分、現行犯として捕まえられるという期待半分で、私は自室を覗いた。

結果としては、不安はそれなりに的中し、期待は霧散し、プラスアルファで疑問がにきにより湧き出てきた。

私の部屋は大いに荒らされていた。

椅子は倒され、机の引き出しは全部逆さでモノが散乱、毛布とシートは床に広げられ足跡がつき、お気に入りのカップが割られている。

備品である鏡も割られていた。これってまさか私が弁償するの。

この状態だけを見たならば、私はひたすら怒りと悲しみに満たされただけであろう。

しかし幸か不幸か、それを許さぬ程の大きな疑問の原因が、シートと毛布のはぎ取られたベッドの上に存在していた。

それはこの部屋に全く似合わない悠々とした姿で寝転がり、数枚の紙を手に持ち、熱心に読みふけている。

「……ニイ？」

私とその疑問の原因の名を呼ぶと、灰色の三白眼がこちらを視界に捉えた。

「あ、オルカだ。やつほー」

言ってひらひらと片手を振る。

「やつほーじゃないわっ」

私は後ろ手にドアを閉めると肩を怒らせた。

するとニイはすぐさま振った片手に力を込め、同時に首も横にぶんぶん振る。

「あ、違う違う！これやったのあたしじゃないからっ！あたしがここに来たときには既にこうなってたからっ」

「はあ？何であなたがここに来るのよ。何の用よ」

ニイはにっこり笑うと、のんびりとベッドから起き上がった。

「シゼル様に言われて様子を見に来たんだあつ。聞いた？アリシアは昨日づけで退職したんだよん」

私は息を呑んだ。

「知らない。何それ」

「まあ手紙が来てることを見ると聞いてないと思ったけどねん。はいつ、アリシアからだよっ」

そう言つてニイは持っている紙束から一枚抜き取り、私に差し出してきた。

何でニイが勝手に読んでるんだ、と思いつつも受け取つて読んでみる。手紙は確かにアリシアからのもので、退職することと私へのお礼が綴られていた。そしてその理由がケツコンとなっていた。

けっこん？

結婚！

「えええ何でいきなり結婚になるわけ！？」

「きやははは！行動が大胆だよー、アリシアちゃん！あ、でも今回はアリシアちゃんだけの意思じゃないけどお」

「ニイは経緯^{いきわづ}について知ってるの？」

教えなさいよ、という威圧を込めて彼女を睨む。

「知ってるよん。シゼル様の命令で調べたからねっ」

シゼル様は随分と偉い人種のような。
侍女に命令して調べさせるとか何か怖いんだけど、気にしな

いことにしよう。

というか侍女は普通こんなプライベートなことを調べるために動いたり、門番をしたりはしない。

改めて思うが、ニイって一体何者。

「あんねー、イヴァン君はさあ、イケメンでめっちゃモテて超優しいんだけど、腰抜けなんだなーっ」

「へえ？」

私は転がっていた椅子を立て直して、ニイと向かい合うように座った。

「君がシゼル様経由で虐めのことイヴァン坊にちくったじゃん？」

「ええ」

「それって多分君的には、イヴァン坊に虐めしてる人達と話し合ってたはしかったって意図でしょ」

「そうよ」

「あのねー、イヴァン坊はそんなことできない子なんだよお。こう、はつきりすぱつと言えないってゆーか？」

成る程、それは腰抜けである。

「あ、でもイヴァン坊のこと怒っちゃ駄目だよーっ。あれでもアリシアちゃんのこととは本気で好きなんだからあ。そんでえ、波風立えずにアリシアちゃんを守る方法を考えた結果、手っ取り早くアリシアちゃんを退職させるってことになったんさ！ついでにプロポーズもしちゃえば、フォローもばっちり！みたいな？」

「な、何という強引な手段……」

しかしことアリシアに関して言えば隙のない手段でもある。

あくまで恋人を支えることを主張していたアリシアであるが、結婚を理由に退職ということであれば、十分己の目的を果たしていることになる。

イヴァンとやらも腰抜けの割に侮れない性格をしていそうだ。

まあ私の予想していた方向ではなかったものの、これにてアリシア虐め騒動は収集がつきそうなので良かった。
良かったのだが、煮え切らないことがある。

「……アリシアが辞めたってこと、嫌がらせしてきた人達は知っているのかしら」

「もちろん知ってるでしょ」

「じゃあ、何で私の部屋がこんな有り様なわけ？」

私は憤った。

元から嫌がらせを受ける謂れなんてなかったが、アリシアが消えた今、益々私が被害者になる理由がわからない。

「まあ虐めの理由なんて理由にもなんないものばっかだからねえっ」
「私何かしたかしら」

首を捻って考えるものの、特に思い浮かばない。

仕事上の失敗などはよくするが、家族以外の対人関係はかなり慎重に扱っているつもりである。私的には。

「いやいや、そうじゃなくてえ。アリシアちゃんが辞めたからこそ、彼女らの不満の捌け口がなくなっちゃったわけよ。アリシアちゃんには退職して虐めとも無縁、おまけに婚約しちゃって超幸せ、イヴァン君は自分から話し合ったり誰かを傷つけたりすることなく物事が丸く治まってめでたしめでたし。でもそれって結局、アリシアちゃ

んを虐めてた子にとってはなあんも面白くないわけですよん！」

「まあ……確かに……」

ニイがこんなまともな意見を吐いているのが何だか不思議である。

「その捌け口が私ってわけ？」

「そゆことだねーっ。新たなターゲット見つけんのもめんどいし、成り行きでもうオル力でいんじゃない？みたいなの？ってかんじだろうねーっ」

私はぐでん、と背もたれに寄りかかった。

口からは、はああと長い溜め息が漏れる。

「シゼル様、こうなることを予測していたのかしら」

「心配してあたしを寄越すってことは、そうなんだろうっねえ」

「……先に言え……」

ニイは場に反してあははっと明るく笑った。

「シゼル様優しくないから」

「ああ……そうだっけ……」

ちくしょーほんとに優しくないなーあのやるー、と私は心の中で悪態を吐いた。

「ところでさあ、そのアリシアからの手紙？開けたのはあたしじゃないんだあ」

「既に関いてたってわけ？」

「せいかーい。床に散乱してたのを私が掻き集めましたあ。多分ドアのポストもチェックしたんだねー、執着愛だねーっ」

「うつつ、愛が重い」

「でねでねっ」

そこまで言いかけて、ニイは急に立ち上がった。そうして椅子の背にもたれかかった私の顔を覗き込む。

「あたしがここに来たとき、散乱してた手紙はこれだけじゃあないんだよん」

言つて、持っていた残りの紙束をぺしっと私の額に載せた。

この女子学生みたいなノリは何だろう、と思いつながら、満更でもない私は大人しくそれを受け取る。

ニイは無邪気に微笑んだ。

「差出人、お父さん」

即座に背もたれから起き上がった。だつて嫌な予感しかない。

24・泣き虫

「親愛なる我が娘オルカ・ユーデイスへ

秋も深まる今日この頃、如何お過ごしでしょうか。オルカのことだから、可愛げのなさや有り余る阿保パワーを利用して侍女職に専念していることと思います。

私達夫婦は先日、我が息子クレスと我が娘カノン、そしてカノンの夫セラードと共に食事に行きました。オルカの好きなトナー・ジュ・ナイヤージュというレストランをちよっぴり貸し切っちゃいました。

アワビのソテーがとても美味しかったです。この手紙を読んでいるおまえの涎が目には浮かびます。

そこでの話題は勿論、愛する我が娘オルカの行く末についてです。妻のフリージスは元より、クレスやカノン、果てはセラードまでもがおまえの将来を心配していましたよ。「あいつぜってー婚活する気ないだろ」というようなことを、皆が皆口を揃えて言っていました。

父はおまえのようにみんなに愛される娘を持てたことが幸せだし、思いやり深い家族を持てて幸せです。そして私も勿論おまえのことを心配しています。いい加減婚活しろや。そろそろ本気で週一見合いさせるぞこら。

オルカのことを心配し過ぎて、少し筆が粗ぶってしまいました。ごめんね。

しかし私が何と言おうと、今のところはまだおまえの心に届くこ

とはなさそうですね。

でも父はそれも時間の問題だと思っています。

オルカは中途半端に周りに気を遣う子なので、その内追い詰められて自滅していく様は容易に想像できます。しかし父はそれではないと思っています。オルカは中途半端に奔放な子なので、追い詰められて結婚などというルートを辿るなら、これもまたいずれ自滅するでしょう。おまえが家出してムワ・ドナの遊牧民と共に旅をする姿は容易に想像できます。

それはそれで楽しそうなのですが、父は侯爵様であり、みんなの模範になるべき立場にいるので、こう言います。

オルカ、恋をしなさい。

しかしおまえは恋をしろと言われて恋をする人間ではありませんね。そもそも恋をしろと言われて恋をする人間は、恋をしているとは言えないと思います。

でも、父親として、娘を恋路に導くくらいはできるかなあと思いました。

そこで、父が独自の情報網を使って綿密に調べ上げた、オルカの恋人候補リスト（城勤め平民版）を同封しておきます。厳選に厳選を重ねた父自慢の調査結果です。役職や収入、年齢は勿論のこと、顔写真や性格やら評判やら、お得情報が盛り沢山です。

このリストに目を通す あら、この人何だか良さそうだわ 意識し出す 恋人同士に！という効果を期待しています。だから余すところなく目を通しやがれ。

これからの行儀見習いの期間、頑張つて恋人探しに専念してください。侍女の仕事とか、しなくてもいいから。父が許します。

それではお元気で。

父・レイルズより」

一枚目と二枚目を読み終えた私は、力の抜けた顔でニイのほうを振り返った。

「ニイ……この手紙……あなたが来たときには既に開いてたのよね」

震える手が紙束を破ってしまわぬよう制御しつつ、恐る恐る問う。

「開いてたよー。さっきも言ったけど、床にばらばらに散らばってたっ」

結局御せなくなった私の両手は、紙束を真つ二つに引き裂いた。

「今頃君の恋愛事情が連綿と語り継がれてるんだろうなあ」

その夜、私は絶望の意味を知るのだった。

翌日、お昼休みを終えてすぐの時間帯、私は本館と南館を繋ぐ渡り廊下を黙々とモップがけしていた。

朝起きてから現在までの時間は、私が置かれた状況を把握するには十分なものであった。

一人とすれ違えば好奇の視線を向けられる。二人とすれ違えばひ

そひそ話が交わされる。三人以上と出くわせばそれに笑いが加わる。そして食堂に赴けば嘲笑、挑発、侮蔑の嵐である。

「オルカちゃん、恋人探しは順調かい？」

と、名も知らぬ騎士が言う。

「そんなに困っているのなら、僕がイイ男紹介してあげようか？ はっ」

と、初対面の文官が言う。

「あなた何しにここに来てるの？ 貴族ってやっぱり皆そういうことしか頭にないの？」

と、少し前まで可愛がってくれていた先輩が言う。

一言で今の感情を的確に表すとしたら、うんざりだった。若しくは、疲れてしまった。

手につくものを片っ端から碎いてやりたい怒りがある。実家の自室に籠って泣き崩れたい悲しみと恥ずかしさがある。なりふり構わず己を傷つきたい情けなさがある。

そういった気持ちが入れ替わり立ち替わり、時には一斉に襲いかかってきて、それらに応戦する力はもう、残っていないかった。

よって、私は戦いを放棄した。

無心で体を動かし、床が磨かれていくことにだけ、注意を集中する。

しかしそれでも思考をどこまでも白くすることは私にはできなかった。できるだけ感情の混じらない事務的な態度で、これからどうすべきかを考えていた。

結論としては、行儀見習いを中退して実家に帰る、これしかなかった。

仕事を終えたらミルキアさんに頼んで辞表をもらい、明日提出し

よう。

繰り返し繰り返しその行動を脳に焼き付け、ごしゅごしゅと床を擦った。

時折、乾拭きからぶを交えつつ、半分程の位置に差し掛かったとき、甘い香りが漂ってきた。

すぐに察しがついて廊下の左右に広がる南庭園を探す。やがて、ああやっぱり、と腑に落ちた。

右側の庭園の端のほうに、ずんぐりとした深緑、その中に散る金粉のような小花。金木犀だ。

ふと気付けば、私は僅かに口角を上げていて、自分で吃驚した。人間って、こんなときにも笑えるんだなあ、と思った。

しかしまあ、考えてみれば私の追い詰められている理由も実に笑えるものだ。

父の阿保な手紙を虐めっ子に目撃されて、噂として広められる。だなんて、酷く幼稚な出来事である。

私らしいと言えば私らしい。

そう思っ、もっと笑ってやろうと思ったのだけれど、私という人間は天の邪鬼で、笑おうとすれば不覚にも涙がぼろりと転がるのであった。

数滴の透明で小さな玉は、モップを掴んだ私の手の上で弾け飛ぶそれを眺めていたら、力が抜けて、もう止められなかった。

ぼろぼろぼろ。

あんなに我慢していたのに、これで苦労も水の泡。あーあ。

無言で涙が止まるのを待っていると、後ろから私を呼ぶ声がした。

「オルカ」

生真面目な硬さを多分に含む明朗な女声。それが私の敵のものでないことはすぐにわかったので、私は無防備に振り返った。

「はい、ミルキアさん」

思っていたよりも、言葉ははつきりと紡がれた。相変わらず涙は零れ続けていたが。

それを見たミルキアさんは顔を強張らせた。

「大丈夫ですか」

私は笑う。

「大丈夫じゃないです。泣けてきました」

ミルキアさんは表情はそのまま、しばらく無言で突っ立っていた。

多分、彼女はどうすれば良いのかわからないのだと思う。しかし、ミルキアさんのそうして戸惑い固まっている姿は、私には十分慰めになった。だって、何だか可笑しいし可愛い。

私の笑いが自身に起因するのがわかったのか、ミルキアさんは少し身じろぎして、慚然とした。

「それで、何か御用ですか？」

「城中に広まった悪趣味な噂を聞いて。あなたはご存知ですか？」
「ご存知に決まっていますよ」

私はわざとおどけて肩を竦めてみせる。

涙も止まってきたので良かった。私は瞳に溜まった水滴を手で拭く。

「どこまで尾びれ背びれが付いているのかわからないですけど、残念ながらその噂、悪趣味な事実ですもの」

私がこう言ったとき、ミルキアさんは怒るかな、と思ったのだが、見たところ彼女の表情に変化はなかった。

普通に関心を示している、というような態度だ。

「では、あなたのお父上が恋人候補リストとやらを送り付けて来たのは本当ですか？」

「本当ですよ。私の父親、昔から結婚結婚と煩いのです」

「あなたが結婚相手を探しにこの城に来た、というのも本当なのですか？」

「んーと。正確には、それは違います。父にはそういう意図があった私を行儀見習いに出したわけですが、私にはてんでやる気がありませんでしたので」

すると何故かミルキアさんは、目に見えて落胆を露わにした。

私は今までの言動に彼女をがっかりさせる原因があったらうかと思いついてみたが、どうしてこのタイミングで落胆するのか、結局わからなかった。

「ああ、そうだ。ミルキアさん、後で辞表の用紙をいただきたいの

ですが」

ミルキアさんの動きがまたしても止まったので、私は驚いたのか
と思った。

「確か公務員が辞表を出すときには、専用の紙がありましたよね。
それとも、行儀見習いだと違うのでしょうか」

「いえ……。そうですね、専用の書類がありますわ」

ミルキアさんは固まったままで、口だけ小さく動かす。何だか彼
女らしくない。滑稽である。

「あなた、行儀見習いをやめるのですか？」

「それは、まあ。私、この状況で続けられる程、屈強な精神を持っ
ていけませんので」

彼女はその後もしばらく固まっていたようだが、やがて呪縛が解
けたかのように「わかりました」と言っと、悠々とその場を去って
行った。

その後ミルキアさんは私の前に姿を見せなかった。

私は明日辞表を提出し、明後日にはもう実家に帰るつもりでいたので、肩を落として自室に戻った。

あの最悪の食堂も、三回続くと流石に慣れてきた。そして皆もそれに気付いたのか、若しくは飽きてきたのか、心なしか夕食は比較的ちよっかいをかけられなかった気がする。飽くまで比較であるが。

しかし昨夜のことを考えると、部屋に帰ることすら気が重い。

二度あることは三度あるものだ。

本当の意味での貴重品などは持ち込んでいないし、財布だけは一応持ち歩いている。そうだとすると、これから荒らされた部屋を見るかもしれないというのは、疲れ切った私には重圧過ぎる。

どんより翳った気持ちで階段を上っていると、三階だと思われるが、何やら騒がしい会話が聞こえてきた。

その内のひとつは聞き覚えのある、明るくてきゃらきゃらした歌うような声。

ニイだ。

私は角からそつと奥の様子を窺った。

ニイと、二人の侍女、そして腰に鍵束を下げた、西館のハウスキーパーが私の部屋の前で揉めている。

ニイの手にはハウスキーパーの腕がしっかりと握られていた。

「離しなさいよ、気持ち悪い！私を誰だと思っているの！」

「ねえ、その台詞何回目？あたしだって何回も言っただでしょ？君が誰かなんてあたしには何にも関係ないって」

「何様よ！何そのおかしな格好！あんたどこの配属！？」

「ひ・み・つ。君達に知る権利はないものっ」

「私達が何をしようと勝手にしようっ」

「ああ、うん、確かにそだねーっ。別にあたしの知らないところで君達が何しようがどうでもいいけどさ、偶然見ちゃったし？それが偶然お友達に関わることだったし？」

そんな問答を延々と続けている。

ハウスキーパーは何とかニイから逃げ出そうと試みているのだが、ニイは結構力が強いらしく、ずっと腕を握り締めたままである。

他の侍女二人は時折口を挟むものの、少し怖気づいているようだ。やや距離を取って立っていた。

ついにはハウスキーパーは殴ろうとしたり蹴ろうとしたり、色々と暴挙に出るが、その全てをニイはひらひらとかわす。その間も片手は絶対に離さない。

暫く観察していた私だったが、自室があそこにある以上放っておくこともできないので、姿を現すことにした。

どう対処したものか、と考えながら。

いち早くそれを察知したのは二人の侍女であった。

彼女らは私を見ると顔を青ざめさせ、素晴らしい身のこなしで廊下の奥に駆けて行く。

「ちょっと！あんた達！」

侍女達と違い動きたくても動けないハウスキーパーは抗議の声を

上げるが、そんなものもおかまいなしに、二人は颯爽と消え去った。その鮮やかな退散っぷりはとても清々しく、私は呆氣に取られつつも心の中で彼女らに拍手を送った。

「あ、やつほー、オルカ」

昨夜会ったときと同じく、ニイは片手をひらひらと舞わせた。ハウスキーパーはぎよっとしてこちらを見つめる。

「御機嫌よう、オズウィ。御機嫌よう、ニイ」

因みにオズウィとは、大人の女性、特に貴婦人に使う、敬意を込めたツェーヴラーグ流の呼び方である。

私は足を交差させ、片手を胸に当て、華麗にお辞儀をした。

そうして、華麗に自室のドアを開け、華麗に中に身を滑り込ませ、華麗に閉めた。

続いて華麗に鍵をかけようとしたのだが、その前にニイがドアを開けるのが早かった。

「ちよつとちよつとオルカ！どーゆーことなのさっ」

彼女はドアの隙間に何とか身を押し込め、自身をストッパー代わりにする。

口を尖らせるニイは、しかし楽しそうでもあった。

その雰囲気、何故だか私は元気づけられた。

不思議と自分も楽しくなってくる。

だから私はニイの挟まったドアを、力いっぱい押してやった。

「むぐぐぐ」

ニイは唸ると、渾身の力を振り絞ったようであった。
ドアは勢い良く開き、私はすんでのところで後ずさる。

「何だよおつ。折角あたしが部屋を荒らしに来た人間を現行犯逮捕してあげたのにっ」

「私にそれをどうしろって言うのよ……」

正直なところ、今はもう犯人が誰かとか、制裁を加えることとか、そついったことに全く興味が持てなかった。

どうせ私は数日したらここから居なくなる身であるし、犯人をどこかに突き出すにしても、その作業が面倒臭い。

そんな疲れた私の目を、ニイは無垢な瞳で見つめて来た。

「どうしてほしいの？」

「……どうでもいいわ」

心を込めてそう答えると、ニイは合点がいったようだ。「そ」と頷くと、自然な動作でハウスキーパーの腕を離すのだった。

解放された彼女は、暫く己が自由の身であることに気付いていなかったが、やがて戸惑いながら去って行った。

私はそれを見送ると、ふらふらとした足取りで部屋の奥に進み、ベッドに倒れ込む。

それから顔だけ動かし、ニイを見上げた。

「今日もシゼル様に言われて来たの？」

「うん、そうっ。お昼前から部屋の前にいたよん」

何でもないことのように言われた彼女の言葉に、私は驚愕した。

「え……？」

起き上がり、ベッドに座り直す。

「お昼前からここにいた？」

ゆっくり、彼女の台詞を辿るように確認する。

「そう、お昼前から。そう言われたからねっ」

「……私の部屋を見張っててくれたの？」

「そだよー」

私は言葉を失った。

素直に感動していたのだ。

目と鼻が熱くなった。

「ニイ、ありがとう」

私が大真面目な顔でそう言うと、ニイは無邪気に笑った。

「どういたしまして。その言葉は、二倍にしてシゼル様にもかけてあげてね」

私は「そうするわ」と頷いて、顔を逸らした。

油断するとあっという間に泣いてしまいそうだったから。

「そうそう、それでね、シゼル様からの伝言なんだけど、明日北東館に来てほしいらしいよ」

「明日？何時頃に行けばいいのかしら」

「できれば早めに、だって。でもまあ、大体いつでも大丈夫だと思

「うよー」

ニイは訳知り顔で言ったので、私もさしてこだわらずに「そう」と答えた。

確かに、時間に追われて生きるシゼル様は想像がつかない。

用事は終わりかと思いきや、ニイは探し物でもするように、私の部屋をきよきよと見回している。

「どうかしたの？」

「あれは？恋人候補リストは？」

その言葉に一瞬で気分が萎えた。

全て、とまでは言わないが、ほぼ全ての元凶が阿保お父様の製作したあのリストなのである。

「見たいの？」

「あたしは昨日見たからいいんだけど、シゼル様にあつたら持つて来いって言われててさっ」

私は脱力した。

どこまでいっても、彼は面白好きらしい。

こういうところがなければ、普通に良い人だと思うのだけれど。

いや、それはないか。ないわ。

私は引き出しの奥から、一応とっておいた真つ二つのリストを取り出してニイに渡した。

「わあい、ありがとつ。あたし的には、三番目のカイル君がイケメンでお勧めなんだよねー」

「はあ？どれよ？」

「見てないの？」

「見てないわ。興味なかったし」

「面白いよお、これ。人権とかプライバシーとか、どこまでも無視してるよね、君のお父さん」

「あなたも悪趣味ねえ」

呆れつつもリストを覗き込んだ。

カイルさんとやはらはまあ、確かにイケメンではあった。

それを二人で眺めている内に、私はいつの間にか心から笑えていることに気付いて、ニイには内緒でちょっと泣いたのだった。

26・意地悪

翌朝、私は珍しく自然に目が覚めた。

時計を見やると、針は五時五十分を指している。今日は早番ではないのでもう少し眠れるはずと、頭を毛布の中に押し込めた。この時期のツエーヴラーグの朝は冷え込みが激しい。さっきまで外気に晒していた頬が冷たかった。

しかし時間が経てば時間が経つ程、意識がはつきりとしてきた。このまま毛布に包まってぬくぬくしているのも良いが、まどろみ始めたところでどうせ目覚まし時計が鳴るだろう。

私はのそりと起き上がると、白いゼンマイ式目覚まし時計に手を伸ばす。アラーム用の針をもう一周回し、ゼンマイも限界まで回しておいた。

ベッドから立ち上がり、大きく伸びをする。それに合わせて木床が少し軋む。早く目を覚ましはしても、昨日の疲れは残っているらしく何だかだるい。

生成り色のガウンを羽織り、カーテンを開ける。外には霧が立ち込めていた。

その霧を見つめていると、昨日あったあれこれを思い出してしまった。

朝から憂鬱な気分では身支度をし出した。

絶対に今日こそは辞表を貰わねば、と決意する。

顔を洗い、着替え、髪を整え、化粧を施し、洗濯の必要な衣服を持って扉を開けた。

廊下に出ると、自室のドアの直ぐ横に見知らぬ侍女がいた。まだ少女と言っても差し支えない若さで、あどけない顔立ちをしている。

彼女は私に気付くと可愛らしく慌ててみせ、それから足を交差させ片手を左胸に当て、淑女流のお辞儀をした。

「御機嫌よう、オルカ・ユーデイス様」

勿論私もそれに応じ、「御機嫌ようオージス」と若い娘向きの挨拶を返すが、心の中では首を捻っていた。

私とかつてのアリシア以外でこの城で働く貴族の侍女といったら後はもう王家の側近くらいなものであるう。しかし彼等が私に近付いてくる理由は思い当たらない。

と思っていたら思い当たった。父からの阿保な手紙の噂が、王家の人々にも届いていない保証はどこにもないのだ。むしろこれだけ広まっているのだから、届いてないほうがおかしい。

しかし今回ばかりは、責任の大半は父にある。どうにでもなれ、と私は腹を括った。

「突然ですが、皇太子様がお呼びです。付いて来てくださいますし」

彼女はそう言って、後ろの気配を確かめるようにゆっくりと歩き出した。

少し背伸びした感じはあるものの、王家の側近であることへの誇りが窺い知れる。

当然私はその態度についてとやかく言うつもりはないので、大人しく彼女に従った。

途中洗濯物を入れる籠に自分の衣服を放り込む。

その音で、彼女は私がきちんと付いて来ていることを知って安心

したらしく、きびきび堂々と歩を進めた。

私はこのようなませた子どもが嫌いであるが、若くして王城勤めという彼女の生活に敬意を表して、無言で歩く。

まだ食事の時間までは少しあるので、廊下に他の侍女の姿は見えない。皆起き出してはいるようで、それぞれの部屋から生活音や気配は伝わってきた。

ひとつ気になったのは、私を呼び出したのが王様でも王妃様でもなく、皇太子様であるということであった。

皇太子様が暮らすのは南館の三階である。

王族の暮らす南館に実際に足を踏み入れるのは、これが初めてだった。

天井の高さと回廊の広さに驚いた。政務を執り行ったり、様々な来賓を招く本館はともかくとして、ただの住居にここまでする必要があるのであるのだろうか。

大きな柱達や床は全て大理石らしく、一列に並ぶシャンデリアの光がそれらをクリーム色に染め上げている。

回廊の真ん中には深紅の絨毯が伸びていた。

巨大な柱と柱の間には木製の古びた扉がひとつずつ鎮座している。その内のひとつを侍女の女の子が叩いた。

「スーです。オルカ・ユードイス嬢をお連れいたしました」

すぐに中から返事がし、少女はドアを開けて私を中に招き入れる。どうやらここは応接間らしく、皇太子様がソファの前で立っていた。

彼は私と目を合わせると、あの困ったような笑みを浮かべる。

「ご機嫌麗しゅう、オルカ嬢。朝早くにお呼び出しするなどという非礼をお許してください」

左胸に手を当て、丁寧な動作で礼をした。
私もそれに応じる。

少女は静かに扉を閉めると去って行ったようだ。

通された部屋は応接間のようなものであった。

北東館のそれより二倍程広い。白い壁に成された金の装飾が綺麗である。臙脂色の絨毯とソファにも金色の複雑な模様が描かれており、ああ王子様なのだなあ、と頭の悪いことを思った。

シャンデリアにぶら下がった硝子細工が、炎を反射して輝くのに見惚れていたら、皇太子様にくすりと笑われた。

「オルカ嬢は本当に光り物がお好きなようで」

一瞬嫌味かと思ったが、彼の労わるような微笑みを見る限りそうではないらしい。

「ええ。安っぽい考え方ですけども、光るものは綺麗なので好きですわ」

「それにしても夜会などで装飾品をあまり身に付けられませんね。きつとお似合いですように」

「御冗談を。私、宝石などはケースにしまって見ているだけで十分

ですの」

「謙遜なのですね」

皇太子様は関心したように頷いた。

こつこつと会話は自分に不似合い過ぎて嫌いである。

鳥肌が立っていないか確認するために、ちらりと自分の腕を見や
った。

その後皇太子様に促され、ソファに腰掛ける。

皇太子様が向かいに座ったところで、先程の少女が再びやって来
た。彼女はお茶を淹れると、また直ぐに静かに姿を消す。

勧められるままに紅茶を飲み、私は素直に「美味しいです」と感
嘆の声を上げた。

「それは良かった」

「とても良い香りですわね。今まで嗅いだことのないものですわ。
苺と薔薇でしょうか」

「そのように感じますよね。ティオンティアのノトリヤーという
果物を混ぜたものらしいです。女性はこのようなものが好きかと思
いまして、用意させました」

「初めて聞きましたわ。国内でも手に入るでしょうか」

「どうぞでしょう。これはティオンティア国王から贈られたものなの
で」

そんな当たり障りのない会話を暫く続ける。

しかし私はそれにも段々飽きてきて、元より話が上手なわけでも
ないので、自然と言葉少なになってきた。

早く本題にならないかなあ、とぼんやり思っているところに、皇
太子様はようやく切り出す。

「父上のところにあなたに関する下らぬ噂が舞い込んで来たのです。勿論私は信じてなどいないのですが、父は本気にしていました」

レイルズお父様、ぴーんち、と他人事のように思った。

「どのような噂でしょうか」

皇太子様はどう言おうかと少し考えているふうだったが、やがて訥々と語り出す。

「その、あなたが行儀見習いをしている本当の目的は、結婚相手を探すため、だとか、恋人候補リストなるものがある、とか、実際には侍女の仕事をさぼって恋人と頻繁に会っている、とか。恋人の個人名も何人か上がっています」

言っている内に皇太子様の顔が赤くなってきた。自分で言っていて恥ずかしい内容だったのだろうか。どこまでも爽やか野郎である。

「私の父上も、本気にしているとは言っても、あなたをどうこうする気はないようなのでご安心ください。ただ、あのユーディス侯爵の娘なのだからあり得るかもしれない、などと言っていて」

その言葉に私は自分で思うよりもむっとしていたらしく、「そうですか」と頷いた言葉はかなり低かった。

皇太子様は私の内心に気付いてしまったらしく、少し焦る。

「どうかお気を悪くなさらずに。ただ、父上も母上も少し心配しているだけなのです。あなたに、既に恋人がいたらどうしよう、と。それで名前の上がっている者達にも厳重注意を呼び掛けていて……」

そこまで述べて、皇太子様は口を噤んだ。あからさまに「しまった」という顔をしている。

そこに駄目押しするかのようになり、私は皇太子様の言葉を繰り返した。

「心配？ 嚴重注意？」

ちゃんと仕事しろ、などと注意されるのであればわかるが、王族の方々に私の恋愛事情を心配される意味はわからない。

そういえば食事会の席でも、私の言う程ない恋のあれこれをやけに気にしていた。

一介の貴族の娘の恋路を気にするとか、どれだけゴシップ好きなんだ。心配とか大きなお世話であるし、嚴重注意とか非常にお節介である。

皇太子様は顔を呆然とさせて、「すみません。今の話は忘れてください」と言った。

忘れられるわけがないが、反抗できる身分でもないの、「そうですか」とぶっきらぼうに返しておいた。

「今言ったことは、その内わかるかもしれませんが」

「ではその噂について、訂正させていただいてもよろしいでしょうか」

真実といっても阿保な真実であることに変わりはないが、この噂のままだと明らかに責任が私にあることになる。そこはきちんと誤解を解いておかないと。

「は、はい。お願いいたします」

皇太子様はほっとしたような表情になった。

「まず、私が結婚相手を探すためにこの城に来ている、とのことですが、それは間違いです。食事会でも申し上げましたが、恋人や想い人なる者もおりません。私なりに真面目に仕事をしているつもりです。ですが、恋人候補リストなるものは、確かに存在します」

安堵しきつて私の話を聞いていた皇太子様の顔が、最後の言葉で硬直した。

「それは一体……」

「そのリストは父が勝手に製作し、先日勝手に送り付けてきたものです。私はこの通り恋人も想い人もいませんので、父はそのことを心配しているのです」

「成る程、そうだったのですか……」

「信じていただけますでしょうか」

「あなたがそう言うのだから、私は信じますよ」

皇太子様はそう言ってニッコリと笑った。これが俗に言うキラースマイルとやらではなからうか。

父のことなどは本来伏せるべきところなのであるが、奴にも少しは反省してほしいと思い、私は正直に打ち明けたのだった。

「ですがそうになると、何が切っ掛けでこのような噂話が撒かれたのでしょうか。もしかして、郵便の仕分け業務をする者が中を見たのでしょうか」

「いえ、そうではなく……」

私は本当のことを言おうか迷ったが、私をこのような窮地に立た

せた相手への、報復も気遣いも、今となっては面倒なだけである。
何も考えずに答えようと思った。

「私の部屋に何者かが侵入しまして、そのとき父の手紙と、同封されたリストを見たらしいのです」

皇太子様の目が見開かれる。

「何とまあ……。ツエーヴラーグ王家の庭でそのような不祥事が行われたこと、重ねてお詫び申し上げます」

彼は律義に頭を下げた。

その行為に関して私は無関心であつたし、彼が悪いなどとは毛程も思っていないのだが、私に隠れて私に影響する行動を取っているらしき王家への嫌味として私は意地悪を言つてやつた。

「いいえ、皇太子様は何も悪くはありませんので、お気になさらず。特に犯人にも関心はありませんので、水に流してくださいな。何せ私は明日明後日にも行儀見習いを中退させていただこうと思つているのですから」

「え」

皇太子様が、とても呆けた顔をした。

私的には気まずそうな顔を予想していただけに、純粹に驚いたような彼の顔には私も驚いた。

だってこちら一応貴族の娘である。働かねばという意志の元来ているわけではないのだから、居づらい状況になったとき実家に易々と帰るのは当然な気がする。

「それはつまり、ご実家に帰られる、ということでしょうか」

「そうですね。私がこのままここにいても、王家の方々に迷惑をかけるだけですしねえ」

「いえ、そんなことはありません。そんなことはありませんし……ですが……そうですか」

皇太子様は深刻な顔で悩んでいるようだった。

一体彼等は何を隠しているのだろう、と改めて不思議に思ったが、やはりそのことまで明かす気はないらしい。

煮え切らない顔で「わかりました」と言われ、その日の会談は再開になった。

帰り際、最後に皇太子様はこんなことを言った。

「大変辛い状況に立たせてしまつてすみませんでした。このことについては、私のほうからも手を打ちますので、今少しお待ちください」

私はどうせここから居なくなる身であるし、今回のことを通して父には大いに反省してもらいたい。そんなことしなくてもいいのに、と独りごちながら、私は曖昧な微笑みを返したのだった。

27・庭師

予想はしていたが、皇太子様と喋っていたら朝食を逃した。全くあのぼんぼんは、使用人の朝食の時間が決まっていることにも気付かなかったのであろうか。

朝礼にはぎりぎり間に合ったので、解散するときミルキアさんに北東館に行くことを伝える。

ついでに辞表の用紙はどうになりましたか、と聞くと、「ああ、そんなことも言っていましたわね。もう少しお待ちになって」とかわされ、さっさと何処かに行ってしまった。

ミルキアさんはいまいち本気にしてくれていないような気がする。

空っぽのお腹と、それに反して思い煩いの詰まった頭。そんな身ひとつで、私は立ち入り禁止区域にやって来た。

ハイネの畑を歩いていると、珍しく向こうから一人の女性が歩いて来た。

背の低い赤毛の女で、恐らく私と身長が大差ない。

俯きがちに歩いており、顔はよく見えなかった。前髪も長いので、それが一層表情をわからなくしている。

二つに纏めて胸まで垂らした長い髪は緩くウェーブしており、随分痛んでいるようだ。毛先がばさばさしていそうだと思った。

黒い柔らかそうな上着の下にモスグリーンのシャツ、そして黒い細身のパンツを履いている。その上に更に黒いエプロンを着け、腰に回したベルトには大小様々な鍔が刺さっていた。

格好からすると庭師であろう。ということは、彼女がハイネさん

なのかもしれない。

彼女はバケツを片手にぶら下げ、小さな歩幅でゆっくりゆっくり進んでいる。

すれ違う間際になって、彼女はようやく私に気付き、顔を上げた。薄い灰色の目と同じく色素の薄い唇が驚いたように開かれる。丸い目と低い鼻を持つ、幼い顔立ちをしていた。

「おはようございます」

一応私のほうは挨拶したが、彼女のほうは再び下を向いて、やや体を硬くしながら去って行った。

北東館手前の門に着くと、ニイが番をしていた。

今日はエプロンドレスではなく、濃い赤を基調とした動きやすそうなパンツルックだ。よく見ると金のラインや王家の紋章が入っている。女性用の騎士の制服なのかもしれない。近衛兵に女性が何人かいるのは知っていたが、女性騎士がいるのは王家の親衛隊くらいである。滅多にお目にかかれるものではない。

彼女は私を見ると大きく手を振った。

「やつほーオルカっ。霧が晴れて来て良い朝だねえっ」

ニイは霧があろうがなかろうがテンションが高そうである。

「ニイ、その制服つてもしかして騎士の？」

「あ、この格好？これは騎士の制服だけど、あたしは騎士じゃないよー。動きやすい服が欲しいって言ったらシウルツが貰って来てくれたんだ。かつこいいっしょー！」

「ええ、とても」

本当にその制服は格好良かった。ただニイは出るところが出ている体系なので、少しきつそうではある。

「ニイは侍女もやるし、門番もやるの？」

「そだよ。あたしはオールマイティな役職なの。庭師をやることもあればコックをやることもあるよ。今日はシウルツがお休みの日だからあたしが門番」

「ふうん。あなた不審者が来たときに闘えるの？」

「まあそれなりにねー。あたしのことについては次があれば次に話すよん。とりあえずシゼル様んとこにゴーゴーだねえっ」

『次があれば』。随分引つかかる言葉である。ということは次がない、つまりニイと会うのはこれが最後の可能性もあるのか。

今日シゼル様に呼ばれたのは、てっきりいつもの気まぐれかと思っていたが、もしかしたらそんな軽い話ではないのかもしれない。

少し寂しくはあるが、それならそれでスマートである。私も今日彼には別れを告げようと思っていたから。

少しばかり物憂い気分で、私はニイのもとを去った。

門の先の小さな広場では煉瓦の敷かれた円の中心で、噴水が優雅に水を流している。わざとあるのか自然に生えたのかはわからないが、一部を覆う緑と赤の蔦が水に濡れて綺麗だった。

館の扉は開け放たれている。そつと中を窺っても誰もいないので、思いきつて足を踏み入れた。

夜来たときよりも生活音が雑多になった気はするが、それでもひっそりとしていることに変わりはない。

「すみません」

とりあえず中に向かって呼びかけてみた。
すると二階の奥でドアの開く音がして、直ぐにこの館の主が顔を出す。私はほつとして息を吐いた。

「遅かったな」

第一声がこれかよ、と思うが、不思議と彼の傲慢な態度はさほど気にならない。逆にいつそ清々しいとさえ感じてしまえるのだった。

「遅くなんてないですよ。朝礼の後直ぐ来たのですから。それに、私ここに来る前に皇太子様にまで呼び出されたのですよ」

皇太子様の単語を出すと、シゼル様は肩眉を上げる。

「皇太子が？……まあ、それならそれでいいが」

と、何やら複雑な顔でごにょごにょ言っていた。その様子が少しおかしくて、私は顔に小さく笑みを浮かべた。

シゼル様はいつも、必要最低限の感情を表に出し、必要最低限の言葉を表に出す、といったふうな印象が強い。

その彼が怒るとも悩むとも違う妙な顔をして、独り言のような文章を並べるのが奇妙であった。

「応接間に行く」

そう言つて、彼は再び廊下の奥に消えた。
私もその後を追いかけた。

28・シゼル

応接間には既にお茶の用意がしてあった。

私の座った席の前に、琥珀色のお茶の入ったティーカップがひとつ。シゼル様の前にも同じものがひとつ。

机の端には盆と魔法瓶が置いてある。

ニイが門番についているから、お茶の世話をする人がいないのかもしれない。

別に構わないが、どこまで人手が少ないんだろう。

湯気が全く見えないところからすると、もう冷めてしまっているらしく、シゼル様が「遅い」と言った理由がわかったような気がした。何となく申し訳なく思う。

私がじつと紅茶を観察しているのがわかったのか、シゼル様がこんなことを言った。

「その茶は、私が良いと言うまで飲むなよ」

「どうしてです？」

妙な要求をしてくる人だ。

彼は不敵に笑んだ。

「とある秘密がある。飲んだ後のお楽しみだ」

「もしかしてノトリヤーヤとかいう果物のお茶だったり？」

「そんな変な名前の果物は知らん」

「今朝皇太子様が出してくれたお茶が、そういうものだったのです」

シゼル様はさらに口角を上げた。

「そのようなつまらない秘密ではない。いいから私がいいと言つまで飲むなよ」

「はあ」

胡散臭い人が胡散臭いことを言っている。正直飲んで良いと言われても飲みたくはない。

話が一区切りついたので、私は抗議を口にすることにした。

「それにしてもシゼル様、酷いです。イヴァンさんが腰抜けだつてこと、教えてくれたらこんな目に合わずに済んだかもしれないのに」
「イヴァンが腰抜けだとは私も知らなかった。書面でやり取りしているのは仕事の内容のみだ。性格などは量れない」

「えー。じゃあ何であの後ニイを急に送り出してきたのですか」

「事態がどんな風に進展していくのか、興味があつてな」

心配とかじゃなかったんかい、と私は心の中で悪態を吐いた。

結局どういう過程を辿るのであれ、行き着く結論は「シゼル様は優しくない」ということになる。

「少なくともそう都合良くいくとは思っていなかった。その点はあなたにも忠告したはずだが」

「ああはい、そうでしたね、ええ、そうでしたとも……」

どんなに胡散臭かろうが、これからはシゼル様の話をきちんと受け止めよう。私は肅々と反省する。

「随分と参っているようだな」

重い溜め息を吐いた私を氣遣つてか、そんな言葉をかけてくれる。

「相当参つてますとも」

「何故行儀見習いを辞める？」

え、と私は息を呑んだ。ニイにさえ、そのことはまだ言っていないはずなのだが。

「ミルキアに聞いた」

私の心を読んだかのように、シゼル様は答えた。

「ああ、そういえばミルキアさんもシゼル様派でしたっけ」

「それは違うがな」

「だって私が辞めるってこと、シゼル様にちくつてるじゃないですか」

「彼女には彼女なりの考えがある」

そう言つてシゼル様は少しつまらなさそうな顔をした。

シゼル様にまでこのような顔をさせることができるだなんて、ミルキアさんはやはり問題児キラーな気がする。

「まあそれは今はいい。何故あなたは行儀見習いを辞める？」

「何故つて……。それは先程申しました通りです。私は今の状況に相当参っているのです」

「つまり状況が一変すれば、あなたは辞めるつもりはない、と」

私は姿勢を正した。

「状況を変える方法をお持ちなのですか？」

自分が実家に帰れば済む話なので、今更状況を変えて欲しいとまでは思わなかったが、私はシゼル様の考えそのものに純粋な関心があった。

こういうとき、彼ならどのような行動を取るのだろうか。

「状況、というか、環境を変えることならできる」

「環境を変える一番手っ取り早い方法が、行儀見習いを辞める、ということだと思つのですが」

シゼル様は目を瞑ってゆっくりと首を横に振る。

「いや。もっと手っ取り早い方法がある」

彼は私の方向に用い得る全意識を集中させているようだった。

その顔から全ての感情が消え失せる。

それは起き得る何もかもを覚悟したような、そんな潔い無表情だった。

「オルカ。私の近侍にならないか」

な。

空腹も、思い煩いのあれこれも全部吹っ飛んで、これ以上ない程の単純な驚きが私の全てを支配した。

全部吹っ飛んでしまったため、当然何かを言うことなどできない。思考が纏まらないどころか、素直な感想すら浮いてこない。

何も言えずにシゼル様を見つめていると、沈黙の時間と比例して、彼の無表情に翳りが生まれてきているような気がした。それに理性が焦ったのか、ぷつりぷつりと取り留めのない思いが段々湧いてく

る。とりあえず何か口に出さねばと思った私は、その感情を浮かぶがままに発した。

「シゼル様の近侍とか、大変そうですね」

「そうかもしれない」

「シゼル様優しくないですね」

「否定できない」

「この館の人達みんな変人ばいし」

「それは私のせいではないがな」

「でも、みんな根っからの性悪ではなさそうですね」

「どうかな」

「シゼル様は気まぐれに優しいときもあるし」

「気まぐれな優しさは、優しいと言えるのか」

「私、この城に来て噂やら虐めやらで性根鍛えられたので、大変な仕事でも頑張ります」

「それは心強いことだ」

無表情なシゼル様だが、発する空気が少し優しくなった気がした。

「阿保だけど良いですか？」

私がしたその質問に、彼はやっと擦れた笑みを返してくれる。

「阿保だからいい」

私は彼の素直でない笑顔に何故だか見惚れてしまって、いつの間にか嬉しいような悲しいような変な顔をしていた。

「あの、じゃあ、よろしくお願いいたします」

そう言って頭を下げると、シゼル様の笑みが深くなる。

これってユー・ディスプレイ家の法則でいくと悪い兆候なのだけれど……
あれ、大丈夫だよ、私。

「言質は確かに取ったからな」

「……今って感動的な場面じゃなかったでしたっけ」

「そうなのか？ 私は別に感動を求めているわけではない」

「そりゃそうでしょうけど」

あつれー？と私は首を捻る。

さっきまでの自分よ、何故こんな男に見惚れたし。

「それで、先に言っておきたいことがある」

「えちよつと待って先じゃないでしょう言いたいことを言うには遅すぎるでしょう言質取られた後じゃないですか不利じゃないですか」

「うるさい黙れ」

「……………」

シゼル様は目を細めて腕を組んだ。

ついさっきまで顔にさしていた翳りは気のせいだったのだろうか。

もしかして絶妙な演技だったのだろうか。

私はひっそりと目の前の尊大な男を睨んだ。

見えていないので当たり前だが、そんな視線は物ともせず、平坦な声で彼は言った。

「実は私は、皇太子の兄だ」

こうたいしのあに？

「交代、死の兄？」

「物騒な区切り方と発音をするな。つまり私は王族であるということだ」

「Oh! 賊!」

シゼル様の発するオーラが氷点下の温度になってきたので、私は彼の述べた情報を混乱する頭の中で真面目に分析した。

まず皇太子の兄であるが、つまり皇太子様のお兄さんであるということなのだろう。そして王族であるということなのだから、王家の人なのだろう。あれ、必死に分析した割には情報を噛み砕けてないよね。ていうかそのまんまだよね。そのまんまでわかるはずなんだよね。

シゼル様は、皇太子様の兄で、王族。

「シゼル様王子様説!?!」

「説ではなく事実なんだが」

「斬新な妄想ですねー!」

シゼル様はふう、と短く溜め息を吐くと、また表情を一切消して、私のほうに全意識を向ける。

「オルカ」

射抜くような、包むような響き。その一言で、力が抜けてしまう。彼の言葉が真実なのだと思います。

「王子様……王子様ですかあ。まあ確かに高貴な雰囲気は醸し出していますよね。でも雰囲気だけ高貴で実態は浮浪者ってかんじですね。高貴な浮浪者。うん、良いキャッチフレ……」

「何故あなたはそんなに現実逃避をしたがる」

「うう……だって信じたくないですもん」

「私が王子だと不都合か」

「うーん……面倒そうではありません」

そう、面倒そうではあるのだ。

王子様となつてくると、身分のことを色々考えて行動せねばならない。

そして王子様の近侍となると、仕事内容も単純ではなくなつてきそうだ。

できるならこの事実は知らずにいたかった。得体の知れない偉そうな研究者として接していたかった。

「まあ……仕方ないのでいいでしょう、それは。あ、私今更シゼル様を王子様として扱うとできないので」

「ああ。今まで通りに接してくれ。というか、確かに私は王の子ではあるが、王子のステータスは一切持っていない。本来存在していない人間なのであるから、人権すら危うい」

「……踏み込んで聞いてもよろしいでしょうか？」

シゼル様は大袈裟に頷いた。

「教えよう」

そう言った彼の顔は、私を憐れむかのような笑みを浮かべていた。

29・ディード

長子の出産の際、双子が生まれたときには市井に出さねばならぬ。
い。

王家にはこのようなしきたりがあるらしい。

理由はやはり、王権争いが熾烈化する可能性が高いから。そして、王が双子の片割れであるとイメージが悪くなるからだそうだ。

ディード様とシゼル様は一卵性双生児で、しかも長子であった。よって生まれて直ぐ、ディード様より後に引き出されたシゼル様は、王家と交流の深いとある商家に、養子として引き渡された。勿論内密に、である。

ディード様はツエーヴラーグのたった一人の王子として、シゼル様は裕福な商家の息子として、お互いのことなど全く知らずに育っていた。ある時まで。

それは十数年前に起こったらしい。

ひどい雷雨の日だったそうだ。

南館の近くに生えた一本の背の高い樅もみの木に、雷が落ちた。木は南館に向かって倒れてきて、被害はさほど大きくはなかったが、ある部屋の硝子突き破った。

それはディード様の私室であり、まさにそのとき彼は窓辺にいらしたらしい。

咄嗟に後退したので体は軽傷で済んだ。しかし飛び散った硝子の破片が両目に入り、結局ディード様は盲目になってしまったのである。

その時を境に、彼の今まで見ていたものが無になった。
とりわけデューダ様は油絵を描くのが好きだったそうで、美しいものも好きだった。

しかしあの日の一瞬があったために、己の愛していたものが何の意味もなさないものになったのだ。

この経験は、デューダ様の精神を大きく損なってしまったらしい。永遠の闇に閉じ込められた彼の心はどんどん不安定になり、やがて本人曰く歪んで、また狂っていった。

盲目になった上に精神を病んだ息子を見て、王様と王妃様は大層苦悩した。当時の彼を見る限り、とても民の上に立って采配を振るうなどできそうにない。

散々悩んだ結果、王様は苦汁の決断をした。

デューダ様とシゼル様を入れ替えることにしたのだ。

二人は、今でこそ似ても似つかないような人間ではあるが、幼き当時は瓜二つの容姿容貌だったそうだ。

そういえば二人とも銀髪に水色の目であるし、背格好も同じくらいであるし、顔のパーツは似てなくもないかもしれない。

境遇や体の鍛え方、性格が全く違うので、「高貴な浮浪者」と「野生の王子」という別々のタイプになったのであろう。兎に角雰囲気両極端なので、言われるまで気が付かなかった。

デューダ様は入れ替わるとき、二つの選択肢を与えられたらしい。ひとつは、今までシゼル様が暮らしていた商家で、今度はデューダ様が息子として暮らす、というもの。

そしてもうひとつは、王宮敷地内のある区域に生涯幽閉される、というものだったそうだ。

ディード様は後者を選んだ。このときシゼル・ツエーヴラーグという名の人間は死んだものとされ、表向きには世界に存在しないものになった、ということだった。

話を最後まで聞き終わり、私はふとした疑問を口にする。

「どうしてシゼル様は、幽閉されることを選んだのですか？」

どちらが自由かといったら確実に商家の息子であろう。王家が懇意にしている家柄なのだから、生活も安定していそうなものだ。私だったら商家を選ぶし、それが普通な気がする。

シゼル様は曖昧な笑みを浮かべた。

「さあ、どうだったかな。昔のことだから忘れた。狂ってもいたし」

反射的に嘘だ、と思った。

この顔から察するに、絶対何か考えがありそうである。まあ彼がこう言っている以上、突き止めたいとも思わなかったが。

「じゃあこの立ち入り禁止区域は、シゼル様を隠すための区域だったのですね。研究者とかいうのも嘘ですか？」

「それはまあ、嘘ではない。ただ、私が王子であるという事実を隠蔽するためのダミーの真実だから、虚構ではある。立ち入り禁止という時点で、この区域がそれなりの『訳有』であることは誰でも勘付くだろう。その真実を隠すには、やはりそれなりの『訳有』が必要だ。よって国家機密の研究という、真実を隠すための真実が作られた。これは私に仕事を与えるためでもある」

「成る程。ミルキアさんやニイも、そのことを知っているのですか？」

「ああ。基本的にこの屋敷に居を持つ者、それから王家とその腹心のみが全事実を知っている。アリシアやイヴァンなど、どうしても私と接触せねばならないような者や、偶然私を目撃した者などには、半分の真実、つまり研究者で通している。勿論これも口外してはいけないことになっている」

流石国家クラスの秘密。用意周到である。

「でも、そうすると私などに王子であることを教えてしまつてよろしいのでしょうか。私は行儀見習いで来ているわけであつて、ここに居を持っているわけではないのですが」

シゼル様は薄く笑つた。

「ああ。だからあなたに話したこのことも、真実ではあるが、真実の全てではない」

謎はさらにあるのか、と私はやや呆れた。

「シゼル様が今明かそうと思つた真実は、以上でしょうか」

「そうだな、今のところは」

「そうすると私は、何故あなたを見てしまったときに、ミルキアさんの様子が極端におかしくなったのか、とか、何故王家の方々が私のことを気にするのか、とか、何故新米侍女のアリシアが、国家機密の食事で給仕に駆り出されたのか、とか、そういったことは聞かないほうがよろしいのでしょうかね」

「……そうかもしれない」

「ひとつ、お聞きしても良いですか？」

「何だ」

「シゼル様ご自身は、私の味方でしょうか。それとも敵でしょうか」

シゼル様の目は僅かに見開かれた。それから、愉快そうな顔を
する。

「どうだろう。状況にもよる。私としてはあなたのことは気に入
ている。しかし、最終的に自分かあなた、どちらを有利にするか
ということになれば、私は恐らく自分を選ぶだろう」

「そうですか」

余りにもシゼル様らしい答えだったが、彼は最後にこう付け加
えた。

「ただ、私を敵とするか味方とするかは、恐らくあなた次第であ
るうな」

そう言った彼の虚ろな瞳に魅入られて、私は動けなくなってい
った。緊張で唾を飲み込む。

何が、と問われると上手く言えないが、もうそれで十分だった。

「他に何か質問は？」

彼が足を組み換えたところで、私は呪縛のような拘束から解かれ
る。

自由になったとき、私の胸には確かに強く温かいものが宿ってい
た。

それを自覚して、私は決意と覚悟を固める。

「いいえ。あとは何も」

ゆるゆると首を横に振った私は、笑っていたように思う。

何故だか今は、どんな試練や挑戦にも立ち向かえるような気がしたのだ。

私の明るい声に応じてか、シゼル様も楽しそうな顔をしていた。

「では、その茶は飲むなよ」

30・買い付け人

予想外のことを言われて、私の強かな心持ちは一旦白紙に戻った。
『では』って。どんな関連があるのか。

「どうしてですか？」

「その茶が、我が研究施設の努力の結果だからだ。まあこれに関しては、私はさして貢献していないが」

「……まさか毒ですか」

私は白い目でシゼル様を眺めた。

「近からず遠からず。毒とも言えるし、治療薬とも言える。ヘイヴ
イーボーンをご存知か」

その名前はおぼろげながら聞いたことがあった。
アリシアの植物話で覚えている数少ない記憶だ。どうして覚えて
いるかというと、彼女の蘊蓄^{うんちく}にしては珍しく、何やら物騒な話だっ
たからだ。

「ツエーヴラーグでは全面的に所持・育成が禁止されている毒薬の
原料ですよ。確か二十年近く前に、国内のものは全て焼却処分さ
れた、とか」

シゼル様は僅かに驚いたようだった。

「よく知っているな」

「花好きの友人……っていうかアリシアなのですが、彼女から聞き
ました。可愛い花を咲かせるのでしょうか？」

「まあそう言えるのだろう。うちではこの成分を利用して、全健忘誘発剤を作るのに成功した。その茶に入っているのがそうだ」

「ゼンケンボウユウハツザイ？」

「早く言えば忘れ薬だな」

「な」

私はしげしげとティーカップに入った琥珀色の液体を見つめた。言われてみると普通の紅茶より若干色が濁っているような気もするが、気のせいで済ませることができる程度だ。

「……どういった場合に、私にこれを飲ませる気でいたのですか？」

「そこまでは言えないな」

シゼル様の唇が歪む。

「因みにこれを教えたのは私の『気まぐれの優しさ』だ。あなたの言うところの、な。本来あなたはこれを知ってはならない」

「私にどうしろと？」

「さあ。この情報が本当にあなたの役に立つかどうかもわからない。私からの礼儀として受け取っておいてくれ」

「……わかりました」

果てしなく煮え切らない気持ちであるが、私は大人しく頷いた。覚悟したはいいが、やはり相手がシゼル様となると一筋縄ではないようである。

「それと、あなたの行儀見習いの期間は残り如何程か？」

「ええと、来年の七月までですね」

「では原則的に、それまであなたの活動可能区域は北東館と北東庭園のみになる。事情を知らぬ外の者とは、書簡などでの連絡もとれ

ない」
「え」

嫌というわけではなかったが、純粹に吃驚した。それではまるで私まで幽閉されているみたいではないか。

いやしかし幽閉されているシゼル様の近侍なのだから、それが普通なのだろうか。その論理でいくと、これから休日全くなし!?

「手紙も駄目ですか……」

「駄目だ」

「ていうか行儀見習いの期間が終わるまでつてなると、一年近くありますよね。流石にその間何の音沙汰もないと、家族が心配すると思うのですが。勿論私の家族にだってシゼル様のことは教えられないでしょう?」

「そうだな。だから、これからあなたには一芝居してもらうことにする」

「はあ。どんな?」

「後で置き手紙なるものを書け。『虐めと婚活が果てしなく嫌です。旅に出ますので探さないでください』みたいな」

「うわあ。私だったらやりかねない」

「だろう?」

大層楽しそうな彼の姿を見ていたら、もう細かいことはどうでも良くなってきた。

私は息を吐くとむんと胸を張った。

「わかりましたやりますよ。仰ることは何でも」

「ほう。感心な心構えだが、そう安請け合いして良いのか?」

「拒否できるのですか?」

「できないが」

やっぱりシゼル様は意地悪だ。
自分で聞いておいてこれかい。

「もう良いのです。私は覚悟を決めましたから。とりあえずどんなに胡散臭かろうが従って差し上げます」

「覚悟？」

「そうです。あ。何の覚悟かは内緒です」

私はにこつと微笑んだ。

内緒づくしのシゼル様に対するささやかな反抗である。

まあ、そうでなくとも言えるようなことじゃないけれど。

「ふむ。ではおいおい探っていくでしょう」

「やれるもんならやってみるです」

面目があるので強がっておくが、彼が相手となると簡単に暴かれ
そで怖い。というか、既に暴かれている可能性は多分にある気がする。

「では、一先ず話はこれで終わりだ。荷物を纏めたらまたここに来
い」

「すぐに、ですか？」

「すぐにだ。勿論この件に関して他言はするなよ、できないとは思
うが」

「了解です」

私としても、もう食堂で注目されるのは懲り懲りだったので好都合ではある。

話に区切りがつき、シゼル様が立ち上がる。私もそれに倣った。出口に歩いて行き扉に手をかけたところで、彼の動きが止まった。

「そういえば、皇太子とは今朝どんな会話を？」

「皇太子様と？」

私はえーと、と考える。

今現在のイベント内容が濃過ぎて、皇太子様との会話など随分昔のように感じられた。

「ああそうそう、私に関する噂の真偽を聞かれたのでした」

「それだけか？」

シゼル様の顔がこちらに振り向く。

「主な話はそれだけですけど。あ、世間話とか社交辞令とかはありましたけどね」

「へえ」と呟いて彼はドアノブを回した。

「それがどうかしました？」

扉を開けて待っていてくれるシゼル様に、私は疑問を投げかけた。

「我が弟ながら意気地のないことだと思って」

「意気地のない？」

「ああ」

小さくお礼を言って、廊下に出る。

まあ少し頼りなさそうだとは思うが、今朝の会話で意気地がないとは感じなかった。

首を傾げたとき、シゼル様の静かな声が飛んで来た。

「オルカ」

「はい」

彼は応接間の扉を完全に閉めると、突然片手を私の顔に伸ばして来た。

私は咄嗟に小さく仰け反るが、いきなりのことだったのでそれ以上は動けない。

彼の指先が、とん、と瞑った瞼の上に乗った。そこから伝うようにして五指は上方に滑っていき、やや強く頭を掴まれる。

「あなたは売約済みだからな」

「勿論」

反射的にそう反応していて、私は自分で驚いた。考える間もなく、ごくごく普通に、私は頷いていたのだ。

流石に恥ずかしかったので、悟られぬように目だけを動かしてシゼル様を見る。

彼が満足そうに笑っているのがせめてもの救いだった。

31・皇太子

またシゼル様が庭園の門まで送ってくれると言うので、我々は二人で館を出た。

どうせ後ですぐに会うのだから、と丁重に断ろうとしたら、彼はこんなことを言った。

「庭園の門でミルキアが待っている手筈だ。彼女があなたを見てどんな反応をするのかを見ておきたい」

「物好きですね」

「違う、これは調査だ。ミルキアは敵にすると一番厄介かもしれない。意味は教えないがな」

そうですか、と唇を尖らせながら、彼の言葉には大いに共感せざるを得ない。

そんなわけでシゼル様を前にして石階段を降りていたのだが、彼が急に立ち止まったので私はその背中に鼻先をぶつけた。デジャ・ヴ。

「これはこれは。皇太子殿ではありませんか」

慇懃無礼バージョンにシフトしたシゼル様の台詞を聞いて、私は少し驚く。

彼の背中から顔を出すと、石階段を降りた先に確かに皇太子様が立っていた。彼はひょっこり姿を現した私を見ると、少し啞然とする。まあ、勤務時間内にこんなところにいるのは確におかしいだろう。

シゼル様は階段を降りることはせず、その場にとどまっている。彼が段の中央にいるため、私も頭を覗かせるのが精一杯だ。

これってかなり失礼な態度だね。シゼル様の過去話を聞いた後だから、彼の王族への応対の仕方に納得はしているけれど。

皇太子様は私とシゼル様を見比べ、やや眉をひそめた。

「シゼル。何故彼女がここに？」

意外にも皇太子様はシゼル様を呼び捨てにした。仲が良いのか、或いはその逆か。

「何故そんなことをお聞きになりたいのですか？」

無機質な声音でシゼル様が言うと、皇太子様は眉を吊り上げる。こんな顔ができたのか、と少し驚いた。いつもの困り笑いよりかはよっぽど男前である。

「シゼルおまえ、自分の行動に責任を持て！」

私は息を呑む。

皇太子様からは、今にも階段を駆け上りシゼル様に掴みかかりそうな獰猛さが感じられる。

普段の彼からは想像もつかないような空気を出していた。

反してシゼル様の空気は、冷ややかなものになった。

「勿論私は責任を持って行動しておりますが、何か」
「なっ……」

どうやら仲は悪いようである。

皇太子様は一瞬絶句し、その直後先程よりも更に大きな声で叫んだ。

「彼女はモノではない！一人の人間だ！その運命を、おまえは易々と……」

「その言葉、そっくりそのままあなたにお返ししましょうか。私はモノではない。一人の人間だ。その運命をあなたは易々と……何でしたか？」

皇太子様が無言で唇を噛む。

「出過ぎたことを申し上げたようで。お詫びいたします。何、私は恨んでいるわけではありませんよ。望んでここに居るわけですから。あなたには恩義すら感じています。しかし皇太子殿下は大層お優しい方でいらっしゃいますので、私がこう言えば何も口出しできないのでしょうか。それを踏まえての発言ですから、気に病まないようお願い申し上げます。さて、あなたはこのような場所にどのような御用でしょうか」

「オルカ嬢を……探していた」

その声は、先の激怒が嘘のように弱々しかった。

シゼル様はシゼル様で、さらに冷えた空気を発する。

「ミルキアか」

私には何のことを言っているのかわからなかったが、皇太子様は無言だったので肯定したようだ。

ふいにシゼル様が私のほうに振り返った。私に向けたその顔は不機嫌そうではあるものの、冷やかではなかったので少し安心する。

「オルカ。皇太子殿があなたに話があるそうだ」

「はあ」

今朝も話したのだから、そのとき纏めて言ってくれば良さそうなものだが。言い忘れたことでもあったのだろうか。

シゼル様が道を空けたので、私は隣に並んで彼を見上げた。

その気配に気付いたのか、彼は小さく頷いて私の背中をそっと押す。

「送れなくて悪いな」

「いえ。どうせまた直ぐ来ますし」

小さく言葉を交わすと、シゼル様は薄く笑う。

私はそれを見届けて階段を降りて行った。

「改めまして、御機嫌よう、皇太子様」

皇太子様は顔を上げた私と目が合うと、現実引き戻されたかのような顔をした。

「あ、ええ。今日二度目ですけども、ご機嫌麗しゅう、オルカ嬢」

礼をして、あの締まりのない笑みを浮かべる。

「少し、話してもよろしいですか？」

「ええ、勿論」

ずっと私の前に、節くれ立った手が差し出された。
私は少し躊躇ったが、シゼル様が盲目であることを思い出し、手を重ねた。断ることなんてできないし。

皇太子様はぎこちなく私の手を包むと、ゆっくり歩き出した。

庭園の門にミルキアさんの姿は見当たらなかった。
いる手筈だとシゼル様が言っていたが、予定が変わったのだろうか。

代わりというわけでは勿論ないだろうが、ハイネの畑にはまだあの庭師の女がいた。しゃがみ込み、草を切ってバケツに入れている。私達に気付いてちらりとこちらに目を向けたが、見てはいけないものを見てしまったかのようにすぐに逸らした。しかしその場を去る気はないらしく、再び作業に戻る。

皇太子様は畑の中程まで来ると、歩みを止め、そっと私の手を離れた。
ここは前後の門番も見えない位置だ。

彼は庭師のほうを向いて、呼びかけた。

「ハイネ」

やはり彼女がハイネさんだったようだ。

彼女は今まさに鍬を入れようとしていたところで動きをぴたりと止め、振り向きもせずに掠れた声を発した。

「何」

皇太子様相手に一介の庭師がこんな態度で良いのだろうか。先程彼の意外な一面を見てしまったこともあり、私は肝を冷やした。

しかし当の皇太子様は特に気にしていないようだ。

「ここでこのお嬢さんと話がしたいのです。少しの間、二人きりにしてくださいませんか」

ハイネさんは無言で、ちょきん、と鍬を動かし、切った草をバケツに放り込む。そしておもむろに立ち上がり、挨拶は愚かこちらに見向きもせず去って行った。

皇太子様は彼女が見えなくなるまで見送ると、苦笑を浮かべて私を見る。

「礼儀のなっていない女性ですが、許してやってください。彼女は私のことが好きではないのです」

「気にしていませんわ。彼女がこの畑の主なのですね。名前が畑の呼び方に使われていることを考えますと、大層腕の良い庭師様なのでしょうね」

「ええ、まあ」

曖昧な態度で皇太子様は頷いた。

「それで、話というのは……」

「ああ、そうなのです。すみません、一日に渡って二度も呼び出し

てしまい」

全くだ、と私は独りごちる。

この男、決して嫌いではないが、兎に角疲れるのである。

「あの、まず聞いておきたいのですが、もしかして先程シゼルに、何事かを頼まりましたか？」

頼み事、といったら勿論あのことだろう。

「ええ。近侍にならないかと持ちかけられましたわ」

皇太子様の顔が強張った。

「それで、あなたは何と？」

「引き受けさせていただきました」

彼の肩がぐつと下がる。その顔には落胆が濃く表れていた。

私がシゼル様の近侍をやると、皇太子様にとっては不都合なのだろうか。

「あんな噂が流れてしまいましたので、このお話をお受けするのは、は私にとっても有益でしたの。仕事では彼のことを主に相手にしていれば良いわけですから、世間の目を気にしなくて済むでしょう？」
「であれば……私を信じて待っていてほしかったものです」

彼は悲しそうな目で私のことを見つめてきた。

う。これは反則である。やめてそんな目で見ないで。

私は皇太子様からやや目を逸らしつつ、彼の言葉の意味を問うた。

「……と申しますのは？」

「忘れてしまいましたでしょうか。今朝あなたと別れる際、言いましたよね。あなたの辛い境遇については、私のほうからも手を打つ、と」

そういえばそんなことを仰っていたような気もする。はつきり言っただけで全く期待していなかったので忘れていた。

「それで先程、父上に話をつけてきたところだったのです。早速あなたに報告しようと思ったならミルクアがやって来て、あなたはシゼルと呼ばれて北東館に向かった、と。あなたの話を聞けば彼の近侍になるのを了承してしまっていたようで、その、少しがっかりしました」

「は、はあ」

そこまで言っただけで、彼は再びその水色の瞳に力を込めた。彼の目はシゼル様のそれとは違い純粹に澄んでおり、滑らかに輝く。

「ですが、ここで引き下がっては男が廃ってしまいますので、二番煎じになりますが言わせてください。オル力嬢、どうか、私の近侍になってくれませんか」

私は彼の意気込みに気圧されて、若干後ずさった。

「シゼルの近侍になるよりも、条件は良いはずですが。行動も制限しませんし、あなたと接する可能性のある者には噂が間違いであることを説得しておきます。南館に良い部屋も用意しましょう。食事もそこでとれるように手配します。同僚も貴族の者ばかりですから、あなたにとってきつと良い理解者となるでしょう」

少し焦るような早口でそこまで言って、彼はすつと息を吸い込んだ。その頬が、少し赤く染まっているように見える。

「私の近侍に、なりませんか」

何だかまるでプロポーズのような雰囲気だなあ。

ぼんやりとそう思ったとき、私の中である考えが閃く。それを裏付けるように、食事会の夜、シゼル様に言われた言葉も。

『皇太子はあなたのことが好きだった。今もその気持ちが変わっていないかどうかはわからないが、少なくとも気にはかけている』

……もしかしてこの爽やか王子、今も私のことを？

いやいや自惚れはよせ、と自戒するが、どうしてもその考えは拭いきれない。

少なくとも私は彼のことを「爽やかだけど疲れる困った君」としか認識していないし、この気持ちは将来も変わることはないと思う。ごくごく小さな可能性だったとしても、こういう芽は早急に摘んでおかねば。

とすると、まず行すべきは、はっきり断ることだ。

よって私は眉尻を下げて微笑みを浮かべ、言い放った。

「ごめんなさい。私は既に売約済みですし、心変わりはありません。皇太子様がこんな小娘のことを気遣ってくださり感謝はしておりますが、私は是非シゼル様の近侍になりたいと思っておりますのよ」

皇太子様は力を抜くようにやや俯いた。

「そうですか。それは……残念です」

「どうかお気を悪くなさらないでくださいね。私は皇太子様の近侍をしたくないわけではなく、シゼル様の近侍をしたかっただけです。皇太子様には、きっと私なんかよりもふさわしい近侍の方がいらっしゃるでしょう?」

言葉は柔らかく、しかしあんに望みはないからね、ということ
を念のため全面に出しておく。

だって、彼の捨てられた仔犬のような目を見る限り、私の予想は
あながち間違っではない気がするのだもの。

しかし何だろう、このプロポーズを断ったような空気は。

だが、私が折角これだけ念を入れておいたというのに、再び顔を
上げた彼の顔は、意外にもそこまで弱々しくはなかった。

「わかりました。あなたがそう仰るのであれば、私は引き下がります
しょう。ですが、言っておきますが、シゼルはなかなか気難しい
人間です。何か起きたときには遠慮なく私を頼ってください」

うーん、良い男である。

その言葉はこんな脳内花畑が枯れた女には似合わないよ。うむ。

「わかりましたわ。そのときにはよろしくお願いしますね」

結局何もかもが中途半端な私は、彼の気持ちを徹底的に打ちのめ
すようなこともできないのであった。

32・母

ハイネの畑を出ると、門のところでミルキアさんが待機していた。皇太子様のことを考慮してここで待っていたのかもしれない。

「待たせてしまつてすみません、ミルキア」

「いいえ、お氣になさらず。もうよろしいので？」

「ええ」

そんな会話を交わしてから、皇太子様は私のほうに改めて向き直った。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。お時間を取らせてしまい、申し訳ありませんでした」

「いいえ、とんでもございません。お氣遣いありがとうございます」

彼は微笑むと、背を向けて歩き出す。

その姿が見えなくなるのを見届けると、ミルキアさんは窺うような目で私を見た。

「あなたは皇太子様に付くことになりましたの？」

「はあ？」

思わず不機嫌な声を出してしまい、慌てて笑って誤魔化す。

ミルキアさんはその間、口を開けて絶句していた。

「私があんな爽やか王子の近侍に耐えられるわけじゃないじゃないですか」

近くには門番もいるので、小声で不平をこぼす。

「断ったのですか？」

「勿論」

「ではあなたは、シゼル様の近侍に？」

「ええ」

ミルキアさんは相互の事情に精通しているらしい。
もしかして、と思つて私は聞いてみた。

「ミルキアさんは、皇太子様の味方だったのですか？」

「どういふことです？」

「シゼル様があなたのことを、敵に回すと厄介とか仰っていましたので」

「ああ」

納得したようにぼやくと、ミルキアさんは視線を上にならずして息を吐いた。

「別に皇太子様の味方というわけではありません。シゼル様の味方というわけでもありません。強いて言うならば、わたくしはあなたの味方です」

「え」

何気なく放たれたその言葉に、私は瞠目してしまった。

真意を量ろうと彼女を見つめてみるが、嘘を言っているふうでもない。

ミルキアさんが、私のことを純粹に考えてくれていた？

そう思うと、くすぐったいような騒ぎ出したいような感情が胸の内に燦^{くすぐ}り出す。

この気持ちには覚えがある。

例えば、立場目当てで近付いて来た男どもをやんわりと追い払ってくれた。

例えば、ご令嬢方からいただいた貢物の菓子を分けてくれた。そう、それは兄に関する記憶である。

そのことを思いついて得心した。

ミルキアさんは、お姉さんだ。私は、彼女の言葉が嬉しかったんだ。

私の視線に気付いたミルキアさんは、眉をひそめた。

「何ですかその目は。あなたに上げるモノは何もありませんよ」

「いえこれは物欲しげな視線というわけではなくって。えへへ。私さっきのミルキアさんの言葉に惚れました」

てれてれ笑う私に反比例するように、ミルキアさんは露骨に嫌そうな顔をする。

「やめてください。わたくしがあなたに味方するのは、常識的な見地から見てもあなたに同情したのと、切っ掛けを作ってしまったのが自分だからですわ」

「えへへー、それでも良いのです。これから同じ館に住むわけなので、よろしく願いますね」

ミルキアさんは髪をいじりながら溜め息を吐いた。

「まあ、あなたらしいと言える選択でしたわね」

そうして彼女は身を翻す。

「さあ、荷物を纏めて行きますわよ。わたくしはあなたの監視役ですの。逃げ出したり、秘め事を口外したりしないための、ね。今の内に外界の空気でも吸っておきなさい」

私が頷いて勢い良く深呼吸すると、何故かミルキアさんは肩を震わせるのであった。

私の母の名はフリージス・ユーデイスと言う。

旧姓はモワクルツで、公爵家の末子である。

彼女は掘りの深い華やかな顔をした美女であり、聡明で気だての良い貴婦人。つまり若き頃は、自他共に認めるモテ女であった。

この遣伝子は長子である兄に使い果たしてしまっただけで、私とカノンは兄を恨んでいる。ちょっとは妹のことを考えて生まれてきてほしい。

しかし先にも述べたように、カノンは要領が良かったので、多くの異性に愛されたわけではなかったけれど、意中の男は必ず落としていた。

彼女は私の見地からしてみると、努力の人間だった。勉強も趣味も恋も、およそ彼女が「良い」と考えるものに関してはひた向きであり一途であり。要するに真面目な人間だったのである。

彼女の生き方を眺めていた私は、つくづく、このような人間こそ幸せになるべきであろうなあ、とぼんやり思っていた。

さて、自分のことを棚に置いてこんな感想を客観的に述べている私こそ、母にとってはしごきがいのある子どもであった。

よって母は事あるごとに私に講釈を垂れたものである。カノンの倍以上は説教を聞かされていた気がする。それも主に男女の駆け引きについてのものだ。

私はその多くを右から左に聞き流していたのであるが、流石に何回も繰り返されれば覚えているものも幾つかある。

そしてその中でも最も鮮明な教訓は、私の心の中心に近いところに、確かに根を下ろしていた。

それを聞かされたのは私が振られた例の夜会の、帰り道でのことだ。

城で夜会が催されるときはいつも、領地の本邸ではなく、王都にある別邸に何日か滞在することになっている。

その年も我ら一族は王都に滞在しており、夜会の次の日に発つことになっていた。

生き帰りの交通手段は馬車である。

いつもは両親のペアと子ども達のグループで別れて馬車に乗り込むのであるが、そのとき母は私と二人きりで乗りたいと言い出した。

お説教が飛んでくることは容易に想像できたが、そのときの私は疲れ果てていた。抵抗する力もなかったので大人しく母と差し向かいで座る。

やがて馬車が動き出したが、しばらく無言の時間が過ぎる。
私は放心状態だったため、窓に額を押し付け、無駄に大きく揺れていた。

その日は夕暮れ前まで雨が降っていた。路面はまだ濡れており、街明かりを反射しててらと石畳が輝いている。
もう深夜に近い時間帯であったので、店は軒並み閉まっており、家の灯りもまばらであった。

馬車の中では母の付けた香水の香りがうつすらと漂っている。勿論私も香水は付けているので、母にとっては私の香りのほうが強く感じるかもしれない。

次第に人通りの少ない街並みを見ることに飽きてきた。
視線を正面に戻すと、濃い緑色の別珍張りの座席に座る母と目が合った。

「オルカ」

と高い甘い声で呼びかけられ、私はどうしても良さげな心持ちで、母の言葉に耳を傾ける。

「今日のあなたの行動は、正しいとは言えなくても、わたくしの好みでしたわよ」
「はあ」

これは母なりの慰めなのだろうか。だとしても今の言葉は何の気休めにもならないが、と冷めた頭で考える。

「あの王妃昔からいけ好かないのですわ。ヤウエン公爵家の一人娘なのですけれどもね。あの家とモワクルツは仲が悪くって、何かと因縁を付けてくるのですわ。ヒルダ王妃も前はわたくしの恋愛遍歴にうるさくって。あれは絶対嫉妬だと思いますのよ。その王妃の可愛い可愛い息子のダンスをあなたが断ったでしょう。わたくしずっと王妃を観察していたのですけれども、啞然としていましたわよ。良い気味ですこと」

慰めじゃなくて私怨の話かい、と私は心の中で突っ込みを入れた。本当にうちの家族は、色々常識を外れている。私も人のこと言えないけれど。

「それにしてもオルカ、あなたは大層お父様に似ていらしてよ」

その言葉に私はさほど大きく揺れたわけでもないのに、窓に頭を打ちつけた。鈍い音と衝撃、何よりも母の台詞に顔をしかめる。

「お母様、それ、何にも嬉しくありません」

「あら、だってわたくし褒めたわけではありませんもの。ただあなたの性格について事実を述べただけですわ」

事実として述べられたのであれば、尚更こちらとしては不満である。

「一体私のどこがお父様に似ていると仰るのです」

「そうですね。我がままで奔放なところでしょうか」

「……まあ、迷惑をおかけしていることは存じております」

「そういうことではありませんわ。わたくしがしているのはあなたの本質の話。お父様と違うところは、あなたは自分の本性を無駄な気遣いで隠しているところでしょうかね」

母の言ったことには肯定もできなかったが否定もできなかった。だから多分、合っていたのだらうと思う。

「あなたのお父様はね、わたくしに対して本当にしつこく言い寄ってきて。

わたくし最初はずっとやんわり断っていましたのよ。平民出のユ―ディス家はあまり評判がよくありませんし、レイルズ自身はちゃめちゃんな策略家で好き嫌いが大きく別れる殿方でした。わたくしは嫌いでしたわ。でもいくらやんわりそれとなく断ったとしても、彼はめげませんでしたのね。

いい加減むかついてきたので、二人きりになったときにはつきり言つてやったのですわ。『もうわたくしの周辺をうるつくのはやめてくださいまし』つて。このわたくしにそんなことを言わせるまでに、彼はしつこかったのですわ。

そのときまでに、しつこい殿方は確かに数人いらつしやいまして、わたくしキレたときには最終的にはつきり言つてやったのですわ。そうすると反応は二つに分かれますの。ひとつは本気で反省して、その後何の接触もなくなる方。性質たちが悪いのはもうひとつの反応をする方々で、逆ギレするのですわ。暴力を振られそうになったこともありましたし、嫌な噂を立てられたこともありましたが、二つに共通することとして、結局彼等はその時点でわたくしのことを諦めるのですわ。

それが、あなたのお父様は違いましたの。わたくしがはつきり自分の思いをぶつけても、彼は飄々とした顔でこう言つたのですわ。『だって仕方がないじゃないか。私がこれぞと思う女性があなただったのだから、忠節と愛を尽くすのは当然だ。それをあなたがしつこいと感じるのは仕様のないことだが、だとしてもそれはあなたの気持ちであり私の気持ちではない。私の気持ちはあなたの言葉では変わらない』。

どうしようもなく自己中心的な屁理屈で、ストーカー正当化発言ですわよね。でもわたくし吃驚して、純粹に感心しましたの。恋人に不自由しなかったわたくしにとっては、愛なんて移ろいゆく安っぽいものだと思っておりましたのよ。その考えを真つ向から否定する発言、そして行動にわたくしは興味を持ったのですわ。

それで彼のことを観察していく内に、ああこの人は阿保だけれど質の良い阿保なのだ、仕方ないから一緒に居て差し上げてもよろしくってよ、と思い始めたわけですよ」

私は神妙な顔を取り繕って、母の話を聞いていた。
えーと、これって要するに惚気話だよね、お母様。

「オルカ。あなたも阿保だけれど、質の良い阿保ですわ。お父様によく似ています」

「へえ」

力なく答えるのが精一杯だ。

「だからね、お父様がわたくしを見つけ出すまでに時間がかかったように、あなたも生涯の伴侶を見つけ出すまでに時間がかかるかもしれない。何せあなたは奔放で我がまま、そして阿保です。そのあなたの全てを受け入れられる器を持つ人間なんて、なかなかいないと思うのです。だからね、オルカ。もしあなたがお父様のように『これぞ』と思う方を見つけたのなら」

「しつこくねちねちとめげずにストーカーをしろと？」

私は口を尖らせ、気の抜けた視線で母を見つめる。

母はゆっくりと首を横に振った。

「そこまでは言いません。ですが」

彼女はそこでふいに語気を弱め、静かな静かな、吐息のような声でこう言ったのだった。

「生涯愛と忠節を尽くすくらいの、決意と覚悟は固めなさいな」

33・近侍

「親愛なるユーデイス家の皆様へ

次第に寒さも増してくる今日この頃、如何お過ごしでしょうか。

お父様は冷たいお酒を沢山飲んでお腹を壊しておりますか？お母様はそんなお父様に毎晩付き合ってお腹を壊しておりますか？お兄様は寒さも我慢しご令嬢との逢引に出かけて、お腹を壊しておりますか？カノンはくだらないことでお腹を壊すような人間ではありませんね。たまにはお腹を壊すのも一興ですよ。

因みに私は元気でやっておりますとでも書くと思ったら大間違いです。

それもこれもお父様のせいです。覚えがないとは言わせませんよ。お父様は情報通ですし、流石に私に関する噂も聞き及んでいると思いますが、念には念を入れてご説明しますね。

お父様は先日私に手紙を書いてくださいましたね。非常にお節介なリストと共に。あれが同僚にすっかりばつちり目撃されました。

実はそうでなくても私は最近俗に言う『虐め』を受けていたので。その一環として虐めっ子達は私の部屋に侵入し、荒らし回って遊んでいたらしいのですが、そんなときにあなたのお手紙が届いていたわけですよ。父親からの手紙だなんて、これ以上ない程ネタになりそうですものね。かくして虐めっ子達はあなたからの阿保な手紙と無駄に詳細なリストを読み、早速城中に噂を撒いたのです。そうして私は皆に馬鹿にされる日々を送っております。

どうしてくれるのだ、とはもう言わないことにします。

あなた達に期待するのが愚かな選択であることを、私はこれまでの経験で思い知らされております。また、きっと皆様は、ユーデイス

家の一員であればそのくらい自分で乗り切ってみせよと仰ることでしょうね。

そう、私はすっかり失念しておりました。

結局己の道を切り開くのは己なのです。きっとお父様は、そのことを私自身に気付かせたくて、だから渋る私を無理矢理行儀見習いに送り出したのですね。自覚するのが大変遅く、恥ずかしい限りです。

ですので、皆様の無言の叱咤激励を感じた私はこの事態を打開すべく、新たな自分探しに出かけたいと思います。

そういえばお父様は手紙でムワ・ドナの遊牧民のところがお勧めだ、と仰ってくださいましたね。あの文面も、きつとおまえは旅に出るべきだよ、というさりげない説得が含まれていたのでしょうか。

かと言って助言通りムワ・ドナに行くのでは自分の意志とは言えませんので、また別のところに行こうかと思っておりますが。行き先は秘密です。

そういうわけで見つけられますと自分探しの意味がなくなりますので、私のことは探さないでくださいね。

お父様、今までくだらぬお節介を焼いてくださり、ありがとうございます。これで十分です。

お母様、色恋沙汰に関する様々な教訓をありがとうございます。愛と忠節、忘れません。

お兄様、貢物の横流し、大変感謝しております。あなたは私とズイーガル亭の縁を取り持ってくださいった恩人でございます。

カノン、私の阿保な行為に真っ当な反応を返してください、ありがとうございます。あなたの怒声は活力でした。

使用人の方々にもよろしくお伝えください。

オルカ・ユーデイスより

追伸：我が愛しき片割れ・カノンへ

最後になりますので、懺悔させてください。

あなたに謝るべきことはあり過ぎて全部思い出せないの、まあ時効でいいかと思っていたのでございますが、心残りがひとつだけありますので告白いたします。

カノンは聡い子なので気付いているやもしれませんが、あなたの婚約指輪を壊したの、あれ、わざとでした。ごめんなさい。まじでごめんなさい。

理由は、あなたのことだからこれもわかるとは思いますが、わからないのであれば今更言うのも何なので伏せておきます。

少なくとも姉は本気で反省しております。大変恥ずかしく思っております。

許してとは言いませんが、慈悲の心があるならば、正直やっぱり許してほしかったりします。旦那様にも『大変申し訳ございませんでした』とお伝えください。

お二人の幸福を、遠き空の下から願っております」

北東館で働くことになってから四日が過ぎた。
以下はその記録である。

一日目。

荷物を移動させ荷解きした後、遅めの昼食をとらせてもらう。
その後ニイに館の内部や庭園も含めた敷地の案内してもらい、
住人の紹介してもらった。

そしてシゼル様と共に夕食をとり、私室に戻る。

二日目。

起床後シゼル様を叩き起こし、寝起きで不機嫌な彼と共に朝食をとる。

その後洗濯物やゴミを出す等朝の用事を済ませる。彼はデスクワークなので、私は飲み物の世話をしたり、掃除したりして過ごす。
そして二人で昼食。

午後もしゼル様はデスクワークである。私のテリトリーは居間と寝室、書斎を繋げたシゼル様の全私室と、向かいの私の部屋である。当然一日かけて掃除するような範囲ではなく、午前中で全て終わってしまった。元々綺麗だし。よって時々飲み物の世話をするくらいしかやることがない。

十五時半になると休憩時間なので、お茶やお菓子の用意をする。
勧められるままに私も一緒にする。お菓子はおいしい。

三十分後シゼル様は再び机に向かう。やることのない私。ストレッチをし出したら「目障りだ」と窘められる。

そして夕食となり、二人で食べる。

その後シゼル様は「散歩がしたい」と言い出したので、お供する。
北東庭園をぶらぶら歩いた後、自室に帰った。

三日目。

起床後シゼル様を叩き起こし、寝起きで不機嫌な彼と共に朝食をとる。

その後洗濯物やゴミを出す等朝の用事を済ませる。飲み物の世話をしたり、掃除したりして過ごす。

二人で昼食をとる。

飲み物の世話をしたり、図書室に頼まれた本を捜しに行ったりする。やることがないのでシゼル様の部屋をこそごと探索していたが、彼は気付いていないわけがないにも関わらず全くの無視である。やましいものは何もないってのかよ、ちっ。つまらないので途中でやめた。

休憩時間、お茶やお菓子の用意をする。勧められるままに私も一緒にする。お菓子はおいしい。

再び机に向かうシゼル様。やることのない私。開き直って居間のソファで寝ててもスルーだった。

そして夕食となり、二人で食べる。

その後シゼル様とお散歩をし、自室に帰った。
昼間寝てしまったためなかなか寝付けなかった。

四日目。

シゼル様に叩き起こされる。寝坊したらしい。「乙女の部屋に無断で入るなんて！」と憤ると、「ミルクアもいる」と親指で後方を指す。確かにいたがそういう問題ではない気もする。

寝起きで不機嫌なまま彼と朝食をとる。

以下、昨日と同じ。

五日目。

退屈過ぎてキレた。

34・暇人

「暇なんですけど!!」

その日シゼル様は朝からひたすらに書きものの作業をしていた。イヴァンさんに送る研究結果をまとめているらしい。

目が見えなくても文字は書くことができるそうだ。線に凹凸のついた特殊な紙を使い、それなりにバランス良く書くことができる。いる。

それはいいとして、私にとって問題なのは、いつになく仕事がないということである。まとめた資料は私が読み上げてチェックすることになっているが、それは全てが終わった後だ。退屈で退屈で仕方がない。

「そうかじゃないです！暇で死んでしまいそうです！」

「そうか」

「シゼル様は私が死んでも良いのですか！」

「暇が死因の人間を私は知らないからな」

「じゃあ私が第一人者になって差し上げます」

「そうか」

私はうつ、と唸った。

全く相手にしてくれない。しかし諦めてはいけない。これは重大な問題である。

私は尚も食い下がった。

「ていうか普通近侍ってこういうものじゃないと思うのですよ」「何がだ」

「例えばご主人様と一緒にご飯食べるとか、有り得ないと思います」
「嫌なのか」

「嫌じゃないですけど」

「どうせ私と活動する時間と場所が同じなのだから、効率が良くていいだろう」

「要するに暇を持て余すくらいなら、こき使って欲しいのです。もっと近侍っばいことがしたいです」

「近侍っばいこととは何だ」

「お仕事で出かけて、その付き添いとか」

「無茶言っな」

「シゼル様が引き籠りのように全く動かないから、私も全く仕事がないのですよ」

「事実引き籠りだから仕方がない」

「大体何ですかあの寝起きの悪さは。とつと起きてくださいとつとと」

「そついうあなただつて昨日今日と寝坊して不機嫌だつたらう」

「そうそれ！もうちよつと優しく起こしてくださいよ！」

「私がされたことを再現して差し上げただけだ」

「だつてシゼル様ああでもないときかないのなもの。私だつて最初は普通に優しく起こしたはずです。なのにあなたが全く起きないから実力行使に出たまでです」

「私だつて最初は呼びかけて起こそうと試みた。ミルクアの手前でもあるしな。しかしあなたはしきりに『カノンゴメンマジデゴメン』などという呪詛を涎と共に吐き……」

「ち、ちよつと待ってください！だ、騙されませんよ！私は涎など吐いておりません！何せシゼル様見えないでしょう、私の涎とか」

「揺さぶって起こそうとしたら偶然あなたの口元に手が当たっ……」

「ぎゃああああすいません私が悪かったですお願いだからそれ以上言わないでくださいっていうか絶対絶対口外しないでください」

シゼル様は背を向けたまま、勝ち誇ったかのように鼻を鳴らした。そうして黙々とペンを動かし続ける。

対する私は深く頂垂れた。乙女に向かって寝言やら涎やら指摘するだとか、何てデリカシーのない……！いやしかし、むしろデリカシーがないのは私のほうか？だって寝てる間のことは操作できないし、ねえ。仕方ないよ。

って、こんなところでめげている場合ではない！

「シゼル様、お願いがあります」

私は姿勢を正して宣言した。

シゼル様は疲れたように溜め息を吐くと、立ち上がる。椅子の向きを私の方向へ向け、再び腕と足を組んで座った。

「何だ」

その顔は無機質で透明であるが、私は己を鼓舞して言葉を響かせた。

「暇なときは、他の使用人の仕事を手伝いたいです」
「却下する」

動きも表情も全く変えずに、シゼル様は即答した。

「何ですかー、いいじゃないですかー。小まめに様子見に戻ってきますからー」

「駄目だ」

「だって私ここにいってもあんまり意味ないですよ」
「そんなことはない」

淡々とそう言われて、私は「へ？」と固まった。

「いるだけで意味があるのですか」

「ある」

「どんな？」

シゼル様は思案するように天井を見つめた。

そして「何とえば良いのか……」と言葉を発し、続ける。

「あなたの気配は精神安定剤の効果がある」

大真面目な顔でそう言われたものだから、私はつい嘖き出してしまった。

「何故笑う」

「いえ、シゼル様の言い方回りくどくて可笑しくって。だってそれってつまり……」

私がいると安心するってことでしょう？

そう言葉を紡ぐとして、私は息を喉に詰まらせた。己がどんなことを口走ろうとしていたのかをもう一度思い返し、全身が熱くなっているのを感じる。左胸がどこのことやけにうるさい。

……私今、めっちゃ恥ずかしい台詞を吐こうとしていた！ていうかこの男、めっちゃ恥ずかしい台詞を平然と吐いた！

シゼル様は相変わらず無表情で、しかし私の気配を探り私の一挙一動に耳を澄ましていることは確かである。

この動揺はばれただろうか。それともわからなかっただろうか。そんなことばかりが気になる。

「つまり？」

「……何でもございません」

「変な奴だな」

変な奴はあんなだよ！あんな臭い台詞を迂遠にアレンジして！

そう思ったとき、ある予感が私の脳裏を掠める。

もしかして私、シゼル様の評価結構高い？

かくして私の頭の中で二派が激突した。一方は自惚れんなよ調子乗るなよと自分を諷める派閥。他方は、私を名指しで近侍に置くらいだから実は気に入られてるんでない？と私を囁し立てる派閥。相互の意見をよくよく吟味するが、結局のところこれは他人の気持ちであるわけだから、私が一人で考えていても正しい結論が出るものではない。

しかし、卑怯だが使ってみる価値はあるかもしれない。果たしてこのように使うものなのかはわからないが、即ち、最終兵器を。

私はぼそりと呟いた。

「お願い聞いてくださらないなら、私は皇太子様の近侍になります」

言い切って、シゼル様の反応を窺う。

すると彼は眉をひそめ、露骨に剣呑な顔をした。普段表情変化が薄い彼が、感情をわかりやすく表すことは珍しい。それだけに今の顔は魔王降臨のような空気を持っていた。

私は思わず半歩後ずさり、何を言われたわけでもないのに言い訳をしてしまう。

「いや、だって、皇太子様仰ってましたもの。皇太子様の近侍だったら自由を制限されないって。それに、何かあったら遠慮なく頼って良いとも言ってましたし？ま、まあ、シゼル様が他の手伝いしても良いって仰るのであれば、別に良いんですがね」

シゼル様は「そうか」と言って表情を消した。消したというより、無表情によりそれまでの剣呑な空気を覆い隠した、と言うほうが正確かもしれない。

そして、飽くまで淡々とした静かな声で私に言った。

「そう仰るのであれば、私にはあなたに特に言うこともない。去りなければ去れ」

私はしばし沈黙した。

この男、可愛くない。

「うー。何でそうなるのですかー」

肩を落とし、力の抜けた声で抗議する。

「普通引き止めるでしょうに……」

するとシゼル様の張り詰めた空気が和らいだ。同時に、彼は虚を突かれたかのような顔をする。

「引き止めて欲しかったのか」

「そうですよ。それくらい察してくださいよ」

「ならば初めからそう言え」

「言えるかいっ」

顔が熱い。多分上気しているのだろう。何だか私一人で勝手に空
回っているようで恥ずかしい。

シゼル様は手を顎に当て、思案するように目を伏せた。そうして
数十秒経過すると、ふいに「良かろう」と呟いた。

「気が変わった。あなたの好きにするといい」

「えー……それはつまり、やっぱり出て行きたいなら出て行けと？」

「違う。時間に余裕があるときには他を手伝っても良い」

「本当ですか!？」

私は左右の拳を握り締める。
シゼル様は小さく頷いた。

「ただし優先すべくはこちらだ。他の部署に当たっているときも一
時間ごとに来ること。それと、食事と休憩時間は絶対に外すな」

私は満面の笑みで、何度も何度も頷いた。

「了解ですっ」

私の願いが叶ったことはもとより、彼が私を尊重してくれたこと
が何よりも嬉しかったのだ。

35・少女

時刻は十三時を少し過ぎたところであるから、まだ使用人食堂に人がいる時間帯である。

手伝える人を探すため、私は一先ずそこを訪れることにした。

使用人食堂といっても西館のそれとは比べ物にならない程に小さなものである。そもそも北東館で働く者が少ないので、それも当然だ。

因みに私は未だにシゼル様以外の研究者とやらを見たことがない。彼は忘れ薬の開発にはさして関わっていないようなことを言っていたから、彼以外に研究者がいてもおかしくはないのだが。

食堂には十人がけの黒い大きなテーブルがひとつ置かれているきりである。椅子は余ったものを色々と持って来ているらしく、全部形が違う。中には細工の細かい高級そうなものもあった。共通するのは、皆等しく使い込まれて古びたもの、ということである。

制服を着ていない者もいるので定かではないが、シュルツも含めて騎士が六人、テーブルを囲んで食事をとっていた。

入口から見て左の壁には小窓がついており、隣の厨房と繋がっている。ここから料理を受け渡しする仕組みである。昼の仕事は大体終わったらしく、料理人のフェイさんとその弟である見習いのリウが、食器を洗っているのが見えた。因みに彼等はニイも含めると三兄妹であるらしい。上からフェイさん、ニイ、リウとなる。

私に気付いた私服の男が手を上げた。

「オルカちゃんじゃねーか。どしたよ？シゼル様と喧嘩でもしたかあ？」

途端に私は一斉に注目を浴びる。

私は手をひらひらと振った。

「違いますよ。暇だったので、何か手伝えることはないかと思って」
「暇っておまえ、旦那の近侍なのにこんなところに来てたら駄目だろ」

シウルツが真面目に心配そうな顔をした。

「それが大丈夫なのです。ちゃんとシゼル様に了承取りましたし」

私がそう言うと、何故か皆感心したような雰囲気を出した。「へえ」とか「ほお」とか呟いている。

しかしシウルツだけは相変わらず心配げで、片手で額を抑えた。

「自分の主人に口答えしたのかよ……」

「口答えではありません。お願いです。若しくは説得」

「にしたって近侍が持ち場を離れるとか、一番やったらいけないことだろ」

納得してくれそうにないので、とりあえず堅物は放っておこう。

そう思い、私は皆を見まわした。

「それで、何か手伝うことはあります？皆様」

騎士達は首を傾げてお互いの顔を見つめ合う。

「俺達の仕事はあんたみたいなか弱い嬢ちゃんがやるもんじゃねー
しな」

「厨房に聞いてみたらどうだ？」

私は頷いて壁の小窓のほうに歩いて行った。

軽く叩くと、フェイさんが直ぐに開けてくれる。彼は細い目を更に細めて笑んだ。

「王子様が小腹減ったって？」

「オルカじゃん！めっちゃ久しぶり！」

後ろからリウも顔を出す。

私はリウに適当に手を振ってから、首を横に振った。

「違います。何か手伝うことないかなって思っ

「ん？誰が手伝ってくれんの？」

「私が」

フェイさんは首を僅かに傾けた。

「じゃあ俺を手伝え！遊ぶぜオルカ！」

彼は割って入ろうとするリウを眼力で黙らせると、再びこちらを向く。

「近侍でしょ？君」

「そうですね、暇過ぎるので他を手伝うことにしました。あ、ちゃんと許可は取っておりますので、ご安心ください」

「ふーん。お気遣いは嬉しいけど、うちはしばらく仕事はないかな。昼のが大体終わったところだから。これ洗い終わったら一旦お昼休

み」

「あー。そうですかー」

「今の時間帯ならハイネのところとかいいんじゃないの?」

「了解です。じゃあ行つて来ます」

彼に会釈して立ち去ろうとしたが、その前にリウに呼び止められた。

「オルカ!俺も行く!」

「嫌だ」

私は即答した。

「何でだよ、いいだろ!」

「あなたはここの仕事があるでしょうに」

「だからもう終わるんだって!なあフェイ、いいだろ?別に」

フェイはにこにこ笑いつつ、「うん別にいいよ。夕飯の支度前に戻ってくれば」と言った。

ほれ見ろと言わんばかりにリウは胸を張る。

「でも嫌」

「何故だし!」

「足手まといになりそうだし、あなたがいるとハイネさんが嫌がりそう」

「んなことねー!」とリウは憤ったが、同時にフェイさんが「それはあるかもねー」と微笑む。

今度は私がほれ見ろと言わんばかりにリウを見返してやった。しかしフェイが横からフォローを入れてきた。

「まあ、連れてってやってよオルカちゃん。変なことしかしたらケツ叩いていいし」

「……俺を何歳だと思ってんだよ……」

「リウのおケツなんて叩きたくありません」

「まあまあ。こいつの相手してくれるんだったら、それがむしろ俺にとっての手助けだし」

私はうーんと唸る。彼にそう言われてしまうと、断る術もなくなってくる。

「仕方がないですね……。ベビーシッターってことで」

フェイはうん、とにつこり頷き、リウは「うをい」と眉を吊り上げた。

リウは私より大分背の高い少年である。多分シゼル様よりも身長は高そうだ。

顔立ちはニイによく似ていて、彼も灰色の三白眼を持つ。それなりにしっかりとした体格をしているようであり、特に重いものを持つ仕事だからであろうか、肩幅が広い。髪は乳白色で、襟足だけ伸ばしていた。

私はリウに続いて石階段を降りて行つた。
何故か彼は食堂を出てから一言も話さない。

「どうしたの？急に大人しくなっちゃって」
「べ、別に」

リウは前を向いたままでぶつきらばうにそれだけ言った。その態度が、私の悪戯心に火を点けた。

「あ、わかった。急に二人きりになって緊張してるのでしょうか」
「ちっばーよ！」

言って振り向いたリウの顔は真っ赤である。うわ何この子からか
いがある。

「はいはい初々しいお坊ちゃまでございますねー」

「違うっつーの！子ども扱いしやがって！」

「だって子どもでしょう？」

「はあ？おまえとさして変わらないと思うぜ？」

あ、ちよつと嫌な予感がする。

「……………。おいくつなのかしら？」
「十四」

一瞬で心が凍りつく。

何も言わない私を不思議に思ったりリウがこちらを振り返ると、何故かぎよつとされた。

「えーと、うん。もしかして、大分年上？」

「勿論ですことよ？」

「あの。うん。…………ごめん」

そう言つて彼は階段を降りる足を早め出した。

この所謂「幼児体型」^{いわゆる}は、カノンと私の長年の悩みである。

背が低いことは元より、手足が細く、それぞれのサイズも小さい。そしてどちらかというと胴体のほうがぽっちゃりめなのである。目が大きいのには兎も角として、瞳の割合もかなり大きいことや、おでこが広いこと、それから口が小さいことも、兄に言わせれば「ロリ顔」らしい。

因みに胸は普通にある。嘘ではない。

しかし十四に同年と間違われるとか、相当ショックが大きいものである。

ひょっとして私はかなり大勢の人に十四歳くらいだと認識されているのだろうか。いやしかし皇太子様はシゼル様が言うに「女性」と見てくれたようだし……。

そう思ったところで、ふと私は嫌な考えに行き着いてしまった。

もしかして私、シゼル様にも子ども扱いされてたり……？

で、でも彼は目が見えないし。うん。私の本質を見てくれてるよね、きっと。

流石に声までロリ声というわけではないし、女性の中では少し低めの声質だと思っている。

しかし、今朝の涎がどうかという遠慮のない言動だったり、私が部屋で何をしようと大体スルーという容赦だったりを考えてみると、近侍というよりペット扱いされていない自信が無くなってくる。

シゼル様が私を傍に置いたのって、もしや珍獣を飼いたかったか

らなんじゃあ。

俄かに穏やかでなくなった空気を感じ取ったのか、リウは暫くの
間何も言わず、私も無言で彼の後を追った。

36 少年

「お！ハイネ発見！」

もう直ぐ階段を降り切るところで、リウが声を上げた。前方を見ると、確かに庭園にハイネさんの姿が見えた。彼女はここから割と近い杉の樹の上で、枝に跨り剪定の作業をしている。

たちまちリウは駆け足でその大きな杉に寄って行った。駆け足になるくらいはりきっているのかもしれないが、駆け足になるくらい、機嫌を損ねた私から一先ず逃げたかったのかもしれない。後者だと思っている私は捻くれているだろうか。

私は意味もないのに走る程若くはないので、そのままの足取りでリウの後を追った。

リウの姿に気付いたハイネさんが顔を青くしたのが、遠目からでもわかった。そんなに彼が嫌なのかと思ったら、次の瞬間その理由がわかる。

彼は杉の樹に立てかけてあった梯子を「ていつ」と取ったのである。

「どーだ、アクジョめ、参ったか！」

と、彼は何故かふんぞり返っている。

それにしても世間の十四歳とはこうも精神年齢が低かっただろうか。やはり貴族とは違うのだろうとは思っけれど、彼の性格は彼自身に問題があるような気がする。

だってあれ、ニイの弟だからね。フェイさんが普通なのが不思議なくらいだわ。

私はでかい図体と太いだみ声の割に幼稚な、目の前の少年に声をかけた。

「やめなさい、リウ」

リウは嬉しそうに振り返る。

「だってあの女、アクジョなんだぜ」

そう言つて彼はハイネさんを指差すので、私は無理矢理彼の手を下ろさせた。

『アクジョ』ことハイネさんは無表情を取り繕つてはいるが、降下手段を失ったことに関しては取り乱しているようで、不安げな目をしている。

「人を指差すのは失礼なことだわ。因みにレディの年齢を大幅に間違えるのも失礼なことよ」

「そ、そんなに根に持ってたのかよ。若く見えただから良いじゃねーか」

「限度があるわ限度が。兎に角梯子を彼女に返しなさい」

するとリウはにたあつと顔を裂くように大きな口を歪ませる。

「それが、あいつのアクジョっぷりを聞いたら、オルカもんなこと言つてられなくなるぜ」

「悪女とか言わないの」

一応窘めはするが、困ったものだ。

妹がいるとはいえ双子だから同い年だし、弟がいたことは勿論ない。周りにいた年下の男の子達は、それなりに貴族としての自覚を持っている者ばかりだった。このようなはっちゃけた年下をどう扱えば良いのがよくわからない。

加えて、彼は得意げにこんなことを言い放ったのである。

「だってハイネは、シゼルのことが好きなんだ！」

私は思わず「え？」と開いた口から素直に声を漏らしてしまった。この「え？」というのは、何故それが悪女だということに繋がるのか、ということと、ハイネさんと色恋沙汰が全く結び付かなかったこと故の「え？」である。

しかしリウは益々得意げな顔をする。

あーもーこの餓鬼どうしたらいいんだ。

とりあえず私はハイネさんの顔色を窺った。

彼女は憮然としている。

私は自分の頭を押さえつつ、もう一度リウと目を合わせた。

「えーと、それで？」

「何だよ、『それで？』じゃないだろ！おまえ危機一髪だろーが！」

「ちよつと待ってよ何でそうなるのよ」

「おまえもシゼルのこと好きなんだろ？三角関係」

え？何でこんな餓鬼が私の気持ちを悟ってるわけ？

何せリウと会ってまともに話しているのは、自己紹介のときと今

日くらいなものである。その二日でわかる程に恋心をだだ漏れにした覚えはない。そもそも彼とシゼル様の話をした覚えがない。私の危機的状況予測リーダーが甲高く警報を発令し始めた。

「誰がそんなこと言ってたの？」

努めて笑顔で。努めて笑顔で。

「ねーちゃん」

私は肩を落とした。

えー、ニイかよ。

彼女となると、怒りをぶつけることができない。何せ、怒りをぶつけたところでひよいひよいかわされるのがオチだろう。シユルツとかだったら遠慮なくストレス発散できるのに。ああでもあんまりやり過ぎるとミルキアさんが怒るかな。

しかし彼女にそんな繊細なところを見分ける能力があつたとは驚きである。まあ一歩間違えれば常に危うい女だとは思っていたが、今日の話を聞いて益々侮れなくなってきた。

「もしかしてニイはその話、館の皆に言いふらしてたりした？」

「いんや？俺が『オルカつて可愛いな！』ってゆー話をしてたら、オルカはシゼルのもんだから駄目だつて言われた。……うを、何故撫でるしやめる俺は子どもじゃねー！」

「いいじゃない。今あなたの株が大分上がったわよ」

「うわー安いオンナだなあ」

「どこで覚えてくるのよ、そういう言葉……」

私は撫でたついでにつんとデコを押してやった。彼は「ぬお」と言って大袈裟に反り返る。

しかしこんな行為をするにも私は手を一杯に伸ばさねばならない。
この十四歳むかつく。

「でもじゃあ、認めるんだな？シゼルが好きだってこと」

「うるさい。あなたに知る権利はないわ。大体ご主人様のこと呼び捨てにするのやめなさい」

「話逸らすなよー。全くどいつもこいつも物好きだよなー。あれのどこがいいんだか」

「兎に角今はその梯子を返しなさい」

「いいのか？恋敵だぜ？」

ハイネさんはひたすら冷めた目でリウを睨んでいる。どうやら結構怒りが高まってきているようである。

「仮に恋敵だとして、どうして梯子を返さないのよ」

「え？だってこれ返さなかったら、あいつは一生をこの樹の上で過ごすんだぜ？晴れて恋敵がいなくなつて安心じゃねーか」

こわつ。何かこの無垢な瞳が凄く怖い。

理由のない悪戯かと思つたら、決してまともではないが理由はあったらしい。こういうことをさらつと言える辺り、ニイと雰囲気似ている気がする。

猿に説得は無駄と判断した私は、無理矢理梯子を奪い返し、元あったところに戻した。

リウが「あーあー」とぼやいているが、私的にはリウの頭が「あーあー」なかんじである。

ハイネさんはリウのことをまだ警戒しているらしく、恐る恐るといった足取りで梯子を降りて来た。

そうして彼女はさも当然のように梯子を持って私達の横を通り過ぎようとしたので、私は慌てて彼女を呼び止めた。

ハインさんは嫌悪の眼差しでこちらを見た。

えー、私はむしろ助けてあげたのですけれどー。

「何」

「あの、私達実はあなたを手伝いに来たのです」

「はあ？」

眉を顰^{ひそ}めるハインさん。

心中お察ししますとも。

「明らか邪魔しに来たように見えただけだ」

実は私はこのときのハインさんの言葉に少し感動した。私が初めて聞く彼女の長めな台詞が、これだったのである。

「えー。はい、まあ、リウを連れて来たがためにこんなことになってしまいましたけれども」

言ってじろりとリウを睨むと、彼は「何だよお」と不満そうに声を上げ、何処かに走り去って行ってしまった。野生に帰ったのだと思う。

「そもそもあんたはご主人様の近侍なはず。職務怠慢も良いところ」

元来の性質か、私への嫌悪が原因かはわからないが、随分と毒舌である。

私は段々目の前の女に怖気づいてきた。
加えてタイムリミットのことも気になってきた。食堂に行っ

らここに来たのだから、もう随分時間が立っている気がする。

一時間は結構何もできない。今回は不可抗力もあったが。

「えと、余りにも暇だったので、他の部署を手伝うことを許されているんですね」

「ご主人様に命令されたの」

「いえ、私がお願いしたのです」

「絶対駄目。あなたは近侍。早く帰るべき」

彼女の態度は断固としていた。その表情はそこいらにいる騎士なんかよりもよっぽど武士然としており、シュルツなんて目じゃない。これ以上言っても無駄であろうし、帰らなければ行けない時間も恐らく迫っているので、私は「そうですか」と言って引き下がることにした。

最後に私はふかぶかと頭を下げる。

「あの、お邪魔してしまい、申し訳ありませんでした」

「本当」とハイネが言い、私は背中に嫌な汗をかいた。

取っつき難い人だなあと思っただが、彼女はその後こんなことを言った。

「でもあんたが謝る必要はない。悪いのはリウ。……貴族の女が簡単に腰を低くしては駄目」

そんなことを言われるとは思っていなかったの、私は少し驚く。少なくともハイネさんは、ただの意地悪な人というわけではないようだ。

「恐れ入ります。ただ、私はここにいる以上一介の侍女と変わりありませんので」

「だとしても……駄目」

不思議に思った私は、しばしの間ハイネさんと見つめ合う。

彼女の薄い灰色の瞳はどこまでも真摯だったので、私は知らず知らずの内に頷いていた。

「……心得ておきま……！」

そう答えようとしたとき、「ぐをつ」という奇声が後ろで上がったかと思うと、頭に衝撃が走り、背後で何かが倒れる音がした。

37・怒りんぼ

状況を理解すべく、私は五感をフル活用した。

まず、私の足元から、「あー……」という呻き声が聞こえる。加えて、ぽた、ぽた、と何かが地を脆弱に打つ音もある。

それからとても寒い。全身が冷たくて鳥肌が立つ。

衝撃を受けた後頭部はまだ鈍く余韻が残っており、ぐおんぐおんと血流が漲っているような気がする。

そして、服が肌に纏わり付く嫌な感触がある。

無色透明の水の味、水の匂い。

つまり私は全身ずぶ濡れであった。

目の前のハイネさんも、私のように余すところなく水浸しではないものの、所々服に水が染みていたり、滴っていたりしている。

彼女は何が起きているのかわからないらしく、目を剥いて呆然と立ち尽くしていた。

足元を見ると、猿もといリウが奇声を発しながら転がっている。

そして、私の周りに大きな銀の如雨露じょうろが三つ、散乱していた。

「リウ」

「御免なさい」

「謝りなさい」

「御免なさいって言ってるじゃん……」

「許さない」

「な、何て理不尽な……」

それはこちらの台詞である。

私が何をしたというのでこんな全身を刺すような冷たさに耐えねばならぬのか。

「どうして」

掠れた声で呟くように言ったのはハイネさんである。

兎に角混乱しているらしく、目だけがあっちへ行ったりこっちへ行ったりを忙しく繰り返している。この人は雰囲気に対して変事に弱いようだ。

ハイネさんの問いなのか独り言なのかよくわからない呟きに、リウは起き上がりながら答えた。

「いや、悪気はなかったんだよ。何かさっき俺が責められてるばかったからさ、二人の機嫌直そうと思って。真面目に手伝ってやるつもりで、如雨露に水汲んで来たんだよ。花の水やりでもしようってことで」

「如雨露に水汲んだだけでどうしてこうなるのよ」

「如雨露を三つ積み上げて持ってきたんだけど、そこで躓いちまって、その反動で中に入った水諸共ぶちまけちゃった。三段目の如雨露はオルカに直撃してたぜ」

「『直撃してたぜ』じゃないわよ！とっても寒いわ！風邪ひく！さつきから歯が噛み合わないし頭も痛いし！タンコブになってるわよ、これ！」

「いやーオルカの背がもつと高けりゃ、頭に直撃は避けられたと思うんだけどよ」

「うるさいわよ！大体何で如雨露を三つも持ってくるのよ！」

「二人の分も持って来てやったんだよ」

私が尚も言い募ろうとしたところで、肩を誰かに掴まれた。振り向くと、ハイネさんが寒さに震えながらも、私の顔を見据えている。

「早く帰って着替えてあったかくする。近侍が風邪をひいては駄目」そう言う彼女は私の手首を乱暴に掴み、北東館のほうへ歩いて行く。

突然のことだったので、私はつんのめって膝を打ってしまった。さっとハイネさんは顔を青ざめさせる。消え入りそうな顔で「申し訳ない」と呟いた。

私は大丈夫、と答え、スカートを捲って打ちどころを確認した。頭と同じように鈍い痛みが両膝に広がる。しかし間にスカートを挟んでいたのがタイツは擦り向けていなかった。痣にはなっていないそうだが、出血等はないだろう。

背後で鐘がなるような音が聞こえたので振り向くと、リウが肩を落として如雨露を片付けていた。

再び目を前に戻せば、私の汚れたエプロンドレスを見つめたハイネさんが、同じく肩を落としている。

反省モードな二人に挟まれて、私の怒りもすっかりどこかに霧散してしまった。

二人がこの雰囲気で来るとなると、この場を仕切らねばならぬのは私の役目のようだ。

私は普段仕切られるほうなので、このような役回りは好きではないのだが、ずっとうして三人で立ち尽くしているわけにもいい。

嫌な悪寒がさつきから全身を駆け巡っており、いい加減本当に風邪をひいてしまいそうだったのだ。

「ほら、屋敷へ帰るのでしょう」

私はハインさんの手を取った。そのときの私の心持ちとしては、実に慈愛と慰めに満ちていたような気がする。その一瞬だけは。

何故一瞬しか続かなかったかというところ、彼女の顔がびくりと引き攣り、瞬時に自分の手を取り上げてしまったからだ。

そして険悪な目つきで私を睨んだ。

「触らないで」

私は脱力した。

何なのこの子。ツンデレなの。デレツンなの。はつきりしろ。

リウはリウでいつの間にか勝手に立ち直っているらしく、鼻歌交じりに「さっさと行こうぜー」などとのたまっている。

えーと。何だろう、この気持ち。

何だろうこのやり場のない気持ち。

コノヤリバノナイイカリ。

「もう知らない！」

両手を握り締めて言い放つと、私は唇を噛んで北東館のほうへ歩き出した。

背後で聞こえる、「何が『知らない』なんだ？」「知らない」というやり取りが、余計に私の心中をかき乱す。

私は蹴るようにして、北東館へ続く階段を上った。

二人の言葉を何度も何度も呼び起こしては、怒りを募らせていく。

「何が『知らない』なんだ？」

「知らない」

ですってよ！

何なの！全く！ふざけんな！何が知らないって……！知らないって。知らないって……。

私の歩みは自然と止まっていた。

そうして今しがたの自分の行動を思い返し耳まで赤くなるのと同じ時に、絶望的な気分になった。

呆然とした私は、暫くの間階段の中腹に立ち尽くしていた。

38・カノン

館の敷居を跨いだ途端、早速不機嫌な声は上から降って来た。

「遅い」

私は敢えて声の主を見ようとはしなかった。

その静かでぶっきらぼうな響きは、決して本気で怒っているふうではなかったが、今は彼のことが怖かった。

彼の透明な視線は、何も見えていないようで心の中も何もかも見えているかのような錯覚を覚えさせる。こういう落ち着かない感情を抱いているときにその瞳に射抜かれるというのは、酷く億劫なものがある。

「申し訳ありません。不可抗力がありました」

よって俯いて言った私だったが、その心配は杞憂だった。

「何をそんなに戸惑っている」

結局ひとたび口を開けば、私の心中など彼にとっては明けて透けであるらしい。

「ですから、不可抗力がありました」

私は混乱する気持ちを努めて抑え、事務的な口調を装った。

そして己の靴を見つめて階段を上っていく。

階上からは足音が聞こえる。シゼル様が私のほうへ移動してきているようだ。

「震えているようだ、怯えているのか？……いや、水の匂いがするな。濡れたのか。寒いだろう」

私は口を小さく開けて答えようとして、答えられなかったので閉じた。

彼の言葉は全て正解だった。

私は震えている。濡れている。寒い。そして、怯えている。

しかし、少なくともこの怯えを露呈してしまうと厄介なことになる。

だから他の答えを言おうとしたのだが、恐らく私が次に何を言おうと、彼はその一言で全てを見抜くような気がして、何も言えなかった。

「オルカ？」

気遣うような、探るような声に、私の心はぐるぐるすると掻き回され続ける。

感情で、或いは本能で動けば、私はその声に寄りかかって行くことだろう。でもそれでは駄目だ、身を任せたら駄目だ、と理性が警告を発する。悔しさと、寂しさと、不安が飛来する。

それは確かに、彼に対する、彼等に対する、明確な恐怖であった。

ふと気がつくと、目の前に黒い足と革靴がある。いつの間にかシゼル様が目の前まで来ていた。

今彼の虚ろな目は、私の何もかもを見定めようと睥睨しているのだと思った。

彼は私の一段上まで降りて来て身を近付ける。

酷く温かい手が髪を伝って頬に添えられた。無意識の内に肩が上
がった。

私が凍えているせい、彼のことを意識し出したせいかはわからないが、その温もりは最初感じた死人のような、人間ではない何かのような感覚ではない。息をしている、一人の男の人の手であった。

「冷たい」

彼が囁くように笑った。

何がおかしいのだろう。

対する私は泣きなくなつた。酷く惨めな気分だつた。

「一先ず湯を沸かそう。風呂の準備が整うまで、あなたは自室で待機している」

シゼル様はそう言い残して、私の横を通り過ぎて階下に降りて行った。

彼の気配が消えたのを確認して、私は長い息を吐く。その吐息には、知らず知らずの内に呻きが混じっていた。

ふとした瞬間、胸の痛みと居た堪れなさを伴って心の中に飛来する記憶がある。

後悔するようなことはそれなりにしてきたし、後悔せずともあ

自分は馬鹿だなあと思うような行動は山ほどしてきた。

しかしその中でもこの出来事は群を抜いて私を痛めつけるものであり、私は飽きる程にこの光景を脳裏に刻みつけていた。自戒と自責の念を込めて。

それは我が双子の妹、カノン・ユーデイスに関することであり、三年と少し前に遡る。

カノンは私とそっくりの容姿容貌を持つ。

違うのは髪の毛の長さや目の色くらいなものである。二人とも髪の毛の色は藍色で癖っ毛なのだが、私はいつも肩辺りで切っているのに対し、カノンは下ろせば腰くらいまでの長さがある。彼女はお洒落好きなので、いつも色々な纏め方や編み方を楽しんでいた。目は私が赤紫で、カノンは青紫色をしていた。

前述の通り我々の性格は全く違ったのであるが、それでも自嘲などでなくとも私は自信を持ってはつきりこう言えた。

彼女は私の片割れである、と。

カノンは共に生まれ共に育ち共に時を過ごしてきた、かけがえのない妹であった。

私としては、家族という特別な間柄の中でもさらに特別な位置に彼女を置いていたのだらうと思う。

まして私はその時期、学生生活に終止符を打った後だった。

私にとって一部の学友は、家族に次いで心を許せる人種であったのだが、その希少な仲間とも滅多に会うことはできなくなった。

そうすると私の甘え対象は自然と身内の者に限られてくるわけであり、私はどうやらいつになくカノンにも依存していたらしいので

ある。

そんな時期のある夜、我が愛しき片割れは、やけに高揚した顔でデートから帰って来た。

そして、食卓につくや否や、外出中の兄を除くユーデイス家の面々にこう宣言したのである。

「今日、彼から正式に結婚を申し込まれましたの。わたくしついに、ウルグ家にお嫁に行くことになりましたわ」

そう言ってカノンは頬を染めて微笑んだ。

父と母は特に驚くこともなく、「それはめでたいことだ」「良かったですわねえ」などと祝福の言葉をさらりと述べていたので、元々知っていたのだと思う。基本的に貴族同士の結婚は、第一に親の承諾が重要になってくるので、父のほうに先に申し込みが来ていたことは想像するに難くない。

兄にも事情が行き渡っていたのかどうかは不明だが、少なくとも現時点では私のみ、完全な置いてけぼりを食らっていた。

勿論カノンが私にも視線を寄越してきたときには、笑顔で「おめでとう」と言っておいた。きちんと笑顔で言えていたと思う。

しかし内心は穏やかではなく、かといって大いに混乱を来しているわけでもなかった。数滴の雨粒が水面に波紋を描くかのようなさざめきが、心の底辺にて起きているような感覚だった。

いずれこうなることは容易に予測できたし、理解もできていた。生まれ持った家族だからこそ、それをそのままの形で維持していくことは難しい。それに、維持していくことは自然の理に反する。父と母は対になったので二人という括りが帰結先であるが、私と

兄と妹の帰結先は恐らく異なる。異なることが普通だし、異なることを両親も望んでいる。

だから私も、いつかは皆別々の道を辿るのであろうと、未練たらずにはあるもののそれなりの覚悟は決めておいたつもりだった。

しかし当のカノンが己の道を決した日というのは、あまりにも突然に、そして呆気なく来てしまった。つまり肩透かしを食らったような、そんな気分だったのだ。

だからこそ私は、笑顔で彼女を祝福できたのである。

そのときの私は些か拍子抜けしていた。いざその日が来てしまえば何だこんなものなのか、とも思った。

けれども心の底で起きているさざめきは止まらなかったし、家族との談笑から自分はどこか距離を置いているようであったし、何か他のことを考えることもできなかった。

空虚であった。

つまりそのときの私の状態は、単に事態を未だ飲み込めていないに過ぎなかったようだ。

そのことがわかったのは、カノンが婚約してから数日経ったときのことである。

39・片割れ

凍えた心もお湯で溶かせたらいいのに。

そう願って、私は鼻先までも水面下に沈めた。

その中でぶくぶくと気泡を吐き切ると、騒ぐ頭と胸が少しは落ち着く気がした。

今私がいるのは、自室に備え付けられた小さなバスルームである。傾いた秋の日差しが、クリーム色の壁や浴槽、水色のタイルの彩度を上げている。普段陽の出ている内に湯浴みをする習慣のない私は、酷く奇妙な気分になった。

バスタブに浸かっている分には体の震えも収まるが、それと反比例するように、今度は頭がぼーっとしてくる。これは本当に風邪を引いたのかもしれない。

しかしそれならそれで好都合だと、私は霞みがかった意識に身を委ねようとした。そうすると今度は決まって考えたくないことを考えてしまう。

先程湯の準備が整ったとニイに告げられたとき、ついでにこんなことを言われた。

「大事にされてるねえ、オルカ！きひひ！」

そのとき否定しようとして否定できなかったことが、私の心に薄い影を落としていた。

何のことかとか、そんなことは勿論聞けなかった。私とて、ここまで来て彼女の言葉の意味を悟れぬ程唯我独尊ではない。

私は近侍にあるまじき多くの自由を許されている。近侍にあるまじき言動を容赦されている。彼と一緒に食事をし、一緒にお茶を楽しんでいる。反抗しても失敗しても本気で怒られたことはないし、無茶な我が儘も聞いてくれた。バスルーム付きの客間を使わせてもらっているというのは、主人の部屋からの距離を考えると説明がつくにしても、近侍一人のために昼間から湯を沸かすだなんて、聞いたこともない。

明らかに私は大事にされていた。

そして私は無意識の内に、彼の厚意に、思う存分甘えていたのだ。

先程私はリウとハイネさんに、「もう知らない！」と勝手に怒り、勝手に背を向けた。実に幼稚な行動ではなかるうか。自分にとって何が不快だったのか相手に知らせることもなく、ただ自分の感情を伝えるだけ伝えて、あとはあんたらが察しなさい気遣いなさいと言わんばかりに立ち去ったのである。

こんな態度ができたのは、私が無意識の内に彼等の器の広さに期待をかけていたからで、つまり私はそこに付け込んだのだ。これは明確な甘えの表明である。

それに気付いたとき、芋づる式に自分のシゼル様に対する大いなる甘えも自覚させられた。

私は彼のことが好きである。彼が許す限りは傍にいたいと思っている。

しかし私の彼に対する姿勢は、あくまで私が与える側であるべきであり、間違っても私が彼に依存してしまうようでは駄目なのだ。でなければ私は、彼の容赦を得られなくなったとき、またあの苦痛を味わうことになってしまうし、彼のことを傷つけてしまうかもしれない。それだけは何としても避けたかった。

飛来するのは、あの記憶だ。

その日私はケラスムスの市営図書館に出向いており、帰ってきたのは四時過ぎくらいだったように思う。

屋敷の扉を潜ると直ぐに一人の侍女がやって来て、「カノンお嬢様が自室にてお待ちですよ」と言われた。

不思議に思いつつ妹の部屋を訪れると、彼女はお茶の準備をして待っていた。

テーブルに載るのは彼女愛用のベージュ色の茶器と、スコーンや色とりどりのケーキ、そしてマカロンだ。

「お帰りなさいオルカ。見て、ズイーガル亭のお菓子よ。あなた好きだったでしょう？」

「本当！どうしたの？買って来たの？」

「彼が贈ってくれたの」

そう言われたとき、私の心の底で、再びあの小さなさざめきが生まれた。だけれどもその波紋は、彼女の次の言葉で一先ず治まる。

「多分彼、わたくしがしたあなたの話を覚えてくれてたのね」

「……どんな話をしたっていうのよ」

「あなたが、家にあったズイーガル亭のお菓子を全部食べたっていう話よ」

「変なこと言わないでよ」

「それを願うのであれば、変な言動をしないことね」

口達者な彼女に溜め息を吐きつつ、内心で私は少し嬉しかった。彼女が彼女の大切な人に包み隠さず私の話をしている、ということが私の心を和ませた。

そうして私達は二人きりのお茶会を始めた。

しかしカノンの口にする話題といたら、まあ仕方のないことだとは思うけれど、惚気話ばかりである。もしかしてこれを聞かせたいがためにお茶の準備をしたのでは、と思わなくもない。けれどそこは妹想いの姉を演じつつ、私は穏やかに聞いていたのであるが、流石に延々と「彼がね」「彼がね」と連呼されると、私もいい加減うんざりしてきた。折角先程治まったさざめきが、また再び舞い戻る。それは大人しく彼女の話を聞いていればいる程、段々大きくなる気がして、私は自分の胸の内の黒い感情に少し恐怖した。

それで何とか気を紛らわせようと、私は彼女の言葉を遮って、思いつく言葉を口にしたのである。

「このケーキ、綺麗ね。上に載った木苺が宝石のようだね」

「ふふ。オルカは本当に光り物が好きよね。ああそうだ、わたくしがいただいた婚約指輪もとても素敵なのよ」

気を紛らわせるどころか、深い墓穴を掘ってしまったようである。しかしここでまた違う話を持つてくるのは不自然過ぎる気がして、私は仕方なく彼女の話に乗ってやることにした。

「本当？ねえ、少し見せてくれない？」

そう言っていると、カノンは嬉しそうに破顔した。

「よろしくてよ」

彼女は立ち上がるとドレスサーの引き出しを開け、そこから白地に金の装飾がなされた小箱を取り出してきた。

大事そうにそれを両手で持って来て、私に差し出す。私もつられて両手で受け取った。

開けると、群青色の別珍の中に、白金の指輪が埋まっている。大粒の青紫色の宝石をいただいており、その周りにはレースのように繊細な細工が施されている。

私は素直に感嘆した。

「綺麗」

「でしょう?」

「この石、あなたの瞳の色のようね」

カノンは頬を染めて喜んだ。

「そうなの。それを意識して選んでくれたのですって。ムワ・ドナで採れるサファイアらしいわ。付けてみてもいいわよ」

「それは流石にできないわ」と苦笑しつつ、私は彼女の言葉に甘えて、ハンカチで包むようにして、指輪を丁寧に箱から取り出してみた。

その煌めく石と、微笑む彼女の瞳を見比べて、参ったなあ、と独りごちる。

今までずっと私は残される自分のことばかりに目を向けて、当のカノンとそのお相手の関係についてはあまり考えてこなかった。しかしそうであっても、彼女が幸せであること、大切にされているこ

とは嫌でもわかるし、彼女のお相手が温厚で紳士的な人であることは知っているのだ。

その上こんな、今までずっと傍にいた私でさえ初めて見るような熱に浮かされたような微笑みを溢されてしまうと、私とて心から祝福してやりたいと、そんな気分になってしまうものなのであった。

だから私も、もう認めてあげようと思って、気持ち良く彼女を送り出してあげようと思って、己のその意思を鼓舞するための最後の問いを彼女に投げた。

「お嫁に行っても、こうして時々、私とお茶してくれる？」

そう聞くと、何故か彼女は口をあけて呆気にとられた顔をした。それは数秒のことだったのだが、その後今度は目を逸らして困惑しているようだった。

私、何か変なこと言ったかしら。

心配になり出した矢先に、カノンは顔に苦笑を浮かべた。そして何気ないふう言葉を発した。

「どうして？」

そう言われたとき、体から力が抜け落ちるような感覚に襲われた。当然のように肯定されると思っていた。そうでなくても、照れ臭そうにはぐらかすのかと思っていた。それがどちらでもなく、ただ、私の問いの理由を逆に問われた。

『どうして？』って。つまりカノンにとって私は、これから先、何となく時々お茶をする程度の存在にも及ばなかったってこと？

カラン、という小さくて澄んだ音が足元から響いてきた。床を見

やると、カノンの婚約指輪が申し訳なさそうに転がっていた。

そのときの行為の言い訳としては、「魔が差した」などという陳腐なものくらいしか思いつかない。

私は咄嗟にそれを踏みつけたのだ。硬い感触が靴底から伝わってきたが、痛みも気にせず圧力を加える。指輪は砕けはしなかったものの、形を大きく歪ませ、当然宝石には傷が入った。

それから私は慌てた振りをしてみせた。

「う、ごめんなさい！私ったらあなたの大事なものを、」

そう言いかけて、カノンのほうを見たとき、私の言葉は途切れた。彼女の視線は、転がり変形した指輪には注がれていなかった。ただ真っ白な顔に澄んだ表情を湛えて、ひたすらに私を見つめていたのだ。そのときの情景は、今でも鮮明に思い出せる。

しばし息を詰めて見つめ合つと、ふいにカノンは顔をくしゃりと歪めた。そして乱暴な仕草で立ち上がると、テーブルを回り込んで私の傍に駆け寄り。

私の首に抱きついて、泣いたのだ。

完全に虚を突かれた私は彼女のその行動に対してどうすることもなく、ただ手を垂らして彼女の息遣いに耳を澄ましていた。

どのくらいの時間そうしていたのかわからないが、私にとっては酷く長かったように感じる。

暫くの間、カノンの嗚咽だけが静かな部屋に響いていた。

やがてそれも収まってくると、彼女は私に向けて謝罪の言葉を囁くのだった。

「ごめんなさい。ごめんなさい、オルカ」

私は困惑して、同時に苦い罪悪感が胸一杯に広がる。

「どうして……謝るのは私のほうだわ……」

「違うわ」と言つて、カノンは私の肩に顔を埋めた。

「わたくし、実を言うと、努めて考えないようにしてきたの。置き去りにするあなたのこと。でも、結局考えたとしてもどうしようもなかったのかもしれないけれど。酷いことをしたわ、わたくし」

それから彼女はこう付け加えた。

「あなたったら馬鹿みたいに、寂しがり屋で我が侘で甘えん坊でしよう？」

彼女が真つ赤な目で私を正面から見据えると、私のほうもぼろぼろと涙が零れてくるのであった。

そうして私は、自分の幼稚な思考と言動に、激しく後悔する。恥ずかしくて情けなくてどうしようもなく惨めで。こんなにも純粹で真つ直ぐな、青紫の瞳と見つめ合う、ということが苦しかった。しかし目を逸らせばそれこそ失礼なことだと思つて、私はばやけた視界であっても、努めて顔を背けることはしなかった。

そうして初めて、自然と、無意識に、全くの正直な気持ちの内に、この言葉を転がせた。

「カノン、おめでとう。幸せになってね」

涙でぐしゃぐしゃで汚い顔だったとは思っけれど、私はそのとき心から笑えたのだと思う。

そうするとカノンは反対に眉をきゅっと寄せて、潤んだ眼を三角まなこにして、震える声で応じた。

「ありがとう……。オルカも、どうか、幸せに」

そんなことを言われてしまうと、折角今になって心から笑えたというのに、私はまたしても唇を引き結ぶことになってしまう。必死に嗚咽を堪えたしのび。

私は耐え切れず、今度は自分のほうからカノンを抱き締めた。彼女のほうも私の背に手を回し、私達はぎううとひとつになる。気のせいかもしれないけれど、そのときはお互いの心音までが重なったような、そんな錯覚を覚えた。

そうして愛しい片割れを抱き締めていると、強烈な寂しさに襲われて、いよいよ離れがたくなってきてしまう。先程の黒い感情が再び顔を覗かせた気がして、怖くなった私はひと思いに彼女の体を引き剥がしたのだった。

そうして、カノンはユーディス家を去って行った。

40・甘えん坊

瞼を開けると、白い天井が目映る。ぼやけた視界を正そうとして目を擦ると同時に、室内にぱたん、と物音が響いた。

そちらに目を向けると、シゼル様が恐らく点字で書かれたであろう書物を脇に置いて、ソファから立ち上がるのが見えた。

「起きたか」と無愛想に呟きつつ、杖を片手にこちらに近付いて来る。彼は自室だと杖がなくても行動できるのだが、流石に私の部屋となると把握しておらず、それを必要とするらしかった。

「気分はどうだ」

「きぶん？」

オウムのように問い返した。きぶん、きぶん、と頭の中で繰り返し、彼の言葉の意味を呑み込む。

「悪くはないです」

シゼル様は頷くと勉強机の木椅子を私の横たわるベッド脇まで引いて来て、そこに腰かけた。そしておもむろに手を伸ばしてきて、私の顔面を撫でていき、最終的に前髪を掻き分け、額で止まった。

「まだ少し熱がある」

「そうですね」

そう言われてやっと私は昨日のことを思い出した。

リウに水をかけられ、湯浴みをしたのだが震えが止まらず、頭がぼーっとしてきて、次第にぎんぎんとこめかみ辺りが軋み始めたのだ。つまり私は風邪をひいたらしい。

しかしシゼル様や北東館の皆に甘えるのはもうやめようと決意した後だったので、私は勤務に戻ろうとした。すると主人に「命令だ。さっさと着替えて寝ろ」などと職権を乱用され、今に至る、と。

しかし疑問が残る。

「何故シゼル様がここに？」

「あなたがここにいるから」

「いつも一緒にいるわけではないでしょうに」

「今は勤務時間内だ」

「え」

私は跳ね起きながら問うた。

「今何時ですか」

シゼル様は腕時計の文字盤に触れる。

「九時半だ」

「ひいいますせん今から準備しますので出てってください！」

「構わん。まだ本調子でないだろう。寝ている」

「そういうわけには……」と私が渋っていると、彼はやや無然とした。

「命令だ。寝ろ」

そんなふうに言われてしまうと、私には成す術がない。

私はシゼル様を密かに睨みつつ、再びベッドの中に潜り込んだ。

「昨日からやけに職務に忠実だな」

無機質なその声に、私はぎくりと身を強張らせる。

「そんなことないです。元からこうです」

「館の者に注意でもされたか」

「そういうわけでは……ああ、注意は確かにされましたけれども……それとこれとは関係のないことです」

「ということは、やはり何か心境の変化でも？」

私は黙り込む。

「何があった？」

「何のことですか」

「昨日のことだ」

「リウに水をかけられました」

「それは聞いた。何故かいきなり怒り出したそうではないか」

私は心の中で舌打ちをした。どちらだかは知らないが、何でもかんでも洗いざらい吐きやがって。

「頭から水をかけられたのだから、怒るのも仕方のないことです」
「そのときのことではない。帰る時になって、『もう知らない』などと言って憤ったそうではないか。それから一人でさっさと帰って来たのだろう」

私は恥ずかしさともどかしさに耐えられなくなって、寝返りを打ちシゼル様に背を向けた。

「シゼル様、嫌い」

皆まで言い終わってから、直後しまったと戦慄する。またしても彼への甘えを露呈してしまった。

私はもうどうすれば良いのかわからなくなって、ぎゅっと目を閉じ、ベッドの中で身を丸めた。

シゼル様の微かな笑いが漏れ聞こえた。

それから、髪を掻き分けて彼の指が頭を撫でる。私が僅かに体を強張らせ、その後気を許して力を抜いた直後。

「いだだだだ」

「後頭部に見事な瘤ができています」

彼はあろうことが如雨露の襲撃による患部をぐりぐりと押しつつ、感慨深げに呟いた。

「何興味深そうに言ってるのですかやめて押さないで痛いから」

私が訴えると、やっと彼は暴虐の手を止めた。再び頭を撫でてくれるが、もう絶対気を許すものか。

「それで、何があった」

「もう良いのです、そのことは。言う程面白いことはありません」
「言え」

私は悔しくて、枕に顔を埋めた。

「……命令なさるのですか」

頭を撫でるシゼル様の手が止まった。

返事が来ないので、私は目だけ動かして彼の顔を窺う。シゼル様は僅かに首を捻っているようだった。

「あなたは何か勘違いしているようだが、私は王族の権限や権力を持たない。私が仕事以外のことに関して命令したとして、どこまで従うかはあなたの判断による。何から何まで従属する義務をあなたは持たない」

「じゃああなたの問いにはお答えいたしません」

私はぷいっとそっぽを向いた。

「よろしい。では私の問いに答えない場合、この瘤を押し続ける」

私はすぐさま起き上がってシゼル様の手を払おうとしたのだが、彼の長い五指はがっちり私の頭を押さえ付けているのでそれができない。

私は叫んだ。

「脅迫ではないですか!」

彼は唇の片端を吊り上げる。

「脅迫罪で訴えるなら好きにしる。ただ、仮にこの後あなたが訴えた場合それが果たして有効になるかどうか、それらも考えた上で判断しろ。因みに私は王族の権限や権力を持たないが、あなたよりは王家の寵愛を受けているだろうな。何せ息子だ」

「えちよつとそれでは結論は『逆らえない』っていうことになるではないですか。さっきの勘違い発言は何の意味があるのですか」

「ヒントだ。よく考えろということだ」

一瞬、シゼル様の笑みが硬くなったが、すぐまた元に戻った。

「さあどうする？十秒以内に答えろ」

「うとうわかりましたってば。答えます」

「嘘を吐いた場合にも瘤は押す」

「……嘘だつてどう見分けるのですか」

「勘だ」

恐らく嘘が通じないことを悟った私は、観念して自分の心情を吐露することにした。間違ってもこれが嘘だと判断されぬことを願いつつ。

知らず知らずの内にシゼル様や北東館の皆に甘えていた、と気付かされたこと。カノンとの間で昔起きたこと。それを繰り返すのが怖くて、心的な意味で一定間の距離を保とうとした、ということ。

話し始めるとシゼル様の手が頭から離れた。私の話は真実と受け止められたようで何よりだ。

彼は腕と足を組んで、何事か考えているふうであった。

私は自分の隅から隅までを暴露したような気分になって、酷い羞恥心を味わう。何せこんな黒歴史を他人に明かしたのは初めてである。これで笑い飛ばしてもしたら殴ってやる。いやしかし、寧ろ笑い飛ばしてくれたほうが気楽かもしれぬ。

そんなことを悶々と考えている最中、シゼル様の小さな呟きが室内に響いた。

「成る程な」

彼の発する空気は柔らかく、馬鹿にするわけでも責めるわけでも

ないようだったので、私は少し安心した。彼は私の言葉を、静かに受け止めてくれているような気がしたのだ。

「あなたは筋金入りの臆病者だ」

そう言つて彼は薄く笑つた。その時の彼の虚ろな瞳が、煌々と輝いた気がした。

私は彼の優しさを湛えた顔にぼんやりと見惚れた。

「まあ確かに夫婦でもない限り、遅かれ早かれ別れは来るな」

「でしよう？どうして皆それを知りながら、あんなに器用に人付き合いができるのでしょう。別れの痛みを感じないのでしうか」

「あなた程敏感ではないのだらう。それと、あなた程依存しない」

『依存』という言葉に、私の顔が熱くなった。彼は見えない目で、よく見ている。

「シゼル様は？人に気を許すということ、怖くはないですか」

彼は臉を下ろして「どうだかな」と言つた。

「私の持つそういった感情を恐怖と呼ぶのならば、『怖い』といった表現もあながち間違つてはいないのかもしれない。しかし私のこれはもつと醜く性質が悪いと思う。例えばあなたが『皆』と呼ぶところの大多数の人間は、あなた程臆病でないためにあなたより交友の範囲を広げられる。その上に臆病なあなたがいて、彼等より小さな交友の輪を広げているとするならば、その上にいるのが私だ」

私は不思議に思つてシゼル様を見つめた。

「シゼル様は私よりもつと臆病つてことですか？」

「可愛い言葉で表現するのならそう言えるかもしれない。私はあなたよりもさらに小さな交友しか持たず、交友の広さに反比例して執着の強さが増すのであれば、私はあなたの上に行く、ということだ」

もしかして彼は、私に何とか共感しようと頑張ってくれているのだろうか。

そう思つて私は嬉しくなりかけたのだが、次に目を開けたときの彼は、そんな優しい顔をしてはいなかった。

そのときの彼の顔には、凄絶な無表情があつた。

「あなたは、そうやつて離れて行く者達を、心を痛めて見送るのだろうか？それしかできないのだろうか？私はそれとは違う。多分あらゆる手を尽くして引き止める。どんな汚い手段だったとしても、確実に逃げ道を塞いで手元に置く」

彼はそう言つて、ふつと表情を和らげた。

「この欲求と感情を『恐怖』だとか『臆病』だとか言つのであれば、あなたの気持ちも理解できなくはない」

私はしばらく絶句して、思わず聞き返した。

「それはシゼル様の、本当の気持ち？」

「恐らく」と言つて彼は頷く。

信じ難い話であつた。何せシゼル様と執着心が結び付かない。そういった強くて複雑な感情とは無縁に生きているのかと思つていた。しかしだからこそ一点執着型になるのかと考えれば、納得できな

くもない。

一体どんなときにその感情を見せるのだろうと思って、私は少し切ない気持ちになってしまった。

彼の執着の先に、私がいれば良いのに。

「今までに、そうした気持ちを抱いて、引き止めたことがあるのですか？」

「ある。一度だけな」

強い表情で断言した彼は、弱く笑って付け足した。

「どうかあなたは、これからそうならないよう願っていてくれ」

私はどう応じれば良いのかわからず、彼の言葉に沈黙を返した。室内に静寂が訪れる。

シゼル様は自分のことを話したつもりだろうけれど、こちらは全く意味が理解できていない。私のほうばかり醜態を晒して、フェアじゃない。

煮え切らない気持ちで私は瞼を閉じた。

しばらくしてから、シゼル様の小さな声が響いた。

「オルカ？」

拗ねた私は返事をしなかった。

「寝たのか」

無視する。

彼は息を漏らすように笑った。

多分彼は、私の寝た振りに気付いているのだろうと思った。それを踏まえた上で発された言葉だと踏んだ私は、次の声にも応じなかった。

「気休めにもならないかもしれないが。オルカ、あなたから離れない限り、私はあなたを離れはしないし、離しはしない。私はここに居続けるから、甘えたいなら甘えれば良い」

その優しい響きを心の底辺に落とせば、どんな波紋も静まる気がした。

41・ハイン

ああ、何て、虚しい。

過去において私は絶えずそう思っていた。

王子という立場、定められた将来、望めば与えられる物質、淡々と確実に過ぎていく毎日。

悲嘆したりはしなかった。憤りもしなかった。平安があったわけでもなく、愉快でもなかった。

ただただ空虚だと思った。

そうして日々心の穴が開くのを防ぐために私がしたこと、それは、世界に関して眺める以上のことを求めないというものであった。

当時私の目には、あらゆる景色が美しく見えたものである。

朝靄、厨房の喧騒、静謐の回廊、白い空、鴉、一輪のガーベラ、食卓の海老、硝子戸を拭く侍女、蔦、天井の模様、紅茶の琥珀、夕暮れ、影になる鐘、銀の月、踊る男女、暗がりの燭台、窓外の星。それらは、内容、本質、意味を見出そうとしない限り、とても美しいものであった。

よって私は物事の内側に興味を持たなかった。それらに価値を見出すことに関し、早急に諦めをつけていた。

意識せずとも、中を見てしまったがために失望に至るということは、何度も経験している。その経験が、私の心の穴を広げている。そう考えた私は、世界に関して、視界に収め、キャンバスに収める以上のことを求めないことにしたのだ。

しかし父の生活を見るにつけて私は、そんなさやかな処世術さえ、いずれ通用しなくなることを悟った。

理由は単純明快である。そのような安寧の時間は、王という職業柄滅多に許されなくなるのだ。

理解した私は悲しむわけでもなく、ただ再び、ああやはり虚しいものだ、と妙に腑に落ちた。

それで、せめてもの慰めとして、己が時間と制約に雁字搦めにされる前にひとつ、自分が最高位に美しいと思う、自分にしか描けないようなものを一枚に収めたいと思った。忙しさと虚しさに圧倒されて心の穴がどうしようもなく大きくなってしまったとき、それを見れば少しは己を和ませることができるような、そんなものが描ければ良いと思った。

そうして私は、残された時間を出来得る限りキャンバスに向かうために使用した。

簡潔に言うのなら、私の目的は達成された。

しかし同時におよそ全てを失った私が思うことは、やはりただひとつであった。

ああ、何て、虚しい。

北東館で働き出してからひと月ほど経ったある日の午後、私は庭園に下る石段を歩いていて。

今日は空が良く晴れていて、見上げると小さな綿雲がぽかんと置いてけぼりにされているだけだった。

階段脇に生えた木々が、私の視界を時々暗くするものの、爽やかな天気であつた。

エプロンドレスだけでは肌寒いので、薄茶色のカーディガンを羽織つて外に出た。風は吹いておらず、日差しは少し強いものの、空気がそのものがぴんと冷えている。

私は寒さに弱く、秋という季節はあまり好きではない。冬はもっと好きではない。

確実に終わりに近付いて行く生命の営みを見ると、何だかやたらと寂しくなってしまうのである。

つい家族のことに向いてしまう意識をうやむやにするため、私は夏の童謡を口ずさむ。

紫陽花を包む甘い雨のことや、水面に映る入道雲のこと、そして
蝸ひぐちの喚き声と共に夏が終わること。

そんなことを口ずさんでいたら逆に憂鬱になってしまった。

ああ、終わっちゃったよ夏が。あああ。

郷愁と共に鈍い溜め息を吐き出すと、背後から掠れた女声がかかった。

「何で夏の歌なの。何で溜め息なの」

肩を上げて振り向くと、ハイネさんがつまらなさそうな顔をして立っていた。

自分の上手くもない歌を聞かれたことに、私は顔を熱くする。

「じ、御機嫌ようハイネさん。……いつから後ろに？」

「ちょっと前。用具を取りに一旦帰って戻って来たら、暢気にふらついているあんたが見えた。くそ遅いから意識せずとも追い付いた」

傷つくも呆れるも通り越して感心するくらいには、私も彼女の毒舌ぶりに耐性が付いてきた。どうやらこの毒舌こそがハイネさんのスタンダードらしく、その發揮先は何も私だけに限ったことではない。唯一シゼル様には敬語なのだといつかリウが言っていたが、私は彼女がシゼル様と話しているのを見たことはなかった。

「今は秋」

大真面目な顔で断言する彼女の台詞は、一瞬意味がわからなかったが、前後関係を考えてすぐに理解した。

「秋、好きではないのです」

「どうして？ 私は好き。秋は実りの季節。南天とか、紫式部とか、柿とか。可愛くて好き」

そう言う彼女を、私は思わずぎょつとして見つめてしまった。
何この人可愛いんですけど。

まさか彼女にこんな一面があるとは思わなかった。

「何、その顔。私変なこと言った？」

灰色の目を眇めるハイネさんに、私は慌てて首を横に振った。

「いえ、違つのです。ハイネさん、可愛いこと言つのだなっと思つて」

「馬鹿にしてるの」

「め、滅相もございません」

前言撤回。先の可愛い言葉を補って余りある程ハイネさんの態度は可愛くない。

「確かに実りの秋という点では、美味しいものが食べられるので万々歳ですね。でも、私は秋になると何だか寂しくなってしまうのですよ」

「そういう人、偶にいる。だから最近シゼル様にべったりなの」

私は一瞬息を詰まらせた。

「き、近侍ですし……」

「前は良く他の部署手伝ってた。近侍の癖に。それが最近無い」

注意深くハイネさんの様子を窺う。リウが言うところによると、彼女はシゼル様のことが好きらしいのだ。

しかし今見た分には、特に嫉妬するとか怒るとかいった雰囲気は見受けられなかった。というかこの人は、あの時否定こそしなかったものの、シゼル様に関しての恋愛感情を垣間見せたことは一度もない。そもそもやはり彼女に恋という感覚が結び付かない。

結論が見えて来ないことに余り耐えることのできない私は、思いきってちよつとした挑発を試してみた。

「まあ、はい。あなたの仰る通りの現状でございます。シゼル様と一緒にいるのが、一番寂しさを紛らわせるので」

どんな言葉が返ってくるのだろう、とほんの少しびくつきながら待っていたのだが、ハイネさんの返答は酷くあっさりしていた。

「そう。それは良い傾向」

私は心の中で首を捻る。

そういえば彼女はシュルツと同じく、私が他の部署を手伝うのは反対していたのだっけ。想い人の近侍が恋敵なんてことになったら、一時でも引き離したいと思うものじゃなかるうか。

それともハイネさんは、私の登場によりシゼル様のことをきっぱり諦めたのだろうか。だとしたら決して後味が良いものではないが、かと言って引き下がる気も毛頭ない。むしろ性格の悪い私のやり方としては、これぞチャンスと釘を刺すくらいが丁度良い。

そう思った私は上目遣いに眉尻を下げた。

「あの、私ばかりシゼル様と一緒にいてしまつてごめんなさいね。でも、私もあなたに負けるわけにはいかないのです」

そしてむんと胸を張る。ハイネさんの身長は私と余り変わらないので、劣等感を抱かずこの体勢が取れることが少し嬉しかった。

するとハイネさんは瞠目した。

「……リウの言葉本気にしてるの」

「あれ。やはり彼の話は勘違い発言でしたか」

そうは言つたものの、内心では随分と安堵する。

ハイネさんは眉を顰めた。

「私はご主人様を敬愛している」

「ということは、」

「ただそれだけ。恋愛感情は抱いていない」

ハイネさんは私を真っ直ぐに見つめた。嘘は吐いていないと、そ

の無機質な表情ですぐにわかる。

「私は彼の存在そのものが好きだから、彼が幸せであれば良いと思う。彼の幸福に必要なものの中で、私の存在は特に大きな割合を占めない。だから彼の生活に特に干渉したいとも私は思わない」

はつきりと言い放った彼女に対して、それはある意味で究極の愛なのでは、と私は思った。彼女がどこまで本気なのかはわからないが、真実なのであれば、その気持ちはどこまでも利他的なものである。

そうか。彼女は、純粹で綺麗で、狂っている。

妙に納得してしまった私は、逆にハイネさんに対して警戒心を強めた。だって私はそんなストレートな愛情を抱くことができない。私はできるなら彼の隣に身を置くことを願うし、できるなら彼の一番が私であって欲しいと願ってしまう。そんな私にとって彼女は、ある意味で最も強敵に感ぜられた。

そんな醜い思考を巡らせる私とは対照的に、ハイネさんはこんなことをぼつりと呟く。

「でもあなたは必要」

「え？」

「あなたはシゼル様の幸福に必要。その割合はとても大きい」

「な、何ですか。そんな煽てても何も出ないですよ。でも今度ズイ―ガル亭のお菓子が手に入ったらお茶会に呼んで差し上げるですよふふ」

「煽ててない。真面目な話。でも私安心した。あなたにとっても、ご主人様が必要みたいだから」

私は黙り込む。

まさかこの女と恋バナをすることになるうとは夢にも思わなかったし、リウの勘違い発言が無ければ彼女に自分の気持ちをばらすこともなかった。相手がハイネさんとなると、何故か恥ずかしいとは思わないのだが、この情報が他に漏れるのは流石の私も恥ずかしい。そこまで考えが行き着いたところで、自分が結構な爆弾発言をしていたことによりやく気付いた。

「あの……今の私の発言は忘れてください」

「何を今更。それに発言せずとも、あなたの気持ちは大概ばれ」「う、うそん……。シゼル様にも？」

ハイネさんは首を傾げた。

「さあ。私シゼル様とあまり会わない」

「そういえばそうでしたっけ……。シゼル様基本的に引き籠りですものね。と、兎に角今の話は他言無用ですよ」

「保証はできない。私の主人はシゼル様で、私が幸福を願うのもシゼル様。あんたじゃない」

溜め息を吐くと同時に、何がここまで彼女をシゼル様第一に動かすのだろっ、と不思議に思った。彼に恩でもあるのだろっか。

「それで、寂しがってべったりだったあんたが、何で今日は此処にいるの」

「……確かにさっきは便宜上肯定しましたけれども、その表現激しく私の自尊心を傷つけることになりそうなので、やめていただけませんか」

「事実」

身も蓋もない。シゼル様への思いやりを、ちよつとは私に分けてくれ。

私は少しむくれつつ答えた。

「今日はシゼル様にファウエイムを採って来るよう仰せつかったのです。どこにあるかご存知ですか」

「あれは畑。私が採って来る」

そう言つてハイネさんは私の横を通り過ぎて石段を降りて行つたので、私もその後を追いかけた。

彼女に関して、変わった人だなあとつくづく思ったが、その変人ぶりは私にとって少し心地良かった。

鼻の奥を再び、つんと郷愁の念が刺激した。

42・労働者

北東庭園は趣味が良い。

南庭園や西庭園のような壮麗さはないものの、やたらとメルヘンチックで乙女心をくすぐる仕上がりなのだ。それはパステルカラーのベンチだったり、真ん丸に刈り込まれた木の形だったり、植えられた花のセレクトだったり、随所に表れている。

この庭はきつと、前に行くハイネさんの夢のお城なのだろうと、今ならわかった。

しかし畑に入る門を潜ろうとしたところで、その可愛らしい感性とは裏腹に、全く可愛げのない顔で彼女は私を睨んできた。

「どこまで付いて来る気？」

私は少したじろぐ。ずっと後ろを追いかけていたのが鬱陶しかったのだろうか。

「シゼル様に命令されたのが私である以上、ハイネさんだけに任せておくのも何だか申し訳なくて。付いて行っても特に役に立たないことは自覚しておりますが、場所さえわかれば、これから私も一人で採りに行けるかもしれないし、」

「違う」

ハイネさんは目を閉じて眉間に皺を寄せた。

「あなたの行動可能範囲は、北東庭園まで」
「え？」

多分今の私はかなり無防備な顔を晒していると思う。それ程に思いがけないことを言われた。

しかし考えてみれば、確かにシゼル様はハイネさんと同じことを言っていた。

立ち入り禁止区域はハイネの畑から始まるので、同じように私もそこまでなら行き来できるものと思っていた。
それに。

「シゼル様は良いのに私は駄目なのですか」

過ぎった疑問をそのまま口に出す。

そう。初めて会ったあの日、確かに彼は畑を歩いていた。

「ご主人様もあんたも駄目」

そう答えた彼女は訝しげな表情を浮かべる。

「はあ。まあそれならそれで別に良いのですが、多分ハイネさん勘違いしてますよ。だって、シゼル様前畑を歩いていらっしやいましたもの」

すると彼女の相貌から血の気が退いた。

「それ、本当？」

「本当です。何せ私とシゼル様が初めて出会ったのがこの先の畑で
のことでしたから、忘れるはずありません」

はっきりそう答えると、ハイネさんはさっと私から視線をずらした。その先にいるのは、本日ここの門番であるニイだ。

「聞いてたね」

「聞いてたよ」

ハイネさんの硬い声と、ニイのおどけたような声が交差する。

「このことは、くれぐれも内密に」

その鋭い眼力は物ともせず、ニイはへらつと笑って肩を竦めてみせた。

「んー、どうだろう。君のその言葉は、一先ず記憶にはとどめておいてあげるよ」

しばらくニイを睨んでいたハイネさんであったが、やがて諦めたように力を抜いた。そして再び視線を私に戻す。

「あんたも。ご主人様が焔にいたことは、誰にも言っちゃ駄目」

よくはわからないが、ニイの反応を見るに、ハイネさんの勘違いというわけではなかったらしい。それどころか、これは何だか只ならぬ雰囲気を感じる。

「つまり私がシゼル様と出会ったとき、彼は禁忌を犯していた、と？」

ハイネさんは小さく頷いたが、私が「どうして？」と尋ねると今度は首を横に振った。

「知らない。けれど、このことが知れ渡ってしまった場合、ご主人様が不利になるかもしれない。だから言うては駄目」

そう言った彼女の顔は、少し翳りが差しており、見ようによっては沈痛そうにも感じられる。この事実は、相当の変事だったのかもしれない。

「わかりました」と答えた私の声が震えて、風のない空気の中に消えた。

ファウエイムは直径十cm程の真紅の花である。真っ直ぐな黄緑色の茎と、細長い花びらが中心をやんわりと包むように配置されているのが特徴だ。

これはツエーヴラーク原産の花として有名らしく、ポルテツフェル領にはファウエイムのみを一面に植えた国立公園もある。

ハインさんからこの花を十輪程受け取り、私はシゼル様の部屋に帰って来た。

嗅覚はシゼル様の得意分野なので、彼は香りの研究に協力している。飲み易い薬や、王族や貴族のつける香水の開発などに多分に貢献しているらしい。

香りの材料となるものの採集に赴くことはよくあることなのだが、普段はいつも二人で散歩がてら出かけていた。彼の仕事にはかなり自主的な面があるから、そう切羽詰まって忙しいものではないのだ。しかし今日の仕事に限って締切が付いたらしく、シゼル様は悪態を吐きながら真面目に勤務していた。

そういったわけで私一人、材料収集に駆り出されたわけである。

彼の仕事部屋には書き仕事用の勉強机と、背の低い大きな大理石のテーブルがあるのだが、私が部屋に戻ったときにはどちらも書類と器材で埋まっていた。散らかっているのは机の上だけで床は驚く程に綺麗、というところから、シゼル様の几帳面さが窺える。

私は、桃色の液体の入った試験管を揺らす彼の背中に向けて、声を放った。

「ファウエイム、お持ちしました」
「そこに置け」

一切振り向かず、即座に指示が下る。その声に苛立ちが含まれていることに気付いた私は、無言で言われた通りにテーブルに花を置いた。こういうときのシゼル様には、出来る限り物申さぬが吉である。

務めを果たし終えた私は、部屋の隅で慎ましく佇み、孤軍奮闘するシゼル様を眺めていた。

シゼル様は暫くの間、試験管をくゆらせながら書類にペンを走らせていたのだが、ふいに奇襲攻撃に気付いたときのような鋭さでこちらを振り返った。しかしその顔はあらぬ方に向いている。彼の透明な視線の先を追ったが、特に変わったものは何もない。

室内に静かな、上擦った声が響いた。

「オルカ？」
「はい」

私が答えると、シゼル様は直ぐに正確にこちらを向いた。心なし

かその顔が泣きそうなものに見える。

彼は震える声で尋ねた。

「どこに行っていた」

「は？」

思わず問い返した。

これは謎かけ？挑発？意地悪？

様々な推論が脳内を巡るが、答えは得られない。

「今、どこに行っていたのか聞いた」

言い直したシゼル様は眉を顰めた。その声に、微々たるものだが怒りが混じったような気がして、私は少し身を硬くした。

「あなたに頼まれてファウエイムを採りに行っていました……」

つい非難がましい目でシゼル様を睨んでしまう。ミルキアさんには及ばないものの、シゼル様も怒るとかなり怖い存在だ。しかし私のちっぽけな虚勢が、せめてもの抵抗を強要するのである。無論見えていないことを承知しての行動なので、ちっぽけにも程がある。

しかし逆にシゼル様に睨み返された。光のない目は、常人とは違った意味で迫力があり、お腹の底が冷たくなった。

「違う。その後だ」

「その後？ずっと此処にいましたけれども」

「本当か？」

シゼル様の顔が驚きに歪む。本気で私が居なくなつたものと思つたらしい。

私は念を押すように、はっきりと述べた。

「本当です。テーブルに花を置いて、あなたの邪魔にならぬよう健気にも沈黙して此処に佇んでおりました」

「そう……か」

私の言葉を真実と受け止めてくれたのだろう。彼の声音から負の感情が消えた。同時に顔からも全ての感情が抜け落ち、純粹な無表情が残る。

その顔のまままで靴音を鳴らしてこちらに近付いて来たものだから、私は咄嗟に後ずさつた。そしてそもそも後ずさるだけの余裕が背後にないことに気付き、再び肝を冷やした。

彼は私との間に頭ひとつ分距離を置いて立ち止まると、ゆっくりと手を伸ばしてきた。彼の手は最初私の横を過ぎて壁に当たつたが、そこを這うようにして伝い、私の頭に辿り着き、するりと頬に添えられる。柔らかな温かさがくすぐたくて身をよじると、結果的に彼の手を頬と肩の間で挟むことになってしまった。すると彼の表情に穏やかさが灯つたので、私は安堵した。

いつの間にか彼のもう一方の手も伸びて来たようで、それは私の片手に触れた。その形を確かめるかのように指を絡められ、最後にはそのまま握られる。

近い。恥ずかしい。火が出そう。

私は何とか気を散らして、この場をやり過ごそうとした。

「シゼル様、集中のし過ぎで疲れているのではないですか？今まで

私の気配に気付かないなんてこと、一度もなかったでしょうに」「
「そうだな。そうかもしれない」

シゼル様は弱く笑ったので、私はいよいよ本気で心配になってきた。
た。

「少し休まれては如何です？」

「ああ。今休んでいる」

「そうでなくて、横になられたほうがよろしいかと」

「大丈夫だ」

「そんなに今日のお仕事は切羽詰まってらっしゃるのですか？」

「そうだな」

彼は曖昧な答えを返すばかりだったので、私は諦めて話題を変えた。
た。

「シゼル様。お聞きしたいことがあるのですが」

「何だ」

「私とあなたの活動範囲はこの館と庭園のみだそうで」

「……ああ」

「初めてお会いしたとき、あなたは何故畑にいたのですか？」

怖々尋ねると、彼の顔に影が差した。そして、緩く首を横に振る。

「あなたは知る必要のないことだ。今は」

私は彼の濁った瞳を強く見つめた。

「今は？」

「今は」

暫くシゼル様の顔を目前で観察していたのであるが、彼は全く表情筋を動かさなかった。

少し拗ねて、わざと溜め息を吐いてやる。

「じゃあ、許して差し上げます」

「何様のつもりだ」

シゼル様が穏やかに囁いた。

相変わらず頬が熱いのだけれど、彼のその声と長い睫毛に見惚れていたら、段々心も落ち着いてきたようだ。少なくとも、この時間がずっと続けばいいなあ、なんて柄にもないことを考えられる程度には。

私は暫くの間無言で、彼の微かな息の音を聞いていた。

43・魔性

以前王家の晩餐が行われた食堂にて、私達は毎日食事をとっていた。

シゼル様が鬱陶しがらしく、使用人が頻繁に給仕に来ることはない。

前菜からデザートまで予め卓上に準備されており、それを二人きりで食べる、ということを繰り返していた。

今夜も同じくして、私達は静かな夕餉を楽しむ。

「この食堂、ピアノがありますけれど、誰か弾けるのですか？」

ふと、部屋の隅に置かれたそれが気になって、私は尋ねた。
シゼル様はシチューを口に運びながら、「はて」と呟く。

「そんなものがあつたことすら忘れていた」

「使っていないのですか？」

「少なくとも私はその音を聞いたことがない」

「何のためにあるのでしょうか」

彼は自嘲気味に笑った。

「両親は私に弾かせたかったようだ」

そう言われて、私は鍵盤の前に座って細長い指を流れるように動かすシゼル様の姿を思い浮かべた。

「うわあ、すっごい似合う」

思わず素直な感想を漏らしてしまう。

「まあ結局、一度も触ってなどいないが」

「どうして？教養として習っていたのではないのですか？」

王族がどうかは知らないが、貴族の間ではよくあることである。
我が家でも時々母が弾いていたものだ。

「違う。両親は私が視力を失ったために、それを覚えさせたがった」

私は息を詰めた。しかし彼は何てことないように食事を続けている。その空気が不機嫌そうでないことを確認して、私は会話を続けることにした。

「それはまたどうして」

「私が昔絵を描いていたことは話したな？」

私は「ええ」と頷く。確かシゼル様が王族であることを暴露したとき、そんなことを聞いたような気がする。

「昔の私の生活において、それは大きな位置を占めていた。正確には絵を描くことではなく、美しいものを視界に収めることであったが、どちらにせよ同じだ。盲目になったとき、私は心の拠り所を失ったも同然だった」

「その時、精神が不安定になったのでしたっけ」

一呼吸置いて、シゼル様は頷いた。

「それで、両親は音楽が絵画の埋め合わせをしてくれれば、と踏んだらしい」

「成る程。でもシゼル様は興味を示さなかったのですね」

「ああ。芸術に関しては一度痛い目を見ているからな。そこに平安を見出すのは、私にとっては酷く虚しいことに思えた」

彼が自分の心の内を晒すというのはよくあることではない。私は食事に手も付けず、一心に彼との対話に集中する。

「ではあなたは、それからどうやって精神の安定を得たのですか？」

するとシゼル様は虚を突かれたような顔をした。不思議に思いつつも、私は続ける。

「私が見た限りでは、シゼル様はとても不安定な人間には思えないのですが。だとすれば、あなたを変えた要因が何かあるのでしょうか？」

それを是非知りたいと思った。そこに彼の核心がきつとある。ハインさんとか言いやがったらどう自分の墓穴を処理しよう、と思わないでもないけれど。

シゼル様は目を細めて私を見つめた。そしてぽつりと、愉快そうに呟く。

「あなたがそれを聞くか」

「へ？」

「私は以前言っただけだが。あなたには精神安定剤の効果がある、と」

ぱぱぱぱーん、と私の後頭部で勝利のファンファーレが鳴り響いた。

口元がにやにやと歪んでしまうのを抑えられない。今私の顔を見る者がこの場にいらなくて良かった、と心の底から思った。恐らく私は今、みつともないにも程のある表情をしている。

しかし嬉しいことに違いはないのだが、恥ずかしいことにも違いなので、迷った挙句口を突いて出たのはこんな言葉だった。

「シゼル様って、女の人口説くの上手そう」

言ってしまったから後悔したが、彼は笑みを深くした。

「それはそれで本望だ」

「なっ！魔性発言ですか！」

「あなたがこれで落ちるのならば本望だ、という意味だ」

余りにもさらりと言われたので、私は固まってしまった。

えーと、これってそういうこと？私今浮かれていいの？

まじまじとシゼル様を見つめるが、その顔は面白そうに笑みを湛えているだけである。

普通こういう類の言葉を発するときって緊張したりするものではないだろうか。少なくとも私は大いに緊張した。ええ緊張しましたとも。今考えればポルさん相手によくあんなけなしの勇氣絞り取れたなっくらいに。

しかし眼前の彼は余裕ありまくりであり、それだけに疑念が湧いてくる。

結論。この件は保留。

「やっぱりシゼル様は魔性です」

私が口を尖らせて呟くと、シゼル様は静かな声で笑った。その響きと彼の笑みが一瞬翳ったような気がしたが、次に彼は真面目な顔に戻ったので、そんなことはすぐに忘れてしまった。

「話が変わるが、私は明日夜明け前に出掛ける」

「深夜のお散歩ですか？」

「いや。南館に行く」

私はあらん限りに目を見開いた。即座に声を潜める。

「だ、脱走ですか？」

シゼル様は鼻を鳴らした。

「違う。父親に呼び出されたので南館に行つて来る」

「えええ。い、良いのですか？それで」

「国王がそう言うのだから良いのだろう」

「そういうことって度々あるのですか」

「いや。今回が初めてだ」

「どうしてまた……。王様がこちらに来たほうが色々都合が良いでしょうに」

シゼル様は開けた口を一度閉じてから、「そうだな」と言った。

そしてまた口を閉じる。

彼は何やら事情を知っていそうである。そして、事情を私に話す気はなさそうである。

私は心の中で溜め息を吐いた。

「正確には何時出発ですか？」

「三時に南館に、とのことだったから、十五分前には出る」

「三時！起きるのが大変そうです」

「一番人に見つからなさそうな時間を選んだのだろう。同じ理由で、帰りも明後日の同じ時間になる」

「同じ敷地内だったのに、日帰り旅行みたい」

「そうだな。だから明日一日あなたに休暇をやるう。好きなことをするといい」

ん？

私は数秒絶句する。

「ちょっと待ってください。勿論私も一緒に行くのですよね？近侍ですものね？」

懇願するように念を押したのだが、彼はあっさり首を横に振った。

「いや。あなたは留守番だ」

「なあつ。し、シゼル様お一人で赴くのですか？」

「私にはミルキアが同行する」

「酷い！近侍の私を差し置いてどうして……！はっ、まさか浮気ですか！私とシウルツは除け者ですか！」

シゼル様が聞こえるように溜め息を吐いたので、私は口を噤んだ。私のほうはさっき溜め息を心の中だけにとどめておいたのに、この男ってばわざとやりやがったな。

「理由は言えない。今は」
「またそれですか」

唇を噛んでシゼル様を睨んでいると、彼はふいに優しげに表情を緩めた。

「あなたにこの館の留守を預ける。できるな？」

「さつき休暇だって言ってたじゃないですか」

「基本的には。しかし私が居ない間の主はあなたとしておく。変事が起きたときの対応は任せる」

私は無言で、冷めた料理を口に入れる作業を始めた。冷めているとはいえフェイの作る食事は美味しい。はずなのに、今は味がしなかった。

「返事をしろ。オルカ」

終いにはそう言われて、私はやっと不機嫌な声で「はい」と答えた。

シゼル様は小さく笑った。

「信じているからな。オルカ」

「私も信じてますから。シゼル様」

すると彼は一瞬動きを止めて、大きく頷いた。

「ああ。約束は守る」

つい私も、スプーンを口に運ぶ動きを止めてしまった。

何だ。ちゃんと覚えててくれたんだ。私の心を静める、あの約束。

『あなたから離れない限り、私はあなたを離れはしないし、離しはしない』

どんな甘言よりもその一言が確かなもののように思えて、私は仕方なく彼を許してやることにした。

次に味わったスープの味は、冷たいのに温かった。

44・シュルツ

暗闇と静寂の中、私は自室の扉を背にして立っていた。

手にした燭台の灯が室内を照らし、巨人のような私の影が壁にかかる。

虫の音もいつの間にか絶え、冷えた空気に耳が痺れた。

ふいに廊下から扉の軋む音が聞こえてきて、私も慌てて扉を開けた。

同じく燭台を手にしたシゼル様と鉢合わせる。

彼は呆れたように目を細めた。

「目覚ましの音が聞こえたからもしやとは思ったが。寝ていていいと言わなかったか」

「見送りです。庭園までなら、良いでしょう？」

「構わないが、それならそれで身支度の世話をしてくれればいいものを」

「そうしようとは思ったのですが、簡単には起きられなかったのです。何とか起きて、ついさっき自分の身支度を済ませたばかりです」

「あなたに近侍は向かな」とシゼル様はぼやき、廊下を歩き出した。そんなことは百も承知の私も、後を付いて行く。

館の門のところで、ミルキアさんが待っていた。

彼女は私とシゼル様の姿を見て、口元に小さな笑みを浮かべる。それを見ても私は微笑み返すことができない。小さな妬みもあるのかもしれない。しかしそれ以前に、実家の面々やシゼル様の笑顔

に良い思い出のない私は、最近笑顔恐怖症のようなものにかかってきている。色々末期だ。

「見送りですか。オルカ」

「そうです」

つい素っ気無い答え方になってしまった。

ミルキアさんはそんな私を見て、何故か逆に笑みを深めた。その表情は私の不安を煽る。

「ミルキアさん、シゼル様のこと絶対絶対帰してくださいね。でないと私、シュルツと駆け落ちするので」

そう言つと、ミルキアさんは肩を竦めるのであった。

「それじゃあこれを機に乗り換えようかしら」

「なっ。み、ミルキアさん、その気持ちは大いにわかりますけれどもね、」

「冗談ですわ」

笑えない。全く笑えない。

「普段言わなくせに、こういつときだけ冗談かますとかよしてください」

「ごめん遊ばせ。あなたが意外にも素直なものだから、つい」

首を傾げる私を流し見、「ではわたくしは畑の手前にて待つております」と残すと、ミルキアさんは優雅な早足で去って行った。気を効かせてくれたのかもしれない。

彼女の気配が消えると、シゼル様はおもむろに手を差し伸べてきた。王家の晩餐でのこともあり私は一瞬迷ったが、結局己の手を重ねた。幸いなことに今回は手を取り上げられることはなかった。

彼は私の手を長い五指で包むと、歩き出す。

一か月程前、皇太子様ともこうして歩いたのだっけ、と私は思い出した。しかしその時よりもずっと安心した心地を感じる。この盲目の男に、全てを委ねても良いように思える。

暗くてよく見えないが、石階段を一步進むごとに足裏に柔らかな落ち葉の感触がある。

独りで歩く闇の中は得体が知れなくて怖いものだが、二人で歩く闇の中には平穏を感じた。

あれ。そういえば私、帰りは独りか。

嫌な思考が頭をかすめてしまったので、それを振り払うように、私は言葉を夜に投げた。

「私もいつかシゼル様と、外出できるのでしょうか」

一呼吸置いて、彼の背中から応答がある。

「したいのか？」

私は首を捻った。そう言われると、そういうわけでもない気がする。

「あなたはどなのですか？」

「私はどちらでもいい。どこにしよう、私の視界は変わらない」

酷くつまらなさそうな声が静かに響いた。しかし包まれた手には力が込められた気がする。

「であれば、私にとつてもどちらでも良いことかもしれません。私はあなたを離れません」

シゼル様は鼻で笑ったようだ。
そして小さな声で囁いた。

「良い心がけだ」

そのとき私は違和感を感じた。

彼の言動のどこがおかしいのかと言われれば、それは明確ではないのだが、自覚してしまうとこんな違和感の前にもあつたような気がする。

何となく、もやもやした。彼の気持ちと私の気持ちに矛盾やずれ違いのようなものが生じている気がする。

唯一幸いだつたのは、複雑な心境に意識を傾け過ぎていたせいで、独りの帰り道が全く怖くなかった、ということであろうか。

「シウルツつて、ミルキアさんのどこに惚れたの？」

「いきなりやって来て第一声がそれかよ、お前」

明るい空の正午過ぎ、私は玄関前の噴水の縁に腰掛けて、シウル

ツで暇を潰そうと試みていた。

朝と晩は随分と冷え込むものの、晴れた日のこの時間帯は日陰でなければ外でも十分過ごしやすい。背後で響く流水音も、未だ寒々しいとまでは思わなかった。

やや不本意ではあるものの、折角の休暇ということで、私はとりあえずお昼前まで睡眠を心行くまで楽しんだ。起きた後は使用人達と共に朝食兼昼食をとる。

さあこれから本でも読んで過ごそうかな、などと考えたのであるが、久々の”独り”というのがどうも落ち着かない。要は寂しくなつたのである。

そういつたわけで、私の姿は館の前の広場にあつた。

門番のシュルツは職務に忠実で、私が話しかけても前方に気を配ることは怠らない。しかし私の発言には答えてくれるようだ。何だかんだで面倒見の良い人物であると、私は彼のことを認識している。暇潰しには絶好のターゲットである。

「まあまあ。コミュニケーションは人間関係の潤滑油なわけよ」

「それでもってどうしてそんなそこの女子学生がするような話題が出てくるんだよ」

「ガールズトークと言ったら恋バナでしょう。私はこの前したわよ、ハイネさんと」

「俺は男だっつの」

「それで？どんなところに惚れたわけ？」

「えー、そうだなあ。しつかりしてそうで変事が起こると途端にボ口が出たりするギャップに萌えた」

シュルツは「そうだなあ」とか考えるような台詞を吐いた癖して、

すらすらとミルキアさんの萌えどころについて語った。常日頃から考えているに違いない。

「マニアック過ぎて参考にならないわ」

「何の参考にするんだよ」

「好きな人を射止めるための」

至極真面目に答えたにも関わらず、彼の背中越しに噴き出す声が聞こえた。

「おま、そりゃあ俺の意見じゃ参考にならねーよ。何もかもタイプが違い過ぎるだろ」

「ちよつと何それ。あなた私の好きな人知ってるって言うの？」

私は無然とする。

「は？隠してたのか？」

「っていうか基本私はばらしていないのだけれど」
「ばればれだぜ？」

私がシュルツに聞こえるように舌打ちすると、彼はげんなりとした様子で「腐っても貴族の令嬢だろうがよ」とぼやいた。

相手がシュルツというどうでもいい男なので別段恥ずかしくもないが、本心を見透かされているというのが面白くなかった。

「まあ無理して射止めようとしなくてもいいんじゃないの？むしろその心意気さえあれば、大丈夫だと思うな、俺は」

「シュルツの癖に生意気だわ」

「明らか俺のほうが年上だろ……。ああわかった、おまえ拗ねてんのか。旦那がうちの嫁さんとお出掛けに行ったから」

彼如きに凶星を突かれてしまったのが悔しくて、私は鼻を鳴らした。

「べ、別にミルクアさんに嫉妬してるわけじゃあないわよ。そりゃあ羨ましくはあるけれど。でもシゼル様って秘密だらけで、どうして私が駄目でミルクアさんが大丈夫なのか、とか、教えてくれないから釈然としないのよね」

「ああ、そういうこと」

「シウルツは知ってそうね、色々」

「それなりに知ってるけど、教えないぜ？教えないのがあんたのたまだからな」

「何よそれ、優しさ？」

彼は肩を竦めてみせた。

「その通り」

いらつときたので、傍に落ちていた手頃な小石をその背中に投げ付けてやった。シウルツは大袈裟に身をよじる。大変愉快。

「いつて。……おまえさあ、最近特に遠慮がなくなってきたるよな。来たばかりのときはまだ理性的に動いてたのによ」

「あらあら、よくご覧になっていらっしゃるのね。そんなに私のことが気になる？」

すると今日初めて、シウルツが私の顔を見た。それは一瞬のことであったが、その短い時間でも彼の目つきが真剣なものであることはわかった。

再び前方に視線を戻したところで、彼はぼつりと呟いた。

「気になるさ。あんたは旦那の……近侍だ」

私は彼の後姿を見つめた。陽光を受けてその茶色の髪が黄金に輝く。その逞しい背中は何故だか悲しげに見えて、優しい獅子のように私の目に映った。

「シュルツって、多分この館で一番シゼル様に愛情持ってるわよね」

「おいおいよしてくれよ。俺の一番は奥方だぜ」

「うるさい。あなたが一番が誰かとか、そういう話じゃないのよ。何ていうか、シゼル様のことを一番気遣ってるのはあなたなんじゃないの？って話」

少しの間沈黙があり、彼は逆に聞き返してきた。

「あんたはどうなんだよ」

「私は抜きよ。私入れたらぶつちぎりで一位だわ」

「あんだけ我が佂通しといてよく言うわ。……まあそうさな。俺は昔親衛隊の一人だったから、この館に来る前から旦那に仕えてたし。それに俺達は旦那に恩があるから」

シュルツはいつになくしんみりとした口調で言った。

私は彼の背中に向けて尋ねる。

「私が聞いてもいい話？」

「んー……ま、いいかな。これくらいなら」

そうして彼は、ぽとりぽとりと渴いた大気に言葉を落とし始めた。

45・弟

ミルキアさんには歳の離れた弟がいるらしい。

シュルツ曰く外見こそそこそ似ていれど、中身は正反対だそう
で、ミルキアさんが静だとすれば、弟さんは動とのことだ。直情的
で単純で熱血。成る程確かにミルキアさんとは真逆である。

彼も王宮勤めで、王家親衛隊の一人だった。シュルツとはかつて
同僚だったことになる。

ミルキアさんとの出会いには彼が関係しており、その後の恋の発
展にも弟さんは多大なる貢献をしたらしい。シュルツはこのくだり
を詳しく話したそうであつたが、長くなると踏んで私は彼の期待に
は敢えて答えなかった。

要はこの弟さんは、シュルツとも懇意の仲であつたということだ。

しかし弟さんの、そのある意味愛すべき性分が災いして、彼等の
将来は本来の道を大きく逸れていくこととなる。

それはシュルツとミルキアさんが結婚した後、二年程経つた頃の
ことである。

当時キース派と呼ばれる反政府組織が存在していた。

この組織のことは私の記憶にも残っている。

元は他国からの難民となつた者の子孫達を中心に結成した集まり
で、現政府に不満を持った他の者達も加わり、次第に大きくなつて
いったグループだ。

王家にとって脅威とまではいかないものの、大小様々な抗議行動
は、ツェーヴラーグ内において随分と物議を醸していた、というの

が私の認識だ。王宮の周囲をデモ行進したり、至るところで演説を繰り広げたりは勿論のこと、劇場を占拠して王家を糾弾するシニカルな劇を上演したり、果てはユーティス家が経営する王家御用達の呉服屋本店に爆竹を仕掛けられた、なんてこともあった。

そういったわけで、私もこの組織のことを覚えていたのである。

一見阿保な集まりであり、私もそう思っていたのであるが、シュルツ曰くこのキース派、核となる部分はかなりの過激派だったらしい。

実行前に強制解体となったものの、皇太子暗殺、なんてことも目論んでいたそうだ。現在の皇太子様は野生の王子デューダ様だからまだ生き残れそうではあるものの、当時の皇太子シゼル様なんて、あつと言う間もないくらいにあつさり殺されていそうだ。彼は自分を生かす術を持ち合わせていないように見える。未遂に終わって本当に良かった。

キース派という不穏因子は王宮内にも入り込んでおり、ミルキアさんの弟さんもそれに影響された者の一人であった。

彼はその頃シゼル様の直属になったばかりで、それは余りにもタイミングの悪過ぎる異動だった。

当時シゼル様は、教育や政務の手伝いなどの成すべき務めは必要最低限にとどめ、他の殆どの時間を絵を描くことに費やしていたらしい。

弟さんの異動前にシゼル様に仕えていたシュルツの証言によれば、少し前まではシゼル様は勉強も政務も至極真面目に果たしていた。彼に何があつてそのような生活になったのかはわからないが、つまりはこの時の彼の生活態度は、普段の彼ではなく、異常なことであった。

しかし弟さんは、真面目なシゼル様を見ることができなかった。

彼がシゼル様のことを、「快樂の追求に忙しい不真面目な皇太子」との感想を抱いたのも無理からぬことであつた。

時を同じくして弟さんは、これまたタイミングの悪いことに、キース派の同僚から「皇太子暗殺に一枚噛んでくれないか」と持ちかけられた。流石に弟さんもそこまでぶつ飛んだことは考えられなかったようで、その件は断つたらしい。しかし協力こそ遠慮したものこの同僚の相談を深く聞いてしまった弟さんは、現王家の体制に疑問を持つくらいには影響を受けてしまった。

そんな前提があつた上で、シゼル様の視力を奪つた、あの嵐の日がやって来る。

弟さんともう一人の騎士はこの時シゼル様の部屋の警護に当たつており、轟音を聞きつけて部屋の中に飛び込んだ。
硝子破片の被害を受け顔面血だらけのシゼル様を見て、彼はこう思つたそうだ。

この人は死ぬかもしれない、それはこの国にとって良いことかもしれない、と。

そうして、人を呼ぼうと駆け出す同僚を呼び止めたのだ。その同僚を説き伏せ仲間につけた弟さんは、彼と協力して騒ぎを聞きつけて来た人達を何とか足止めし、時間稼ぎをし出した。早く言えば、その間にシゼル様が息絶えれば、そうでなくとも重傷を負えば良い、と願つたわけである。

結果から言うと、50%は彼の思惑通りで、50%は予想外の事態となり、彼自身からしてみれば100%上手くいかなかった。

まず思惑通りの50%。それが弟さんが駆け付ける人々を足止めたことによるかどうかは定かではないが、シゼル様は確かに重傷を負った。そして最終的には精神を病み、王として立つことはできないと判断された。

予想外の50%、これは本物のシゼル様、つまり現ディード様の存在である。シゼル様が王になることはなくなったものの、無傷のディード様が彼と入れ替わり、王家は恙無く存続することとなった。そして弟さんは皇太子が入れ替わった事実を知らない。表向きには皇太子の負傷は幸い完治し、何事もなく生活していることになっているのである。つまり彼にとっては全ての苦労は水の泡だったことになる。

弟さんは熱血馬鹿ではあったもののそれなりに真つ当な人間ではあったから、咄嗟に己がしでかしたことに関しショックを受け、そして全て正直に自白した。

獄中ではミルキアさんにこっぴどく怒られ、本気で反省しているふうでもあった。

しかし、弟さんの犯した罪は大きい。

シゼル様は死んだわけではなかった。弟さん自ら傷つけたわけでもなかった。彼の行動だけを見るのならば、ただ見捨てようとしただけであった。

しかしその相手は王族であり、皇太子である。政府は償って許される罪ではないと判断し、彼は終身刑を言い渡された。

そのときシゼル様が、彼の身を救ってくれようとしたのだという。精神を病み幽閉されようとしていたとき、シゼル様は北東館で働く者として弟さんを指名したのである。本来館の労働者は王や廷臣によってある程度決められていたのだが、シゼル様には一人だけ自分で選ぶ権利を与えられていたのだそうだ。条件は相手の承諾であ

り、そのたった一人に、シゼル様は弟さんを選んだ。

しかしシゼル様の選択は受け入れられなかった。弟さんに、ではない。弟さんは彼が自分を働き手として指名したことなど全く知らない。それ以前に、王様や廷臣に反対されたのである。

まあ普通に考えてみれば当然の反応である。皇太子を見捨てようとした人物が皇太子の下で働くなどということを、容認できるはずもない。一般的に考えて、そのような人間が主に忠実であるわけがないし、逆に主の身が危険である。

よって、シゼル様の申し出は却下となった。

折角の彼の恩情も無意味になってしまったわけであるが、そこに目を付けた人物もいた。

ミルキアさんである。

彼女は彼女なりに弟想いな姉であり、猛省する弟さんに、どうにか更生するチャンスを与えたいと思っていた。そしてかつての同僚であったシュルツも彼女と同じ願いを抱いており、特にミルキアさんの苦悩を目にして、彼女の願いを叶えてやりたいと思った。

そこで、弟さんを助ける素振りを見せたシゼル様に、二人を代表してシュルツがこう頼み込んだそうだ。

「旦那、お願いがあるんだ。ネフィスの処分を国外追放にしてくれるよう、上に掛け合ってもらいたい。もしそうしてくれるのであれば、俺と妻のミルキアは旦那に忠誠を誓う。ネフィスの代わりに、俺達が北東館で仕えるよ」

そしてシゼル様はその条件を呑み、弟さんは国外追放、シュルツとミルキアさんは北東館にてシゼル様に仕えることとなったらしい。

シウルツの背から発される言葉達を、私は貪るようにして受け止めていた。シゼル様の過去に関わることであるから一言も聞き漏らさんとして注意を傾けていたのであるが、それにしても最初に出てきた言葉は陳腐な感想にしかならなかった。

「そんな複雑な、経緯があつたの」

私が発する掠れた声に、彼は苦笑を漏らした。

「ここの館に住んでる奴等は皆複雑だぜ。旦那と共に生涯をここで過ごすことを承諾した人間達だからな」

「え、そうなの？皆も幽閉されてるわけ？」

「旦那のことばらされるわけにやいかねーだろ。俺等は基本王宮内であれば自由が許されてるけど、まあそれも王家の手の届く範囲で監視されてるってことだな」

「じゃあ私とシゼル様以外の人は畑の外にも出られるんだ」

「つつても滅多に出ないけどよ。出る必要もそんなにないし。俺は俺で謹慎処分で左遷中だし」

言つてシウルツは肩を竦めた。

そつえばシゼル様も左遷がどうのこつと言っていた。

「何それ」

「あんたのせいだよあんたの。ほら、初めてあんたがここに来たとき、ミルキアの名前出されて畑を通しちゃったろ？」

「ええ」

「あれは俺が門番やり出してから最大の失敗だった。んでそれを咎

められて現在左遷中なんだよ。最近俺が仕事してるときはここにしかいないだろ？」

「ああ、そういうこと。表の仕事はさせてもらえないのね」

「そ」

「やだ、私のせいにしないでよ。あなたが勝手にミルキアさんの名前に怯えたんじゃない」

「あーもーほんとに馬鹿だった。しかしいくら騎士だったって奥方はやっぱこえーんだよ……」

尚もめそめそと嘆くシュルツは無視して、私は気になったことを口にする。

「でもミルキアさんって北東館でシゼル様のために働いてるわけじゃないわよね。本館侍女長だし、何か特殊な立場なの？」

「ミルキアはここに来る前から侍女長に就いてたからな。目立つ立場だし、異動なんてことが大々的に知れ渡ったら、余計北東館にスポットライトが当たっちゃう。加えて結果的にだけど、ミルキアは王家と北東館を繋ぐ一番デカイ連絡パイプになってる」

「ああ、そうなの」

「それだけに監視の目も強いし、探りも多いし、多分相当のストレス背負ってやってるよ、あいつ」

言って、シュルツは我がことのように苦悩の溜め息を漏らした。

46・想い人

今まで一番大切にしていたものに裏切られた私は、ではこれから何のために生きるかという難題に直面した。

そして酷く単純ではあるものの、これまで己のために生きてきたのであるから、これからはせめて他人のために生きようと結論づけた。

早く言えばそれも自分のためであることは承知していた。私は人との繋がりを求めることによって、自分を保とうとしたのである。

手始めに私が人生を狂わせてしまった男、ミルキアの弟を、出来る限りで救済しようとした。最初の試みこそ失敗したものの、結果的には彼の罰を国外追放に下げてやれた。

しかしその代償として、ミルキアとシュルツは私と共に幽閉された。これはいわば人質のようなものである。弟本人には、今後ツェーヴラークに近付こうものなら、姉とその伴侶の身の安全は保障できないと伝えてあるそうだ。

彼等から申し出たこととはいえ、私は結局二人の人生をも狂わせてしまった。

そこでやめておけば良いものを、この頃の私はそれでも諦めなかった。

視えぬ体でも、束縛された状態でも、できることがあると信じた。

だが、その意気込みは無駄であった。

私がすべきことを探しに行けば、誰かの仕事が増える。誰かを手伝おうとすれば、身分の壁が邪魔をする。コミュニケーションに関

心がなかったため、気の効いた言葉のひとつも出てこない。

そもそも前提として、私は既に多くの人間の人生を狂わせている。北東館で働く者なんて、皆犠牲者の一人である。

ある日庭師にこう言われた。

「私達にあんたがしてやれることなんて、あんたが息をする、ただそれだけ。そうすれば私達の生活は自然と回る」

そのとき私は悟った。

周囲の人間が、存在する以外のことと私に何かを求めたり、頼るなんてことはないのだと。

繋がりによって自分を保つことなど、私にとってはおこがましい願いなのだ。

私は、接触した人間の生涯を破壊する能力があるらしい。
であるならば、私にできることはひとつだった。

他と関わらないようにして生きること。
ただそれだけだ。

「親愛なるオルカ・ユーデイス様

次第に緑も青々と茂り、来る夏に地中の虫も胸踊らす今日この頃、
如何お過ごしでしょうか。

なんてね。よく回りくどい手紙のやり取りで攻防を繰り広げるあなたとお父様の手法を真似てみました。なかなか詩的な書き始めでしょう？

それはさておき、とうとうこの日がやって参りました。

私は今日、ユーデイス家を出てウルグ家に嫁入ります。

大いに寂しがってくださいって構いません。オルカのこれから感じるであろう孤独を持つてしても、今まであなたが私にしかしてきた数々の仕打ちには敵いませんから。

極め付けはあの婚約指輪の破壊ですからね。

すっかりにも程があります。

彼とその家族に何て説明しようか、本当に迷ったわ。迷った挙句、結局正直に姉の仕業だと打ち明けましたけれども。あなたの阿保ぶりは尾ひれ背びれがついて有名だから、皆納得してくれました。

私初めて阿保でも役に立つことがあるのだなって、感心したわ。

まあそもそもあなたが阿保でなければ、指輪を壊したりはしなかったんでしょけれど。

何だかんだ色々あったけれども、ユーデイス家で過ごした年月は退屈しませんでした。

むしろたまには退屈と呼べるゆとりが欲しかったくらいだわ。

まあそういつたゆとりはこれから沢山あるのだろうと期待してます。ウルグ家は基本的に皆おっとりしていて親切な方ばかりだからおっとりが過ぎて天然馬鹿な珍事件が度々起きたりしてるらしいけど。ユーデイス家の策略馬鹿な事件よりは平和的でしょう。

勿論これからも頻繁に帰って来るつもりだから、その時のためにお茶菓子はストックしておくように。

それじゃあ今後ともよろしくね。

カノン・ユーデイスより」

少し褪せた色の便箋を、燭台の炎がゆらゆらと照らした。

時刻は午前二時半を回ったところである。

無理に起きているつもりはなかったのだが、シゼル様の居ない日は私には長過ぎたのだろう。

彼がここに戻って来ること。そして、本当に戻って来るのだろうか、という小さな疑念。それだけでそわそわしてしまって、眠るに眠れなかった。

起きて待つことを決めた私だったが、不安と寂しさでどうにも落ち着かない。

それで、行儀見習いに来るときに家から持ち出して来ていた何通かの手紙を読むことにした。

行儀見習いの期間は一年と最初から決まっており、その間私がホームシックにかかるであろうことは予測していた。

気休めとして荷物の中に手紙を入れた、当時の私を褒めてやりたい。しかしそれは叶わないので、私は今現在の私を褒めることにする。オルカ、あなたったら本当に賢い子。

既に二通読んだ後で、この手紙に行き着いた。

カノンの結婚式から家に帰って来たとき、自室の机に置いてあったものだ。恐らく侍女に頼んでいたのだと思う。

カノンは真面目な人間であり、けじめを大切にしていた。

だからこそ私が婚約指輪を壊したとき、彼女が私の気持ちを
見ぬふりをしてきたことに關して謝罪をしてきたのだと思う。そし
てだからこそ、私の破壊行動に關しても、後々こっぴどく怒られた。
この手紙も、カノンなりのけじめの表明なのだと思ふ。あの
ときは怒ったものの、もう怒ってはいない、罪は許した。そういう
気持ちを、最後の最後に、彼女はこの手紙に託したのだろう。

今頃どうしているのだろう。

そう独りごちるが、答えなど考えなくても出る。彼女は彼女の居
場所を見つけて、幸せにやっているに違いない。

そのときふつと思ひ浮かんだのは、双子の妹ではなく、シゼル様
の姿であつた。

どうか私の歸結先が彼の隣でありますように。

私は静かに願つた。

ふいに、自室の扉が控えめに二度叩かれた。

私は自分でも驚く程に素早く燭台を取り上げ、扉に向かう。この
一連の動作は、多分本能で行っているのに近い。

私が手を掛けるまでもなく、扉は勝手に開いた。

その先にいたのは、銀髪に瘦身の男。私の好きな人。

「お帰りなさい！シゼルさ、」

皆まで言つことはできなかった。

シゼル様の両手がおもむろに伸ばされた。私は燭台と手紙を避難

させるために咄嗟に腕を上げる。彼の手は上げた腕の下から背中に回され、私は乱暴に引き寄せられた。その細い指が脇腹の少し後ろに食い込み、じくじくと痛んだ。

ばさりと、首筋に柔らかい感触。くすぐりたい。シゼル様は私の肩越しに頂垂れ、そのきめ細かな銀髪が私の肌に触れているようだった。

「ど、どうしたのですか、いきなり。そんなに私が恋しかったですか」

彼は苦し紛れに発した私の言葉には答えなかった。

代わりに、酷く力のない声で囁く。

「オルカ……すまない」

私は眉を顰めた。

恐らくこの言葉は、私を一日独りにしたことへの謝罪ではない。

それにしても声が悲痛過ぎる。

では、これ程までにシゼル様を追い詰め、私に「すまない」などと言わせる彼の罪とは？

そう思うと、決して良い予感などしない。

両手の塞がった私は、身じろぎでシゼル様に抗議を伝えた。彼は抱き寄せる力を少し緩めたので、私はそれに乗じて拳ひとつ分ぐらいの距離を取る。

「どうして謝るのですか？」

シゼル様を見つめる眼差しに力が入り過ぎて、気付いたら睨んでいた。彼もそれに勘付いたのだろう。宥めるかのように、私の頭に

手を置いた。

その表情は憔悴しており、覇気が感じられない。

「い、」

「私絶対絶対あなたの傍を離れませんから。あなたが私を離れようものなら、ムワ・ドナの果てだろうとルーグル山の向こうだろうと、何処までも付き纏って追いかけて行きますから」

私は一息に捲し立て、シゼル様の口を無理矢理塞いだ。

性急に酸素を補給し、再び言葉を連射しようとしたところで、頭をぼすぼすと優しく叩かれる。口を噤んだ私が彼を見ると、その無表情には少しだけ力が戻っていた。

「約束は守ると、念まで押したではないか。その点はあなたが心配するまでもない」
「ではどうして」

即座に詰め寄ると、シゼル様は自嘲気味に笑んだ。

「問題ない。今のところは」

「質問の答えになっていませんし、理解不能です」

「あなたが私の傍を望むのである限り、謝罪に意味はない。忘れろ」

私は唇を尖らせた。

「シゼル様は本当に隠し事が好きなようで」

彼は「止むを得ん」と言って、私の腕に指を滑らせた。それを掌まで辿って行き、恐らく手を握ろうとしたのだと思うが、必然的に私が持っていた紙切れに気付く。

「これは？」

言うや否や、シゼル様は私の左手から手紙を抜き取り、その感触を確かめ出した。

「ああ。カノンからの手紙です。勿論昔貰ったものですけど」

「双子の妹か？」

「そうそう」

「何故それを城にまで持ち込んでいるのか」

心なしかシゼル様の表情が冷たくなった気がした。しかしその理由がわからない。相手が男なら兎も角として、まさか妹に嫉妬しているわけでもあるまいし。

「行儀見習いを始めるとなったら、一年は碌に家族に会えないってわかっていましたから。少しでも寂しさを紛らわすことができれば、と思って」

そのとき虚ろなシゼル様の瞳に、強い意志が宿ったかのような錯覚を覚えた。しかし直ぐに彼は目を伏せたので、その色は長い銀系で読めなくなってしまう。

薄い唇が、珍しくはつきりとした弧を描いた。但し、不気味に。

「へえ」と呟いた低い渴いた声に何か異様なものを感じ取った私は、一先ず彼から手紙を奪い返そうと左腕を差し伸べた。

しかし彼はすんでのところで私の手をかわす。

その代わりに彼は、私の右手を探り当てるとそれ掴んで、手紙を差し出した。

右手に持った燭台の、炎の中に。

47・仲間

翌朝使用人の食堂に姿を現した私は、皆の訝しげな注視を浴びた。ミルキアさんは片眉を上げ、シウルツとハイネさんは不審げに、ニイや騎士達は好奇に満ちて、フェイとリウは不思議そうに。皆が皆、それぞれの感情を込めて私を見つめた。

周囲が抱く疑問は、私にも簡単に予想がつく。

”何故オル力がここに？”

そう思っているに違いない。

何せ”大事にされている”私は、基本的にこの食堂で食事をとらない。朝昼晩とも、もうひとつの食堂で彼と一緒にするのが通常である。

昨日は兎も角として、今日はシゼル様も館に帰って来ている。

彼が不在だった昨日、あれだけ寂しそうにしていた私を皆も見ているわけである。

彼を差し置いてここで食事をとる私に、疑問を抱かないほうがおかしい。

しかし私は私で、そんな彼等の思考は見当がついているにも関わらず、この件について自分から話そうとはしなかった。

要するに、機嫌が悪かったのである。

突き刺さる視線を無視してヨルダを齧る私に先ず話しかけたのは、空気を読まない女ことニイであった。いや、この場にいる全員の疑

問を代弁したのだから、ある意味空気を読んでいるのかもしれない。彼女はわざわざ席を私の向かいに移動して、身を乗り出さんばかりに捲し立ててきた。

「ねえねえ、どしたのどしたの！？何でオルカがここでご飯食べてるの！？」

「食べないとお腹が空くからよ」

「違うよお！どおしてシゼル様とじゃなくて、ここで食べてるの！？あつ、もしかしてシゼル様と喧嘩したんだ！？」

「その通りよ」

自分では淡々と言葉を発したつもりだったのに、随分と仄暗さを宿した声音になってしまった。今絶対ニイ以外の全員が唾を呑み込んでんだな。

「何それえ！超ウケるう！」

ニイはけらけらと笑って私の毛を逆立てた。
ウケない。何にも可笑しくない。

「何でえっ？何が原因！？」

「手紙を燃やされたの」

皆、虚を突かれたような顔をする。

「まさか昔の男から貰ったラブレター、とか？」

リウが「ラヴ」の部分をやけに強調して言った。

「違うわ。昔の男とか呼べる人間がそもそもいないし」

「やつぱり」とかいう誰かさんの感想が更に私を不愉快にさせる。もうちょっとデリカシーのある奴はいないのか。

「ただの妹からの手紙よ。でも、凄く大切なものだったのに」

私が溜め息を吐くと、シュルツが焦ったように言った。

「旦那にも何か理由があるんじゃないの？」

「そりゃあ、あるでしょうけれども。昨夜は何の説明もなかったわよ。さつさと自室にお帰りになられました」

「だったらあなたはこんなところにいるべきではないわ。シゼル様と話して、不和を解消しなさい」

ミルキアさんは至極真つ当なことを言う。

私は内心で溜め息を吐いた。

みんなしてシゼル様の味方なのね。

主はシゼル様であり、私のしていることは職務放棄とも言えるのだから、一概に私が正しいとは言えないことは理解していた。それでも、今傷付いているのは私なのだ。にも関わらず誰も同情してくれないことに、私はやや拗ねていた。

「そんなことはわかってます。ですが、これは私の感情の問題なのです。今は未だ彼とは話したくありません。ほっといってください」

つんと澄ました顔でそう言うと、それ以上口を挟む者ももついなかった。

食事を終えても、シゼル様のもとに戻る気にはなれなかった。

シゼル様だって、私を捜しには来なかった。

彼は彼で私の何らかに對して怒っているのかもしれない。昨夜のあの言動ははつきりと異常であつたから。

でも、人の手紙を燃やすなんて、人道に反していることは誰の目にも明らかである。彼の行動には彼なりの理由があるのであるが、それにしたって、昨夜の行為自体は悪かつたと思つてくれなければ困る。

向こうから謝つてこない限り、許してあげないんだから。

私はひっそりと決意を固めた。

そんなわけで現在私は仕事を絶賛サボリ中である。

誰かに見咎められるのは厄介なので、屋敷の裏にて身を潜めている。図書室で適当に拝借してきた本を読んで、ここで暇を潰そうとの魂胆である。

屋敷裏に来るのは初めてであつた。

外は寒いかとも思ったが、幸いまだここも陽が当たっているので、これなら何とかやり過ごせそうだ。

直ぐ後ろは森で、館に沿ってゼラニウムや兎草うさぐさの鉢植えが並べられていた。ハイネさんが育てているのだろう。

裏口は二か所。厨房の裏の扉と、それから壁面が四角く窪んでい

るところにもうひとつ扉がある。何処と繋がるのかはよくわからないが、隠れるには絶好の場所だ。

私は古びた扉の前に腰を下ろすと、早速本を広げた。

そして早速邪魔が入った。

目の前の扉が、何の躊躇いもなく開いたのである。

裏口のあるこの窪みは、決して広いものではない。当然前に陣取っていた私は、開いた扉を回避することができなかった。

がつ、と、スカートに包まれた膝小僧にドアの端がぶつかる。小さく呻いた私に顔を青くしたのは、ハインさんであった。

「ちよつと、大丈夫」

「ああ、はい……大丈夫だと思えますけど……」

「何であんたが私の部屋の裏で張ってるの」

「あ、この扉はハインさんの部屋に繋がっていましたか……」

ハインさんは小さく頷き、しかし追求の目を崩さない。

私は膝小僧がじんじん痛むのに涙目になりつつ、どんな言い訳をしようか考えた。思考を巡らせている内にも、ハインさんの視線は私の腿の上に広げられた本に落ちる。

ああ。何にも良い理由が思い浮かばない。

私は肩を落として、正直に今の自分の状況を白状した。

当然私が話を進めるにつれ、ハインさんの顔は冷めたものになっていく。

「そんな馬鹿なことしてる暇があったら、さっさと話し合ってくれ

ば」

私は恨めしげに彼女を睨んでやった。二倍にして返されそうなので、直ぐに目を逸らしたが。

「皆シゼル様の味方ばかりするのですから、参ってしまいます」

「当然。私達の主人はあんたじゃない」

「それはそうですけど。でも、手紙を燃やすなんて行為自体は、彼のほうに非があると思いませんか？」

そう言つとハイネさんは「まあ」と肩を竦めた。その仕草に、私は少々気分が良くなる。

「だから、向こうが謝つてこない限り私は許してあげないことにしたので。別に絶交したとかじゃありませんから。さっきも言いましたけれど、ほつといてください」

ハイネさんは「そ」と呟いて小さく息を吐いた。

この件に関してはもう彼女は何も言つてこなさそうだったので、私は視線を再び本に戻した。

しかしハイネさんはそこを動かない。不思議に思つて見上げると、彼女も一緒になつて私の本を覗き込んでいた。

その目が余りにも真剣、というか、少年のような煌めきを宿していたため、私は座ったままであじろぐ。

「あの？」

そつと声をかけると、ハイネさんは我に返つて私を見つめた。

「この本は？」

質問の意味がよくわからなかったのだが、とりあえず私は本を閉じて表紙を彼女に見せた。『煌石百科』とそこには金文字で書かれている。

「好きなの？」

「ええと……詳しいわけではありませんが、光り物は好きです。綺麗なので」

「綺麗なものが、好き」

確認するような彼女の言葉に、「ええ、はい……」と私は戸惑いがちに頷く。どうやら彼女の何らかのスイッチを知らぬ間に押してしまったらしい。

ハインさんはおもむろに私の片手を掴むと、引っ張って無理矢理立たせた。その際、膝からずり落ちそうになった分厚い本を保護するのも忘れていない。

同じ目線になった彼女は「はい」と本を私に渡すと、真剣な瞳でこちらを見据えた。

「どのくらい、好き？」

今までハインさんが冗談を言ったりふざけたりしているところなどは見たことがないが、そうだとしてもこれ程真面目な顔をした彼女を私は初めて見た。

そしてその顔は、情熱を宿したものであつた。シゼル様への敬愛を語るときなどとは比べ物にならないくらい、彼女は今熱に浮かされたような顔をしている。

この会話の相手が、例えばカノンだったりかつての学友だったりするならば、私の返答は「超好きー」などという適当なもので良いのだろう。しかしこの人の熱意を前にしてそんな回答は、余りにも失礼な気がした。

それで私自身、結構真面目に答えてあげた。

「実家には私専用の宝石ケースと原石ケースが幾つかあります。お気に入りの宝石に関しては、彼等を私が身に付けるなどというのは禁忌です。それは僭越な行為であり、彼等の品位を貶めることになるからです。私はそれらを部屋に飾り、週に一度は必ず磨いてあげてます。名前もそれぞれ付けてます。今でもソラで言えますし、ケースに並んだ石達を見なくても順番に思い出せます。それくらい好きです」

言い終えるや否やハイネさんは、私の右手をぎゅっと自分の両手で握り締めて、宣言した。

「仲間！」

48・人間嫌い

やけにテンションの高いハイネさんに手を引かれて、私は裏口の向こうに連れて来られた。つまり彼女の私室である。何やら私に見せたいものがあるそうだ。

ハイネさんの部屋に足を踏み入れたとき、私は文字通り開いた口が塞がらなかった。そこはまさに彼女の宝の山であった。

裏口から見て手前の壁には、古ぼけた絵画やアンティークと思しき繊細なレース、アクセサリー、ドライフラワーの花束が所狭しと飾られており、奥の棚にはグラス・アイの人形や猫や兎のぬいぐるみ、装飾の綺麗な銀食器が並んでいる。元々そんなに広い部屋ではないのに、向こう側の壁には彼女のコレクション用の棚が三つも並んでいるので、さらに圧迫感を感じる。左手の奥に扉があり、右手には簡素なベッドと格子窓がひとつあった。ベッドの手前には部屋の端から端まで竿がひとつかけられており、そこに数着の服がかけられている。見たかんじクローゼットが存在しないので、もしかしたらこれが彼女の手持ちの服の全てなのかもしれない。

ひとしきり部屋を観察した私は、戦々恐々彼女に尋ねた。

「あのう。ハイネさんがさっき言ってた『仲間』って、もしかして私とハイネさんが綺麗なもの愛好家として仲間だったことですか？」
「勿論」

とても晴れやかに頷いたハイネさんの言葉に、私は戦慄した。

明らかレベルが違うんですけど！

彼女の可愛らしいものを詰め込み過ぎて気狂いの部屋になりつつあるこの空間を前にしたら、私の宝石コレクションなんてちんけなものである。

私は土下座しなくなった。あんなちっぽけな宝石への愛のみで、「好き」などという言葉を使ってしまった己を恥じた。

私の集めたものなど、所詮貴族の道楽である。経済的に余裕があるからできたに過ぎず、何の犠牲も必要とはしなかった。

しかしこれを見る限りハイネさんは、彼女の「好き」を集めるためならば、己の衣服や居住空間をないがしろにすることに何ら躊躇いを感じていないようである。彼女は「好き」なもののために、身を削っているようであった。

すげえ。何だこの純粋な愛。狂ってる。

そしてそんな彼女と同類に括られるなどということは恐れ多く、同時に何か嫌だった。

「え、ええと……スミマセン、私少し驕っていたようです。私のコレクションなんて宝石に限定されていますし、ハイネさんに仲間として並ぶだなんてとんでもないことです」

「そんなことない！」

ハイネさんは興奮した顔で私の片手を両手で握り締めた。

「私感動した！宝石に名前付けて呼ぶだなんて狂ってる！私でさえそんな発想はなかった！」

気狂いに気狂いと呼ばれ、私は軽く打ちのめされた。

そうですか。愛しい宝石達を名前で呼ぶのも狂ってますか。

ふいにハイネさんは私の手を離し、少し距離を置いた。
今更ながら自分のテンション上がりっぷりに恥じらいを感じたのか、目が泳ぎ、頬が少し赤い。

それから、「だから……」と続けた。

「私少し渋っていたのだけれど、あんたになら渡してもいいかなって思えた」

そう言っただけでハイネさんは背を向け、ベッドの下の引き出しを開けてその中を漁り出した。

何をしようとしているのかよくわからないが、此処でお暇させてもらうわけにもいかなそうだ。
手持無沙汰になった私は、ハイネさんのコレクションをのんびりと眺める。

「これ、全部ハイネさんが集めたのですよね」

「そう。私の今までの人生」

「よく、北東館で働くことを了承しましたね」

何とはなしにそう言うが、暫く返事はなかった。不思議に思った私がハイネさんのほうを振り返ると、彼女は彼女で不思議そうに私を見ている。

「どうして？」

「だって、こんな束縛された状態では、綺麗なものを集めるのだって難しいでしょう？」

ハイネさんは「まさか」と言つて肩を竦めた。

「お城に宝物が眠ってるのは昔からの定石。給料が入ったら、こういうものが欲しいっていうのを上の人に伝えてもらう。お城は古くて綺麗なものが沢山あるから、あとはもう選り取り見取り。普通はできないことなんだろうけど、此処で働いてると同情でそういう取引もできる」

「な、成る程……」

私は唸った。

今度私もそのやり方を教えてもらおうかしら。最近愛しの宝石達に接してないから、心の潤いが足りない気がするのよね。

「もしかしてハイネさん、それ目的でここで働くことになったのですか？」

「違う。働く前は、そんなことができるって思わなかったし。でも、それがなくても、私にとって此処は理想の環境。楽園。あんなに広い庭を、私の好きに管理できる。それに……」

言いかけて、一度ハイネさんは口を噤んだ。そして、窺うような視線を投げてくる。

「あんたは、北東館の研究内容、知ってるんだっけ」

「ええと、シゼル様の香りの研究のほうですか？それとも、ヘイヴィーボーン？」

「何だ、知ってたの」と安堵の表情を浮かべると、彼女は続けた。

「ヘイヴィーボーンのほう。あの花は、素晴らしい。とてもとても可愛い。一日中愛でていたい。花の中で、一番好きなの」

そう言ってハイネさんは恍惚の表情を浮かべた。ほう、と色っぽい吐息まで出している。

彼女の変人ぶりに、流石の私も冷や汗を流した。

「……つまり、ハイヴィーボーンを好きなだけ育てることが目的だった、と？」

「目的っていうか、必然的にそうなった結果が私の理想と合致してただけ。外にいたときも、我慢しきれなくて。私、ハイヴィーボーンを秘密裏に栽培してたの」

そついう彼女は、さながら恋人との駆け落ちを告白するかのよう
に顔を赤らめている。

私はそこで得心した。

ああ、この人、シゼル様のことなんて実は眼中にないんだわ。ハイヴィーボーンに首ったけで、そこに向ける愛に比べれば彼に向ける愛は実に些細なものなのだ、きつと。

しかしこの前シゼル様への敬愛がどのようなものを語った彼女の姿は、私の目には実に高尚なものに映った。だというのに、今ハイヴィーボーンへの愛を語る彼女がより輝いているということは、実はこの女、空より広く海より深い愛情キャパシティの持ち主なのかもしれない。実に化け物である。

「それがばれて捕まったのだけれど、私の栽培技術に着目されて、
此処で働かないかって持ちかけられたわけ」

「へ、へえ」

シュルツの語ったデリケートで複雑な経緯いきほひとは随分違うな、と私は独りごちた。

やがてハイネさんは目当てのものを見つけたようだ。レースと布でコーティングされた、二つの分厚い箱を取り出す。彼女はそれを持ってベッドに腰掛けると、私に隣に座るよう促した。

「絵を見るのは好き？」

「ええ。人並みですけど」

ハイネさんは頷き、片方の箱を私に差し出した。

「見てみて」

私はそれを受け取り、膝の上に置くと、そつと蓋を取り除けてみた。

息を呑む。

それは墨で緻密に描き込まれた、デッサンの束であった。ざつと見たかんじ、五十枚はくだらない。

花、空、城の風景、鳥、林檎、時計、そついった日常的に目にするものが、頁を捲る度に生き生きと身を躍らせる。感情を抜きにした、それでいて美しい、澄んだ理知的な観察眼だと思った。

「凄い」と溜め息混じりに言うとハイネさんは満足げな顔をして、もうひとつの箱を渡してきた。

今度は、完成された一枚の油絵が現れた。

それは縦二十cm程の小さな縦長のもので、真鍮の額縁に収まっていた。

半分まで葡萄酒の注がれたワイングラスに、マーガレットの花冠

が立てかけられている。窓際に置かれたものらしく、その背後には硝子越しに柔らかな青空と木々が見えた。

「誰が描いたか、わかる？」

そう言われて初めて、私は絵にサインが入っていないことに気付く。しかし彼女がここでそう尋ねるのだから、もう答えはひとつだと思った。

「シゼル様？」

「正解。もしかして、ご主人様の絵、見たことあるの？」

「いえ、そういうわけではないのですが」

するとハイネさんは少し残念そうに、「そう」と溜め息混じりに言った。

「シゼル様はこれ以外にもお持ちなのですか？」

彼女は悲しそうに首を横に振った。

「多分、持っていない。ご主人様は私の持つてゐる以外の、大量の絵を、焼いてしまった」

「え……」

私は息を詰めた。

「私が救えたのは、これだけ。彼が焼いているときに偶々居合わせ、慌てて未だ灰になっていないものを探して、持ち出したの。ご主人様にばれてるかどうかはわからないけれど、彼は何も言っていない」

「……貴重なもののね」

私は呟いて、もう一度膝上の絵を目に焼き付けるようにじっくり眺める。それから、できるだけ丁寧な所作で蓋を閉めた。

そうして箱をハイネさんに返そうとしたが、彼女は受け取らなかった。それどころか、大量のデッサンが収められた箱をも、私の膝にぼんと置く。

彼女は私の目を真っ直ぐに見据えた。

「これは、あんたが持つているべき」

「え……」

それはとても魅力的な申し出だった。

しかしつい感情のままに頷いてしまいそうになるのを、私はすんでのところで堪える。

「受け取れません。ハイネさんは、これらの絵を必死で救ったのでしょう。だったら、あなたにこそ相応しいものです」

そう言っただけで返そうとするが、彼女は頑なに受け取らなかった。代わりに、一昨日も聞いた言葉を繰り返す。

「私は、シゼル様を敬愛している」

「であるならば尚更、」

「それは、彼の描いた絵が素晴らしかったから。綺麗で、愛おしかったから。だから、この情景を生み出した彼には、幸せであってほしい。これ以上何も生み出せなかったとしても、恐らく彼の心の中には、数々の美しい情景は残っている筈。消えてほしくない。私が彼を敬愛する理由なんて、ただそれだけ」

そのときハイネさんは、初めて私に薄い笑みを見せた。自嘲気味で、悲しげな笑み。

思えば初めて見たシゼル様の笑顔も、彼女のそれと同様だった気がする。二人は少し似ているのかもしれない。きっとこれは、傷付きやすい人の表情だから。

「それだけだなんて……立派な理由じゃないですか」

少なくとも私は、彼への気持ちをそんなふうにはつきりと表現することすらできない。何故彼の傍に居たいのかなどと、そんなことを聞かれると困ってしまうに違いない。

「そうじゃない。だって私は、絵が無ければ彼のことなんてどうでも良かった。他の人に関しても、みんなそう。私は人間自体嫌い。興味が無い。ご主人様に対しても、そういう態度を取ってた。あんたは息してるだけでいいなんて。酷いこと言った」

そう言っただけで彼女は俯いた。荒れた肌の小さな手を、握ったり開いたりしている。

「だからその絵は、私の罪悪感の象徴でもある。好きだけど、苦手だからあんまり見ない。心が痛むから」

ハイネさんは横目でちらりと私を見上げた。その顔は少し臆病で、視線は綻るように感じる。

「だから、その絵はあんたが持って、頻繁に見てあげて。ご主人様の憧憬を共有してあげて。それは、ご主人様の傍を望んだあんたにこそ相応しいものだから」

「あなたは望まないの？」

「言ったでしょう？人間は嫌い」

ハインさんは鼻を鳴らした。やっぱりこういう人を小馬鹿にした表情が、彼女には一番似合っていると思う。

「だから受け取って」と言われて頷きたかったけれど、私はやっぱりその気持ちを押しとどめた。

「シゼル様はこれを、焼こうとしていたのですよね？」

「そう」

「であれば、私がこれを所持していても良いか、彼に聞いてみてもよろしいですか？」

ハインさんは僅かに目を見開いて、それからはっきりと頷いた。

「仲直りしなきゃいけない理由が、またひとつ増えた」

そう言って小さな笑みを湛えた彼女の顔は、とても人間嫌いになど見えなかった。

48・人間嫌い（後書き）

ではまた一か月後にー（・・）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7452w/>

日陰貴族

2012年1月1日21時03分発行